

アングリフ

豆月

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主人公は中学2年生の井村董。

ある日の事。降霊陽毬という女性に会い、ある組織の一員となった。

どんどん友達や家族を巻き込んで行く。

愛や友情や女子中学生達の物語

目次

〈第1話〉運命の別れ道	1
アングリフと言う組織	4
少女の決心	9
両親とのお別れ	13
誕生、紫の戦士	17
〈第2話〉夢の中	20
命は	24
魂の姿	27
奈苗のピンチ	30
初めての戦い	35
〈第3話〉シユラハトとネイヴィー	

愛が欲しい	42
母の命	45
黒い渦	50
親子の愛	54
〈第4話〉愛情	62
運動神経抜群な少女の悲劇	65
幼馴染との喧嘩	69
何も残らぬ人	73
友情はきつと、これからも	78
〈第5話〉青い髪の少女	82
見知らぬ人たち	88
過去のトラウマ	91
敵の気配	95

姿を現した、青の戦士	100	バイオリンを嫌になった訳	145
〈第6話〉萩に芽生えた感情	105	狙われた人	149
気持ち	109	企み	152
娘の存在	113	思い出さなくて良い記憶	155
董と陽毬	116	〈第9話〉青の戦士の心の傷	158
2人の連携	119	3つのカプセル	162
〈第7話〉妹を嫌いな少女	122	ネガティブな心	165
家政婦としての娘	125	罪悪感	169
不安な心	129	運がついていない紫の戦士	172
黒い光	133	〈第10話〉狙われた人達	175
黒い鳥との戦い	137	襲われた人達	179
〈第8話〉バイオリンを弾く少女は		叫び声	183
		精神世界	187

前だけを向いて	191
〈第11話〉見てしまったもの	194
悪いのは	197
暗闇の下に	200
別の世界	203
私の居場所	207
〈第12話〉黒い世界	210
拒絶	214
幻覚	218
剣の意味	221
おかえり	224
〈第13話〉萩の気持ち	228
純粋な紫の戦士は	231

陽毬という名前	234
戦いの世界に生きる者	237
消滅	241
〈第14話〉虚構有影の過去	245
新たな敵の気配	248
古い家	251
純希の出会い	254
純希の行く宛	257
〈第15話〉チョコと少女の出会い	260
敵達	263
呼び名	266
助けて欲しい	270

〈第18話〉分かり合えない人達

始末 | 308

助きたい命が、ある | 305

邪魔者 | 301

疑わない心 | 298

〈第17話〉4人で一緒に | 294

赤いリボン | 290

デタラメな噂 | 287

心強さ | 284

土筆のクラスに転校生 | 280

〈第16話〉4人の溝 | 277

加わった緑の戦士 | 273

支えてくれたあの人の存在
|
放課後の図書室での出来事
|

〈第1話〉運命の別れ道

私の名前は、井村董。中学2年生。普通に中学校に通っていて、特にこれと言った、趣味とか特技とかも何も無い。勉強と運動は苦手。友達はまあまあいる。

家に帰ると、父と母がいるが、父と母は、毎日喧嘩している。それがもう精神的に耐えれなくなつてきてしまっている。2階にある自室にいても1階から聞こえて来る、怒鳴り声。耳を塞いでも聞こえてきてしまう。

父は、シユラハトという組織の組織長で母は、シユラハトの副組織長だ。この町は、4つの組織によつて仕切られている。東がネイヴィー。西が、バタイユ、南が、アングルフ、北がシユラハト。どうして4つの組織によつて仕切られるかは知らない。

私の通つてる中学校は、幼少中高大一貫校で、4つの組織により運営されていて、4つの組織の中心にある。エスカレーター式だが、中学までは義務教育。高校からは通わなくてもいいし、通つていても退学や留年する事もある。他の高校や大学へ行く人もいる。

そして、たまに組織同士での争いが勃発してしまう事もある。その時一般人は、この町から避難しなければいけない。その為、他の町に引越し転校した人だつて何人もい

る。私の両親は4つの組織の中の1つの組織長と副組織長である為、他の組織と争いが起きたら本部に戦闘員と共に残らなければならない。両親は生死を彷徨っている。

だが、そんなことはどうでも良くなった。だって、お母さんもお父さんも私の気持ちを知らずにずっと喧嘩してるんだから。

両親の喧嘩声が聞こえるのが嫌になり、家から飛び出した。気付けば家の近くにある公園の入り口に立っていた。今日はもう家に帰らずここにしよう。木星やベンチに座り、空を見上げた。広いどこまでも続く空を見ると、私の悩みなんて小さいもの。青空の下には悩みを抱えている人が何万人ともいる。大きな悩みを抱えている人だっている。こんな小さな家庭の中の悩みを抱えている私が、ちっぽけな存在だと痛感する。

目を閉じて、空を見上げていると何処からか足音が聞こえてきた。父か母のどっちかだ。私を連れ戻しに来たんだろう。

家に戻る事を覚悟して目を開けると、私の前には茶色の長い髪に赤いワンピースを着て茶色のコートを着てサンダルを履いている知らない女性がいた。きつと私より年上で大人だろう。その女性は暫く、私を見つめてから口を開いた。

「貴方、中学生よね？こんな時間に中学生が出歩いてたら誘拐されちゃうかもしれない

から、危ないわよ。」

「良いんです。別に。」

女性は、私の腕を掴んだ。

「や、辞めてください!!」

「誘拐よ」

「え？」

尻餅をついた。

「あ、あの、大丈夫ですか？」

女性に心配する声をかけたら、女性は頭をかきながら笑っていた。

「ご、ごめんなさい。驚いてしまつて。大丈夫だから、心配しないで。」

女性は、フラフラしながら立ち上がった。

「ならよかつたです。」

「取り敢えず、詳しい事は本部の中でお話ししましょう。外で落ち着かないし。」

そう言ううと女性は、歩き始めた。私はその後をついて行つた。

取り敢えず私は、この子連れてエレベーターで地下に降り部屋まで来た。董ちゃんを座らせ、冷蔵庫に入っていたペットボトルの紅茶を出し、この子に渡した。

「取り敢えず、詳しく説明するわね。あ、そういえばまだ名前言つてなかつたわね。私は、降霊陽毬。このアングリフと言う組織で組織員として働いてるの。宜しくね。」

私が手を差し出すと、彼女は手を重ねてくれて、握手をした。

「私は、井村董と言います。宜しくお願ひします。降霊さん。」

苗字呼びって何だか、堅苦しいわね。

「あ、私の事は陽毬って呼んでくれて構わないから。苗字だとなんだか堅苦しいイメージあるから。宜しくね、董ちゃん。」

でもまさか、今私の目の前にいるのが、シユラハトの組織長の娘だなんて想像がつかない。紫の瞳だから連れてきただけなのに。もしかすると、この子のクラスに、青い瞳や赤い瞳の子もいるのかしら。調査が必要みたいね。と言っても、アングリフに入ってくれるかはわからない。だってシユラハトの組織長の娘なんですもの。アングリフと言う組織の情報を父親に持っていくのかもしれないだから。

「ひ、陽毬さん……。なんか、すみません」

「何が？」

「あ、いえなんでも……。」

「何か悩み事でも？」

そう聞くと、董ちゃんは俯いた。何か触れていけない事に触れてしまったのかと心配になる。

「私：。実は、両親が毎日のように喧嘩してて何か精神的にもう耐えれなくなつたんです。だから、家出考えてたんです。で、両親の喧嘩聞くの嫌になつて公園にずっといようと考えてたんです。たまたま陽毬さんに声をかけてもらつて、だから、その……あわよ

くば泊めてもらおうとまで考えてたんです…。だから、その…ごめ…んなさ…い。」

つまり、董ちゃんはもう喧嘩している両親の所へは帰りたくない。もしかしたら、董ちゃんはアングリフに入って紫の戦士として戦ってくれるのかもしれない。希望はまだ残ってる。

「良いわよ。」

「本当ですか?!」

董ちゃんの顔は、曇った表情からぱつと花が咲いたようだった。少しでもアングリフに興味持ってくれたら嬉しい。そんな浅はかな考えで泊まらせる事にした。

「昨日はありがとうございました。」

結局、董ちゃんを家まで車で送ってきてしまった。もしかしたら、いつか本当にアングリフと言う組織に来てくれるような気がした。

「こちらこそありがとう。考えといてね。アングリフに入る件。」

「はい。勿論です。」

董ちゃんは笑顔で答えてくれた。

本当にそうだったら良いな。
叶わぬ望みと見えぬ希望を持っている私は愚かだと心を自分で痛めつけた。

少女の決心

家に帰った後も、ベッドに寝つ転がり天井を見つめていた。陽毬さんは、そんなに悪い人じゃなさそう。両親は、私がいなくても心配じゃなかったのか。色々モヤモヤする。もう一回アングリフに行こうかな。やっぱりアングリフに入りたいと伝えるべきか。

でも、もし私がアングリフにいる事がばれたら、アングリフが危険な目に遭うかもしれない。そんなのはやだ。何であんなに優しい陽毬さんがそんな危険な目に遭わなくちゃいけないの。

もう、何もかも意味わかんないよ。

毎日毎日、心が壊れるまで両親の喧嘩きかなきゃいけないのも。

私のせいでアングリフが危険な目に遭うかもしれないことも。

その時、部屋のドアをコンコンとノックする音が聞こえ、私は我に帰った。両親と話す時は、アングリフという単語を出さないように気を付けよう。

ドアが開き、部屋に入ってきたのは母だった。母は、険しい顔をしていた。母は、ベッドに腰かけた。

「ねえ、董。貴方は、どっちについていきたい？もうね、私……あの人と一緒にいる事が耐えれないの。毎日毎日、顔合わせると喧嘩ばかりするし。でね、決めたの。離婚しようと思うのよ。だから、董はどっちが引き取るかって言う話でね。親権は、私も颯さんも欲しいみたいなの。最終的には貴方本人に決めて欲しくて。で、パパとママどっちについて行きたい？」

何だ。そんな話か。なんとなくそろそろ離婚するんじゃないかと勘付いてたけど。今更すぎて、私にとつて両親が離婚することは悲しい話のはずなのに涙も出ないや。

「……つちも……いや」

「え？」

「どっちも嫌なの。毎日毎日……喧嘩しておいて挙げ句の果てに今更離婚？」

母の顔を見ると、困っていた。

正直、両親のどっちかに引き取られるくらいだったら、陽毬さんに引き取られる方がまだ良い。

「だ……から……そ

の、今まで……ごめんなさい。」

母の声は、今にも泣きそうな声だった。本当に、お父さんと離れたいのだろうか。本

当に離婚したいのか。

「私に謝るくらいなら、お父さんに謝ってくれば良いじゃない。」

「でも……これは、もう決まっちゃった……ことなの……よ。」

「もういいよ。何で、お互い愛してなかったのに、私のこと生んだの。不幸になるくらいなら、正直生まれてこなければ良かった。でも、子どもは親を選べないから仕方ないのかもね。」

「……董がまさか、そんな事言うまで性格が悪くなってたなんて知らなかったわ!!私は、あんたを生まなければよかった。冷酷な子どもは私の娘じゃないわ」

母は、泣きながらも私を怒っていた。母はそのままベッドから立ち上がり私の部屋から出て行った。

もし生まれてくる家を選べたらもうちよつと、幸せな家庭を選んでたと天井を見上げた。

そのとき、ピンポーンと玄関チャイムが鳴った。誰が来たんだろうと思ひ、一階まで下がりドアを開けたすると、ドアの向こうに陽毬さんが立っていた。

「董ちゃん、どう?決めておいてくれた?」

私には、もう家には居場所がない。家にいたとしても精神的におかしくなりそう。もう決意はついている。

「勿論です。」

「じゃあ、行きましょうか」

「ちよつと、待ちなさい!!」

私は、陽毬さんと一緒に家から出ようとしたら、誰かに呼び止められた。振り向くと両親がいた。

「どこに行くんだ董!!お前は誰だ!!一体何しに来た!!」

「どうも、初めまして。貴方達の事は、董ちゃんから聞いています。ですが、これから董ちゃんは私達と一緒に暮らします。」

「何言ってるんだ!!私達って一体どういう事なんだ?!!」

「詳しくは説明出来ません。じゃあ、行きましょ」

陽毬さんは、歩き出した。私はその後を追って行く。

両親が理解できないのも、無理はないけど。私はもうこの家にいたら心が押し潰されるから。

両親とのお別れ

董以外、誰もいない待合室。ブラインドにより外からの光は、遮られていた。幽霊が出そうなくらい待合室は暗かった。すみれは靈感というものはないが、少し怖かった。

「董ちゃん、お部屋決まったわよー」

その声と共に、ドアが開き光が差し込む。董はすぐに待合室から出た。

「じゃあ、お部屋行きましょ。」

「はー」

陽毬と共に組織員達の住む場所がある、地下へと行った。董の部屋は、運良く陽毬の部屋の隣の部屋だった。部屋のドアを開けると、部屋は、リビング、その奥に台所があり、台所の奥には寝室がある。そひて、台所の左の扉はシャワーとお風呂、お手洗いがあり董は目を輝かせた。

「もし、何か困った事あったら、何でも言ってね。遠慮はいらないから。」

そう言いながら陽毬は董の頭を撫でた。頭を撫でられ、董はちよつとだけ照れた。

「はー」

陽毬は何かを思い出し、赤いコートのポケットから四角く、サイズは手で持てるくら

いの大きさのものをポケットから取り出した。

「アングリフに関わる人達は必ずこれ持たなきゃいけない決まりになってるのよ。緊急の時とか、組織からメールくるから必ずいつ何があっても、何処に行ってもこれ持ってる。」

董が受け取ったのは、折りたたみ式の携帯電話だった。

「ありがとうございます！」

「あ、でもね本当組織に関係ないことに使ったら駄目よ。メールも電話の内容も監視されてるもの。」

「わかりました。」

「あ、あとは董ちゃんの荷物、今度取りに行くわよ。後は、あ、まだ貴方にとってこれから重要になるもの取りにいつなかつたわね。」

「あ、はい！」

「あ、でも荷物家に取りに行く方を先にした方がいいわよね。今から行きましょ」

車でやってきたのは董の家だった。陽毬は、家の門の前で荷物を取りに行った董を待っていた。ドアが開きやつと来た！と思ったが、ドアから現れた人物は董ではなく、

董の父親である井村 颯だった。颯は、陽毬の近くまで歩いてやってきた。

「俺達から董をどうして奪おうとしてるんですか。」

そう訊くと同時に、颯は陽毬を睨みつける。そんな颯に陽毬は目を逸らした。

「そんなの関係ないじゃないですか。これは、私が奪ったのではなく董ちゃんが決めた事なんです。貴方には全く関係ない話なので。」

「関係ないってどういう事だ!!董の父親は紛れなく俺だ。」

「貴方が董ちゃん父親でも、本当貴方には関係ない事です。無理矢理、問題に入ってこないでくださる?」

颯の頭に血が上り、陽毬の頬殴った。陽毬は、殴られた後の痛さに倒れ込んだ。颯は指をポキポキと鳴らし、倒れた陽毬を見下す。陽毬はフラフラしながらも、立ち上がった。

「うるさいな。どうせ、娘を洗脳させたんだろ?」

「違います。洗脳していません、本人の決心ですから。」

颯がもう一発陽毬を殴ろうと拳をふりあげた瞬間、董の声で我に返り、拳を下ろした。

「辞めて、お父さん!!」

そう叫び、董はキャリーケースをゴロゴロと引きずり2人の近くに来た。

「す、董?!どうしてキャリーケースなんか...。」

「私、正直お母さんもお父さんも大っ嫌い。私に相談せず離婚？毎日、毎日、喧嘩？もう辞めてよ。私もうこの家にいると精神的に崩壊しそうだから。さようなら。もうお父さんの顔も、お母さんの顔も見たくないです。」

颯は董に今まで隠してきた本音をガツンと言われ、少しショックを受けてしまったようだった。

「董……、まってく……れ……。」

陽毬の車に乗り込む董に手を伸ばすが、董はそんな父親を無視し、車のドアを閉めその車はどこかへ走って行ってしまった。

「本当に良かったの？」

「何がですか？」

「あんな形で、両親とさようならして。心残りあるんじゃないの？」

「いえ。心残りなんて何もありません。後悔もありません。寧ろ、これでさっぱりしました。」

「そう。」

車の中で、陽毬と董はそんな会話をしていたのだった。

誕生、紫の戦士

「初めまして。私は、組織長の小熊 奈苗です。井村さんの事は、陽毬さんから話は聞いていました。」

本格的に組織に入ることに前に、組織長に挨拶をしなければならないと言うルールがあった。アングリフと言う組織の組織長である奈苗に挨拶しなければならないと言うルールがあった。奈苗は手を差し出すと、董はその手に手を重ね、2人は握手した。

「な、奈苗さん。宜しくお願ひします。」

董は奈苗の手から、手を離すと頭を下げた。

「こちらこそ宜しくお願ひします。きつと貴方には悪と戦って沢山お世話になると思っけれど、頑張つて。」

奈苗も頭を下げた。

「井村さんなら、きつと悪を倒してくれると私は思っています。なのでここへ連れてきました。」

「そうね。陽毬さんの言う通りね。貴方にはこれを授けます。」

そういうと、奈苗は何かをポケットから取り出し、董の掌に何かを乗せた。

「わあ!!綺麗!!」

掌の上には、紫のキラキラ輝く水晶があった。

「井村さん、これから貴方はアングリフの組織員、戦闘員としてこの紫の水晶の闇の力を武器にしてアングリフに襲い掛かってくる悪と戦ってほしいです。」

奈苗はそう言い目を細めた。

「わかりました。」

董は自信満々な顔で、返事をした。

「陽毬さん、井村さんをトレーニング室へ連れて行って、紫の水晶が闇の力を与えてくれるか確かめて。」

「はこ」

トレーニング室は、とても広くガラスの壁で鉄の床だった。陽毬は、ガラスの向こうにある司令室にいた。

『董ちゃん、攻撃方法はとても簡単よ。貴方が頭の中でこんな攻撃したいとイメージして。実際にそれができるから。』

陽毬がマイクにそう伝えると同時にスピーカーから流れ出した。

董は、紫の水晶を片手で持ち頭の中で攻撃をイメージした。そして、紫の水晶を持っていない方の手を振りかざすと、手から黒いものが現れ床に直撃した。董は、びっくりして技を出した方の掌を見た。

「す、すごい……」

『やっぱり貴方は、紫の戦士で間違いなかったわ。これから貴方はそんな感じで、アングリフを襲う敵と戦っていくのよ。大丈夫、貴方ならきつと全ての敵を倒せる。』

こうして紫の水晶に力を与えられ、闇の力を操れる紫の戦士、井村董が誕生した。

「私が敵を倒さなきゃ。組織の為に。でも、一体……敵ってどんなのなんだろう。巨大な生き物？人間？でも、戦うことは痛みもあるって事だよ。それに、戦うことは死ぬかもしれないし。なんか怖いな……。」

董に不安が襲い、紫の水晶を見つめる。

〈第2話〉夢の中

「純希。」

「何でしょうか、組織長。」

シユラハトの組織長室には、純気という男が呼ばれていた。紺色の髪で、身長は颯より少し高い男である。

「娘を探し出して欲しい。」

純希は颯に娘がいると言うことだけは聞いていた。だが、名前も知らないし、話したこともない。情報がない中で探し出すなんて不可能だ。

「いきなり言われましても……。直接会ったことありませんし、それに……。」

颯は、ズボンのポケットから一枚の写真を取り出した。それは、家族4人が写っている写真だった。

「これで何とか探せるだろう？」

「どちらのお子さんを探せば……。」

「紫色の髪の方の娘だ。名前は、堇。知らない女が連れ去っていった。髪が長くて、茶色の髪が赤い服に茶色のコートを着ていた女だ。」

「董ちゃんか……」

純希は写真を見る目を細めた。

「と言う事で頼れるお前に頼みたい。何処に連れ去られたかとか色々調べて欲しい。」

そう言いながら写真をまたズボンのポケットにしまった。

「了解しました。」

「お前を信頼しているからな。頼むぞ、伊織純希君。」

颯は、ニヤツと表情を浮かべた。

「純希！」

「や、辞めろ！手を触るな!!」

「良いじゃない、べつに。私は純希以外の男には興味ないわ。私には貴方しかいない

の。誰にも見られてないから、噂になる可能性は低いわよ。」

純希は、勢いよく女の手を振り払った。女は振り払われたショックで言葉を失ってしまった。

「何回も言ってるだろう。僕に馴れ馴れしくしないで欲しい。志倉綿花。」

冷たい言葉だけ投げ付け、その場を去って行ってしまった。志倉という女は、涙目に

なっていた。志倉は、長い間ずっと純化の事だけを想い続けていた。だが、純希は何をしてもこつちを見てくれない。

「(どうして、私がこんなに虚しい思いしなきゃいけないのよ。何ですつと純希の事だけを想い続けてるのにこつちを見てくれないのよ。)」

『私が好きなのは貴方だけです。』

『そう言ってくれるのは、ありがたいな。でも、無理だよ。君と僕には歳の差がありすぎる。それに、僕には決めた女性がいるんだ。だから、付き合うのは無理だ。』

『なら貴方はありません、あの人を私にください!!』

『僕が決めた女性なんだ。だから、彼女も君に渡せないよ。』

『どうして...』

『いつかは時間が経てばわかるはずだ。水鳥菫』

いつも見る夢。

私が黒い空間で、知らない大人の男性と話す夢。

男性の悲しげな表情。

一体何の意味があるの？

命は

今日は朝から一日中雨が降っている。雨の日は憂鬱な気分になってしまう。学校の授業だつて怠いと感じしてしまう。でも、両親から離れ喧嘩を見なくていい今は、少し気分が晴れている。

「井村さん!!」

その声と共に誰が本で頭を叩いてきた。上を見ると怒った顔をした担任が机の横に立っていた。他のクラスメイトは笑っていた。

「ひいひい、ごめんささいひいひいひいひい」

「井村さん、授業聞いてなかった罰で廊下に立ってなさい!!」

そう言われるがまま、椅子から立ち上がり素直に廊下へ出てきてしまった。私が廊下へ出ると教室のドアは勢いよく閉められてしまった。またやらかしたな……。

廊下で立っていたら、隣の教室の前の廊下にも立っている人がいる事に気づいた。その人は緑色の髪だった。その人を見ていたら、緑髪の立たされている人は立ちながら目を瞑って寝ていた。正直えーっと思ってしまった。

「(ある意味立ちながら寝るって才能なんじゃ……。)」

心ではそう思ったが、さすがに言葉には出さない。もし相手に聞かれてたら、喧嘩になつてしまうから。

口は災いの元。

小さい頃からずつと両親や先生から聞かされていた言葉。

これからも言葉には気をつけなきや。

6時間の授業が終わり、帰りの会と掃除もやって後は、アングリフに帰るだけ。今日も疲れた。帰ったら寝ようかななんて、考えてたら、何処からか誰かの悲鳴が聞こえた。

「きやあああああああ!!」

私は悲鳴が聞こえる場所へ向かった。

その場所は、人気がない公園だった。こんな所に来る人なんているのかなんて、公園を見渡していたら青い髪の毛の、私と同じ中学の制服を着た子が仰向けで倒れていた。

私は倒れている子に近づき、肩を揺するが反応がない。まさか……。AEDを探したが、どこにも見当たらなかった。

私は取り敢えずアングリフに連絡する事にした。前に渡された折り畳み式の携帯電話で陽毬さんに電話をかけた。

「もしもし。」

『その声は、董ちゃん？どうかした？』

「学校近くの公園に、同じ制服着てる子が倒れているんです!!肩を揺らしても反応がなくて...。」

『わかったわ。教えてくれてありがとう。救急車呼んでそっちに向かうわ!』

数十分後、救急車と陽毬さんの乗った車が到着した。倒れていた青い髪の子は救急車に運び込まれ病院に搬送された。私は陽毬さんの車に乗り、その子が運び込まれた病院へ行った。

「大丈夫ですかね...;。」

「大丈夫よ。きつと。」

車の中ではそんな会話をしていた。

魂の姿

病室ではピツピツピツと言う音が鳴り響いていた。青い髪の子は、まだ意識は戻っていないみたいだった。董ちゃんは俯いたままだった。

「とても言いにくい事なのですが、この子が意識を戻す確率は極めて低いです。」

「え?!」

「原因がわからないんです。どうして、心臓が止まっているのかもわからないんです。息を吹き返したら、奇跡と言えるでしょう。」

董ちゃんは、医師からの言葉に悲しそうな表情をした。当たり前か…。

「わかりました…。」

董ちゃんはガクツと肩を落とし病室を出て行ってしまった。すると、医師が私に近づいて来た。

「実は僕、靈感が強いんですけど。この子からなんか怪しいものを感じるんですよ。悪がこの子を支配していると言うか、その悪が魂を抜き取つてると言うか。」

「た、魂をですか?」

「ただの僕の勘ですから、何も言えません。それでは失礼します。」

そう言い医師は部屋から出て行ってしまった。つまり、この子は魂だけが何者かに抜き取られていると言う事なのだろうか。あの公園に何か秘密が隠されているのだろうか。

何故か医師が言っていた事が頭の中に引つ掛かり調べる為に、また公園へと来てしまった。人はいない。が、風が吹いていないのに少し離れた所にあつたブランコが揺れる音がした。誰もいないはずなのに。

私は、ブランコのある場所へ歩いて行つた。

すると、青い長い髪に董ちゃんと同じ制服を着ている女子がブランコに座っていた。

よく見ると、今は病院にいるあの子と同じだった。可笑しい。だって、あの子は今、意識なくて病院のベッドの上にいるはずなのに。話しかけてみる事にした。

「あ、あの……」

すると、青い髪の長い子は無言でこつちを睨んだ。私を怪しい者だと思ひ込んでいるのだろうか。

「……」

「貴方……、今意識ないはずなのに、どうしてここにいるの？」

「……」

「も、もしかして……息を吹き返したとか？」

その時、紫に染まる空にカラス達が一斉に羽ばたいた。とても不気味だった。どうして、こんな時に。

「……」

それと同時にブランコから立ち上がりこつちにゆつくりと近づいて来る。

「カラスと何か関係でも……？」

「……い。」

「え？」

「……ほ……しい……」

「きゃあ……！！」

気が付けば私は首を両手で絞められていた。息ができない苦しい。誰かつ……董
ちや……ん……た……す

「……」

「……けて……おかあ……さ……っ」

奈苗のピンチ

アングリフ本部に戻ると、陽毬さんがどこにもいなかった。さつき病院で勝手に病室から出たのを謝ろうとしたのに。組織員さん達に聞いて、部屋、待合室、組織長室、図書室、トレーニンング室など色々な場所を捜したが陽毬さんはどこにもいなかった。

「あら、井村さん。人捜しているの？」

「わー！奈苗さんー！」

いきなり声をかけられた為、大声を出してしまった。奈苗さんは心配そうに私を見つめた。

「そんなびつくりしなくてもいいのに。」

「あー。あの、陽毬さんって何処にいますか？」

すると、奈苗さんは顎に手を当てて、何かを考え始めた。

「うーん、陽毬さんは……そう言えば見てないわね。朝に挨拶しただけだったのよ。彼氏さんのところにでもいつてるんじゃない？」

「あー。」

きつとそうだよな。深く考えずに、奈苗さんの意見に賛成した。

「ですよね。陽毬さんって、彼氏いそうですよんね！」

「でも、陽毬さんは真面目だから、もし2、3日アングリフに来なかつたら事件として考えるのが妥当ね。」

「ですよね。。。。」

「仕事をさぼるなんて事、思えないし。。。。」

その時、頭の中にある考えがよぎった。あの公園に行けばもしかしたらいるのではないだろうか。

「あ、あの。一緒に来てくれませんか？」

「え?。」

「ちよつと、確かめたい場所が一箇所だけあるんです。」

奈苗さんを連れ、公園にやってきた。すると、陽毬さんが倒れていた。やっぱりこの公園には何かあるに違いない。そう思った。

「陽毬さん!陽毬さん!!」

奈苗さんが陽毬さんの肩を揺するが反応はない。青髪の子が倒れていた事と何か関係があるのだろうか。

その時、どこからか視線を感じた。そして、周りを見渡すとブランコに誰かが座っていた。

「あの…ブランコに誰か座ってるのでもしかしたら、ここで何あつたか見てたかもしれないのでお話を聞きます。」

ブランコに近付くと、明らかにおかしいと気付いた。ブランコに座っているのは陽毬さんだ。陽毬さんは今倒れているはずなのに。

ブランコに座っている陽毬さんは、私がいる事に気づき、睨んできた。

「…。」

そのままゆっくり、ブランコから立ち上がり私に近づいて来た。陽毬さんの目の瞳から光が消えていた。

「ひ、陽毬さん?」

「…を…いして…。」

「へ?」

「私を愛して!!」

「きゃあー…!!」

陽毬さんは、両手で私の首を絞めて来た。苦しい。誰か助け…て…。

「董ちゃん!!」

その声と共に、後ろから飛んできた何か陽毬さんにぶつかり陽毬さんは、両手を私の首から離した。私は、地面に尻餅をついた。目の前の陽毬さんは頭を抱え込んで苦しんでいた。

「な、奈苗さん！」

「今、石投げたんだけど、井村さんにはぶつかってないわよね？」

「は、はい！」

奈苗さんは近くに来て、頭を撫でてくれた。

「なら、良かった。」

「ああああ!!」

陽毬さんは、何かを叫び始め体から黒いモヤみたいなものが出てき始めたのだった。

「な、何？」

すると、陽毬さん：：。いえ、陽毬さんをのつとつた魔物は姿を変え、巨大な黒い蛇になつてしまった。

「これが…敵の真の姿なんですね…。」

「真の姿…。」

黒い蛇は口を開け私と奈苗さんに向かって、炎を吐いてきたのだ。私は何とか逃れたのだが、奈苗さんは炎に囲まれていた。

「奈苗さん!!」

「ゲホツ：： 井村さん、闇のちか：：らで、あの黒い：：ゲホツゲホツ：：。蛇を：：倒し：：て」

「闇の力：：で：：すか：：。」

明らかに奈苗さんを囲む炎は、燃え広がっていた。このままじゃ奈苗さんが。とつと、あの蛇を倒さなければ。

「貴方が頭の中でこんな攻撃したいとイメージして。実際にそれができるから。ー陽毬さんに教えてもらった闇の力での攻撃方法。」

「(奈苗さんのためにも、陽毬さんのためにも私、戦うから!!)」

初めての戦い

「うひゃー!!」

蛇と戦う事を決めた董だったが、紫の戦士になり始めたばかりな為、思うように攻撃が出来ない。攻撃しようとしても、蛇が先に攻撃して来るのだ。

「い、井村… さん…。」

奈苗を囲んでいる炎は勢いを増し、奈苗に血づいて来る。立ち上がろうとしているが、足に力が入らず立ち上がらない。

「奈苗さ… ぎゃ!!」

蛇が頭を地面に叩きつけると地面にびきびきとひびが入り、割れ始めた。

董は躓き、頭から転んだ。もう逃げ場がない董に蛇は容赦なく襲い掛かろうとしたその時、蛇の首に何かが刺さり、傷口から黒い液体が流れ始めた。そして、蛇は苦しそうに倒れた。

後ろを見ると、茶色の髪にピンクの瞳を持ち、ベージュのトレンチコートを羽織り、靴は履いていない少女がいた。

「大丈夫?」

「あ、あの…」

「話は後。あいつが弱っているうちに闇の力であいつを攻撃するのよ。組織長は私が助けるから蛇は任せます。」

突然現れ名も味方もわからなく名乗っていない少女は、自ら炎の中へと行ってしまった。だが、今はそんな事考えてる余裕などない。

董は両手から黒いモヤモヤとしたものを大きくさせ蛇に当てた。すると、蛇は悲鳴を上げ、静かに目閉じた。奈苗を囲んでいた炎はいつの間にか消えていた。奈苗と少女は無事だったらしい。奈苗は意識が戻っていない陽毬をおんぶしていた。

「初めて戦っていたのに、とつても闇の力を使いこなせていましたね。後、貴方のおかげで死ななずに済みました。ありがとうございます。」

「いいえ。奈苗さんが無事で良かったです。」

「そういえば紹介してなかったですね。この子の名前は、ネソ。この子も一応戦士ですけど、貴方達とは違って水晶の力で戦わず、自分の力で戦ってるの。」

茶色の髪にピンクの瞳を持ちベージュのトレンチコートを羽織り、靴は履いていない少女の名前は、ネソという名前だった。

「ネソちゃん。」

「親しくもないのにちゃん付けしないで。」

「あ、ごめんなさい。」

「しかもさつき初めて会ったばかりだし。」

「……。」

董の中でこの子は苦手なタイプだなと思ってしまった。

「まあ、でも私は貴方のその闇の力を借りようなんて思っていないから。私の足を引っ張るんじゃないわよ。」

「…え、はい……。」

「悪が襲ってきたりしても私1人で十分なんだから。」

あの後、陽毬さんは病院に運び込まれ、数時間後には意識を取り戻した。勿論、青い髪の子も意識を取り戻した。陽毬さんも青い髪の子も、もうすぐ退院するらしい。

〈第3話〉 シュラハトとネイヴィー

「純希。董はどこにいるかわかったか？」

「どうやらアングリフと言う組織にいるみたいです。こないだアングリフの組織長と一緒にいましたから。」

「な、なんだと?! どうして、シュラハトの敵組織であるアングリフに連れて行かれたんだ?! やはり、あの女が董に何か仕組んだんだろう。」

「しかも蛇と戦わせてる間、闇の力を使っていたので、正式にアングリフの組織員になってしまったのではないのでしょうか。」

颯は椅子から立ち上がり、怒りと言う感情に任せて壁を思いつき叩いた。壁を叩いた手はとても震えていた。

「くそつ……。アングリフを潰してやりたい」

と、その時組織長室の部屋のドアがノックされた。そのままその扉が開くともう一つの組織。ネイヴィーの組織長である虚構有影が姿を現した。

「颯よ、こないだ渡したカプセルは使ったかな?」

「ああ。俺の部下である純希、こいつが使った。」

「ええ。使いましたよ。ですが、アングリフの戦士は2人いましたよ。1人が颯組織長の娘の董ちゃんで、もう1人はわかりません。」

「そうか。で、颯。お前はアングリフが嫌いだったと言ってたな。交換条件で手を組まないか?」

「交換条件?」

「ネイヴィーがアングリフを潰す代わりに、シユラハトが紫の水晶を探し出す。それで

いいな?」

「む、紫の水晶?」

「ああ。アングリフには紫の水晶が何処かにあるそうだ。ネイヴィーは今それを探し求めている。」

颯は少し悩んだが頷いた。

「ああ、とても簡単な事だな。それでいい。」

「なら決まりだな。」

そして、2人は握手を交わし、ネイヴィーの組織長である有影はニヤツと笑った。

「娘を連れ出すにはネイヴィーと手を組むしかない。アングリフを潰してもらい董を戻ってこさせる。一番簡単な方法だな。」

「(シユラハトの連中にアングリフにある紫の水晶を探し出してもらい、紫の水晶の闇の

力で憎き彼女を奪い去った世界を壊してしまう。未練など何も無い。この世界には何も残らない。」

「何回同じ運命を繰り返せばいいんだ。彼女をいつ救い出せるんだ。」

星が輝く空の下、1人ベンチに座っていた。

「純希」

純希に誰かか声をかけた。純希が横を見ると、話しかけてきたのは志倉だった。

「そういえばさつき組織長室に呼ばれていたけどなんかあったの?」

「別に。何でも無いよ。」

「そう?」

「そう。」

空の雲に隠れていた月が顔を出した。

「ねえ、純希?」

志倉は純希に顔を向けるが、純希は空を見上げたままだった。

「何だ?」

「月が綺麗ね」

「……」

純希は空を見上げたまま何も返事はしなかった。

愛が欲しい

まさか、私以外にも戦士がいたなんて。しかも同じクラスの子だった。ネソ。

だけど学校での名前は、神川木通。

戦士としてなのだろうけどプライドがとてもし高い。ネソさんはプライドが高いからこんな私がネソさんと仲良くできる自信なんてない。

木通さんは基本1人でいて、誰かと行動している姿も見かけた事がない。

孤独で平気。

アングリフの戦士としてもそうなのだろうか。もしかしたら、誰かと仲良くする事を知らないのかもしれない。

『彼女と貴方からの愛以外何もいりません。』

『軽くそういう事を言うのはいけないよ。どれだけ、愛というものが重いものか君はもつと知るべきだよ。』

『いいえ。私は愛と言うものがどれだけ重いかもう知っています。だから、私は貴方と彼女から愛されるだけで私はとても幸せなんです。』

『君はまだ中学生だ。本当の愛と言うものはまだ知れてないはずだ。だから、嘘をつくのはやめてくれ。』

またこの夢か。私が知らない男性と話をする夢。どうして私はこの男性に愛して欲しいのだろう。彼女とは一体誰の事を指しているのだろう。

『わからないんです。』

『は、萩? どうした?』

何故か急に頭が痛くなり、男性以外に人がいないはずなのにざわめきが聞こえ始めた。

『人々の声...、ざわめきが...。聞こえるんです...。平和な世界を生きる人々の声...。』

そんな私の肩に男性は、ぽんつと手を優しく置いた。

『闇から世界を守るには君の力も必要だ。萩を必要としている人達がいるんだ。君はただ愛と言うものは見つけなくていい。闇から世界を守った後に愛を見つければいい。』

『愛と世界を守ることは別ですし、今のうちに貴方と彼女からどうしても愛されたいん

です。』

彼の胸に顔を埋め、涙を流した。だが男性は抱きしめても、頭を撫でてくれなかった。

『確かに君は、本当のご両親に少ししか愛を貰えなかった。だから、僕や彼女に愛されたという気持ちがあるんだろうが、僕や彼女から愛されても何も残らないのだろう。』
『… どうしても私を愛して欲しいの!! 貴方と彼女から!! それ以外にも入りませんし、何も望みません。』

『それだけ望まれてしまうと困っちゃうんだよ。』

私、なんでこの人に愛して欲しいのだろう。本当の両親って何? 彼女って一体誰の事?
? 私は…

「はっ!!」

目が覚め、体を起こした。カーテンの隙間から光が差していた。朝だ。カーテンを開けると晴天だった。青い空がどこまでも続いていた。

あの夢の意味を探して1日が始まった。

母の命

「ママ〜！だっこ〜！」

「ふふ、杏樹ちゃんは甘えん坊ね〜。いいわよ、抱っこしてあげる。」

母が娘に手を差し伸べた瞬間だった、何か黒いものがすつと体の中に入り、その場に倒れた。

「ママ〜？〜！」

すると、体の中に入った黒いものが浮かび、黒いものは、徐々に人間の形に変わっていき倒れた母親と同じ姿をしていた。

「…。」

「ママ〜！」

本体の母親は倒れたまま、偽物の方はまだ幼い杏樹を睨んだ。杏樹は睨まれた事により涙目になっていた。

杏樹を置き去りにしたまま偽物の母親は、どこかに去って行ってしまった。

「ママ〜！〜！！！」

「ふふふん、やつぱりクレープは美味しいわね〜！ん？：小さい子供が泣いてる。しかも、母親らしき人が倒れてる：。」

歩道で泣きくじやることも見つけて、横断歩道を渡ろうとしていた陽毬は放っておけないと思い、その子供に声をかけた。

「どうしたの？」

「ママ！ママ！うわー！ん！！」

「：ママがどうしたの？」

「倒れてっ：ママ：が」

「取り敢えず病院に連れて行きましょ。」

そう言い陽毬は携帯で、アングリフに連絡しアングリフから病院に連絡してもらい、母親は何とか病院へ運ばれた。

「うーん、またもやこないだの青い髪のお嬢さんとの時と同じような悪がこの女性から魂だけを抜き取ってる気がするんですよ。」

「ま、またですか？」

更に医師は続けて言った。

「息を吹き返したら奇跡です。」

「じ、じゃあ、この子はどうなるんですか?!この女性の娘さんは?!」

「この子の父親であり、この女性の夫である方に事情をお話ししましょう。そして、女性
が意識を取り戻すまではその男性に任せると。」

陽毬は屈み、杏樹に視線を合わせた。

「ママは、夢の中へ行ってるみたいなの。暫く我慢できる?」

「ママー!!」

「...」

どうしてもママがいい杏樹に陽毬は、困った。どうやって説得しようかと。その時、
病室のドアが開いた。知らない男が立っていた。

「その子は、父親がいないんだ。母親しかいないんだ。だから、どう説得しても駄目だ
よ。」

紺色の髪の男が杏樹を抱っこした。

「...誰なんですか貴方は。」

「純希おにいたん。」

「ははは、僕の名前覚えてくれたなんて嬉しいな。僕の名前は、伊織純希さ。杏樹ちゃん
は、僕の姉の子供さ。」

「へーそう。つまり、貴方からしたらこの子は姪ってことね。って、家族の方に何も知ら

せてないのになんでここにこの子がいるってわかったの?!

「そんなの簡単だよ。医師から連絡先きてさあ。あ、医師とは家族ぐるみで仲良いから
や」

「はいはい納得しました。はいはい」

自慢げに言う純希に陽毬はどう反応すればいいかわからなかった。

「あ、そういうええ君の名前まだ聞いてないよ?」

陽毬はこの言葉に早く名前を言えと言うように聞き取った。

「降霊陽毬。宜しくは言わないわよ。どうせ今回の件で関係なんて終わるから。」

「へえ、ツンツンしてるね、陽毬。」

「初対面なのに呼び捨てって何なのよ!」

「別にいいじゃん。そっちの方が仲良くなった感じがしないかい?」

「しないわよ。誰があんたみたいなのやつと!こんなことしてる場合じゃなかった…。原

因調べに行かないと。」

そう言い陽毬は、急いで病室から出て行った。

「純希さんよお」

「何?」

「もしかしたら、今のが運命の出会いってやつかもしれないぞ。」

「そうかな。それだったら嬉しいな。」

黒い渦

純希は、杏樹をおんぶして外に出歩いていた。

「杏樹ちゃん、何か食べたいものある？」

「シヨートケーキ！ 苺ケーキ！」

「ケーキか……。よし、ケーキ屋さん探して食べようか！」

「やったー！ 純希おにいたんだいすき！」

そんな会話をしてケーキが食べれるお店を探していた。すると、遠くの空に黒い渦が巻いているのが見えた。黒い渦を見て純希は、何か危険を感じたのだった。

「杏樹ちゃん、ケーキはやっぱり後でいいか？」

「どうして？」

「何か危険なことが起きそうなんだ。」

「……きけんなこと？」

杏樹は今すぐケーキが食べられず、しょんぼりとしてしまった。

「必ず後で美味しいケーキ食べさせてあげるから。」

「やくそく」

「うん、必ず後で食べよう。約束だよ。」

「(やっぱり:.)」

陽毬はコツコツとヒールの音を響かせながら、黒い渦がある場所まで走っていた。

「(暴れてるのね!!)」

段数が多い階段を登っていくと、広場があり、黒い渦の前には手を広げていたのは倒れた倒れていた女性と同じ女性。つまり、杏樹の母親の偽物だった。杏樹の母親の偽物は、陽毬の気配に気付き、黒い渦の力をだんだん弱くしていった。

「ね、ネソ!!」

何と黒い渦の真ん中で、ネソが苦しそうにしていた。

「ぐっ:~:、ひ、陽毬さっ:」

黒い渦は爆発し、ネソは飛ばされて向こう側の壁に激突した。目を開けるが目から光がなくなっていた。

持っていた剣は床に突き刺さった。

杏樹の母親の偽物は、ネソに近付きネソに向け手を開いた。

「:~:わたし:~: しん:~: じゃうの:~: ?」

そして掌に黒い何かが集まり始め徐々にでかくなっていた。と、その時黒い丸い何か

が偽物の母親にぶつかり、地面に倒れた。

「良かった、間に合って。」

ネソは声が出た方を向くと、そこには董がいた。その後ろに陽毬がいた。

「董ちゃん、来てくれてありがとう」

陽毬が笑顔でそういうと、董は首を横すに振った。

「いいえ、ただ何か学校の帰りに空を眺めていたら黒い渦があつたので、まさかとは思つて。。。」

「貴方がきてくれたのは心強いわ。」

董は偽物の母親を睨んだ。

「何の目的があるか知らないけど、人を傷つけることはもうやめて!!」

「：につかれ：たのよ」

「へ?」

倒れていた偽物の母は、ゆっくりと体を起こしながら、何かぼそつと言っていた。

「子育てに疲れたのよ」

「?!」

偽物の母が放った言葉は董と陽毬にとって予想外だった。

「もう、いやなの」

そしてゆっくりとその場に立ち上がった。

親子の愛

そのまま偽物の母親は陽毬に近づいた。そして、両手で陽毬の首を絞め始めた。

「ひ、陽毬さん!!」

「くっ……るしっ……」

「今助けますから!!」

「ママ!!」

「待て!!杏樹ちゃん!!」

やっと到着した純希が杏樹を下ろした瞬間杏樹が、母親のところに行ってしまった。偽物の母親は陽毬の首を絞めながら杏樹を睨んだ。

「ママ!!ママ!!そんな怖い顔してどうしたの?」

「あ…んじ…ゆ…ちや」

偽物の母親は陽毬の首を絞めていた手を離れた。陽毬はその場に倒れた。

「陽毬!!」

純希がすぐに陽毬に駆け寄り、膝をつき陽毬の手を握りしめた。

「姉さん、どうして陽毬を!!」

「うるさい!!」

叫び、掌を陽毬と純希に向け物凄い強い風を出し陽毬と純希を向こうまで飛ばした。すると、純希も倒れてしまった。

「くっ…姉さん…。」

「まだ生きているのか…まあ、いい。あの紫頭から片付けようか。」

何か違和感を感じる。下を見ると足に杏樹がしがみついていた。

「ママ…ママ！」

しがみつきながら自分の母親の名前を呼んでいた。

「邪魔だ!!」

足にしがみついた杏樹が邪魔で、足を動かせれないため振り払おうとするが、ぎゅつと足にしがみつき離れない。

「ママ…なんで!ママ！」

「うるさい！」

「いつものままにもどって!!あつ!!」

一生懸命足にしがみついていたが、大人の力には勝てず地面に倒れた。うつ伏せの状態になったが顔を上げた。

「お前から、片付けてやるよ。」

そう言い杏樹を見つめると、杏樹は体を起こしその場に立ち上がった。

「ママ!!おねがい!!ママにもどつて!!」

「ふっ!!」

母親に近付こうとすると、黒いバリアが張られて当たろうとすると突き飛ばされる。何回も。

「大丈夫?」

董が杏樹に手を差し出した。

「むらさき...のおねえ...ちゃん...」

小さな手を董の手に重ねて、立ち上がった。

「後は私がやるから。安心して。」

「まって...わたしのママ...わたしがたすける!」

そして歩き始め母親のところに行ってしまった。

「無茶だよ!!バリア張られてるんだから」

董の話を杏樹は聞こうとはしない。

「ママ!ママ!ママ!いや!!」

バリアに突き飛ばされそうになっても、力を出しバリアの中に足を踏み入れた。すると、バリアの中に入った。バリアの中はとても苦しかった。

「そんな。」

董はただただその様子を何も言わずに見るしかなかった。

「よくこんなところまで来たな、」

「ママ!!ママ!!もどつて!!」

「お前の母親じゃない。」

「おねがい!!ママ!!」

そう叫び母親の手を握った。

「や、やめろ!!」

そう叫ぶが、目を丸くして、何かを思い出した。

『まま、これあげる』

『花冠?』

『うん、今日ね、幼稚園で先生に教えてもらいながら作ったの!』

『とつても、綺麗ね。』

『ままにあげる!』

『ありがとう。杏樹ちゃん。』

『まま、誕生日おめでとう』

『ありがとう。杏樹ちゃん。まあ、これ杏樹ちゃんが描いてくれたの?』

『うん、ママのにおえ!』

「(暖かい...)」

「ママ!!」

「(私は、確かに子育てに時間を奪われて疲れていた。でも、この子が成長していく姿を見れて私は...)」

「ママ!!」

「杏樹ちゃん、ごめんね。」

そう言った瞬間、バリアにヒビが入りバリアがパリンと音を立て破れた。

「ママ!!良かった。」

母親は地面に膝をつき、両手を広げた。杏樹はそれに応えるように母親に抱きついた。

董は2人に近付いた。

「良かったね。お母さんが戻って。」

「うん!ありがとう!むらさきのおねえちゃん。」

「迷惑かけてしまつて、ごめんなさい。」

「いーの、いーの。戦うことが今の私にとつて大切な事ですからー。」
倒れていた純希と陽毬も意識を戻し、立ち上がり3人の方に来た。

「あれ、姉ちゃん?」

「もしかして…戻つたんですか?」

「純希と、貴方にも本当に迷惑かけてしまつて、すみませんでした。」

「いいですよ、そんなの。杏樹ちゃん、良かったわね。」

「ありがとう!」

「ご存知かもしれませんが、私の今の体は本物ではありません。器です。なので、私は元の体に戻らせていただきます。」

杏樹を話し、偽物の母親は黒い魂となり何処かへ飛んでいつてしまった。

「ママ!!」

理解が出来ない、杏樹は泣き出してしまった。

「杏樹ちゃん、本物のお母さんに会いに行こう。」

「うん」

そう言い純希はまあ杏樹を、おんぶした。ネソは4人のところに歩いてきた。

病院につくと、既にベッドの上にいる杏樹の母親は意識を戻していた。純希は杏樹を下ろした。

「ままー！」

「良かった。杏樹ちゃん。」

「純希おにーたん、ありがとうー！むらさきのおねえちゃんも、茶色のおねちゃんも、ピンクのおねーちゃんもありがとう。」

「どういたしまして！」

「ま、私は何もしてないんだけどね。」

「董ちゃん、そんなこと言わないの。」

「私には関係ないことだけどね。」

「寝そもそんなこと言わないの！」

「ごめん、杏樹ちゃん。約束果たせなくて。」

「… やくそくっ？」

「ケーキを食べに行くっていう約束。」

純希と杏樹の約束を聞いた瞬間、母親が何かを閃いた。

「あー！それなら！」

「ええ?! いいんですか?!」

6人はケーキバイキングにいた。

「勿論! 私が迷惑かけてしまったんだから、当たり前前よ! さっ! 沢山食べて!」

「そんなに食べたなら太るわよ、井村さん。」

「そ、そんなの関係ないから! 大丈夫だから! とか、そう言ってるネソさんもモンブランとチョコケーキとタルト持ってきてるじゃん!」

「別にいいじゃん。」

ネソは顔を赤くした。

「(良かったわね、杏樹ちゃん。)」

陽毬は心の中でそう思いながら、ケーキを食べたのだった。

〈第4話〉愛情

「カプセルは後8個か。」

颯は机にカプセルを並べていた。カプセルの中にうつすらと黒いモヤモヤがしたものが浮かんでいるのが見える。

「戦士はそんな簡単に死なないと思います。寧ろ、この8体の闇の魂が倒される確率の方が高いでしょう。」

「戦士は2人か…。」

「はい。今のところ、戦士の数は増える気配もありません。きっと2人しかいないと。」

「さあ、純希君。3つ目も頼むよ。」

「はい。」

「そろそろ紫の水晶を奪ってくるがいい。」

「はい。」

「ただし、董には傷一つもつけない方法でな。」

「了解しました。」

「ネイヴィーから貰った貴重な道具だからな。無駄遣いするんじゃないぞ。」

「はい。勿論です。」

純希は、頭を下げて組織長室から出て行った。廊下に出ると志倉綿花がいた。

「純希！こんなところで会うなんて！」

「や、やめろ！志倉！誰かに見られていたら、どうすんだ」

志倉は純希の腕に腕を絡めた。純希が志倉を離そうとするが、志倉は離れる気配がない。

「いいの、いいの。組織員は仕事してるし、気にする人なんていないから！にしても、一体また組織長と何話してたの？」

「うん、まあ色々。」

「…まさか、なんか組織長が企んでるとか？」

「そんな事はないよ。まあ、将来のこと色々。」

「はあ、純希の命が狙われないかとても心配だわ…。」

「大丈夫だって。僕の命を狙ったところで、何も起きないし。狙う人なんていないよ。」

志倉は絡めてた腕を話し、純希の手を握った。純希は手を握り返さなかった。

「で、でも！何か起きてからじゃ遅いのよ!!もしかしたら、既に誰かに狙われてて、明日死んでしまったりするのかもしれないのよ!？」

「大丈夫だって。だって、人に恨み買うような行いはしてこなかったし。」

「純希に心当たりはなくても、もしかしたら貴方を恨んでいる人はいるのかもしれないよ。もし、貴方が危険な目に遭ったら貴方がどこにいても、純希を守りたいから、どこへだって貴方のために飛んで行くわ!!」

「だから、大丈夫。僕はそんな簡単に死んだりしないから。」

「私は貴方のためなら死んだって構わないだから!!」

志倉の目からは涙が溢れていた。純希はそんな志倉をただただ見つめているだけだった。頭が上手く働かず、返す言葉が上手く思い浮かばなかった。

「…ありがとう。でも、死ぬなら本当に大切な人の為に死んであげて欲しい。僕の為に死ぬなんて、勿体無いよ。それよりも自分の事を大切にしてほしい。」

そう言い残し純希はその場を去っていった。

「（私に対してなんであんなに冷たいのかしら。）」

運動神経抜群な少女の悲劇

「土筆！頑張れ!!」

「この高さのハードル超えたらすごいよ!!」

「おっけー、ありがとう!」

素晴らしい彼女は頭を下げて手を地面につけた。

「それでは土筆さん、よーいどん!」

そして走り出し高いハードルを3個飛んだ。周りからは自然に拍手が巻き起こった。

「すごいね！永緑さん!!流石は、運動神経いいだけあるわね。」

「そんなことないです。えへへ」

土筆という少女の運動神経は、先生が絶賛する程だった。

「すごいね、あの子」

「うん、そうね」

董とネソは、ただ皆に囲まれる土筆を囲みの外から見てるだけだった。その少女とはクラスは違うが、体育は一緒の授業だ。

「ねえ、ネソさん」

「何？井村さん。」

董が俯く。

「次狙われるとしたら、あの子？」

「：それはわからないわ。でもその可能性はある。」

「でも、一体誰の仕業なの？」

「そんなの知らないわ。私が調べることじゃないもの。私はただ戦うだけってだけで何の仕業かは実亜さんが調べてるから。」

「実亜さん……？」

「あれ、井村さん、実亜さんのこと知らない？彼女は人を脅かすあの正体について色々調べてるのよ。それ以外にもシユラハトやネイヴィーの事色々調べてたり。」

「（実亜さん……。まだ会った事ない人だな）」

「先生……。あの放課後、グラウンドでハードルの練習していいでしょうか？使ったハードルは必ず倉庫に片付けますんで。」

土筆は職員室を訪れていた。

「良いですよ。しっかりと使ったハードルは元あった場所に片付けてくださいね。」

「勿論です！ありがとうございます。」

頭を下げ、例をした。そして職員室を出たのだった。

「(1週間後に行われる、陸上競技大会に向けてハードルがんばろ！今年こそ、全国行こう！)」

夕焼けに染まるグラウンドで1人、ハードルの練習をしていた。緑髪の少女は同じ高さのハードルを7個並べて大会に向け練習していた。

が、その時だった。

ハードルに足を引っ掛け、頭から転倒して転けてしまった。

立ち上がろうとするが、足と手が痛くなかなかうまく起き上がれないのだった。そして、腕を見ると出血していた。出血してる腕を見た瞬間、悔しきで涙が溢れてきたのだった。大切な陸上競技大会1週間前だというのに。もうここで終わりかと。

「土筆、遅いぞ!! ってどうしたんだ?! 転けたのか?!」

どこからか声がした。足音も近くなってきたのだった。土筆が顔を上げるとそこには、一緒に帰ると約束していた幼馴染の駿河だった。

「大丈夫…、た、ただハードルやってたら転けただけだから。」

笑顔でそう良い立とうとするが腕に力が入らない。駿河は腕の出血に気付いた。

「おいおい、めっちゃ出血してんじゃん。大丈夫じゃないだろ?! 無理すんな、先生呼んでくるから待ってろ!!」

「…いい校舎へ走って行ってしまった。」

「…駿河…。」

幼馴染との喧嘩

次の日のこと。

土筆は母親と共に病院へ訪れていた。土筆の右腕と左足の膝に包帯が巻かれていた。捻挫みたいです。と言つても、治るまではあんまり時間かからないと思うんで。」

「あ、あの…… 1週間で治りますか？」

「うーん…… 早くても3週間くらいです」

「そんなあ……。」

土筆は肩をガツクリ落とした。そんな土筆に医者と母親は心配そうな顔をした。

「何かあるんですか？」

「いいえ……。なんでもないんです。」

家に帰宅してから土筆は、すぐに2階の自分の部屋へ行き、部屋のドアを閉めベッドに入り体を丸めた。

「(どうして…… なんてこんな大切な大会があるっていうのに)」

そんなことを考えていたら、部屋のドアをノックする音が聞こえた。どうせ母親だろう

と返事はしなかった。

「入るぞ」

その声は男の声だった。男の声に驚き、勢いよく体を起こした。そしてドアが開くと、現れたのは駿河だった。

「駿河!?!」

「で、結局怪我は何だったんだ?」

「あたしを嘲笑いにきたの?」

「違うってば、土筆のことが心配なんだ。ほら昔から土筆は運動神経いいのによく大事なイベントの前に大きな怪我してたじゃん」

「嫌味?」

「小6の運動会の時なんて、クラス対抗リレーでアンカーに選ばれてたのに怪我してたじゃん」

「あれは…誰かに突き飛ばされて階段から落ちただけだし」

「小5の時は陸上部の大会で全国まで行けたのに全国大会の前で骨折して結局出れてなかったじゃん」

「あれは、バスケの授業の時に誰かに足踏まれただけだし」

「…何が言いたいかというと、土筆は色々もったないぞ」

「やっぱあたしを嘲笑いにきただけじゃない!!」

「だから、違うって!!」

「昔っから駿河はそう。すぐ人に何か起きたら駆けつけてるけど、それはその人を嘲笑う為。」

「そんなことない!!」

「本気で心配なんてしてないくせに!!」

「心配してるって!!だから、土筆の家に来たんだよ!!」

「別に来て欲しくないし!!あたしは駿河に心配して欲しいなんて一言も言っていないから!!勝手に人の家に来ただけじゃない!!」

その時、駿河の中で何かがプツツときれた。

「.. もういいよ」

「もう近寄らないで!!」

「こんなことなら来なきやよかつたよ!!」

駿河は足音を立てそのまま部屋を出て行ってしまった。

土筆は少し涙目になっていた。

「(いつもそう。こんなことで喧嘩しちゃうのよね..)。ストレス溜まってんのかな、あたし。)」

天井を見つめながら、心の中でそう思ってしまった。

何も残らぬ人

別の日の学校で土筆は、あるものを顧問に提出していた。

「本当に良いんだな？」

「はい。全国大会に行けなかったことが悔しくて、部活にしているのが嫌になってしまったんです。」

「そうか、別の部活で頑張れよ。土筆。別の部活で君が活躍できること祈ってるからな。」

「ありがとうございます。」

顧問の手には、退部届けと書かれた封筒が握られていた。その様子を駿河は廊下の端から見つめていた。

1人暗い顔をして、夕焼けが照らす学校の廊下を歩いていた。気づけば階段に座っていて、踊り場の窓を見つめた。

「(あたしから運動と駿河を取ると、何も残らなくなるんだよね。)」

窓の外ををぼーっと見ていると、見える木に誰かが座っているのが見えた。すっかりとは見えないが、男性で狐のお面をかぶっているのが見えた。その手には何かが握られ

ていた。

「なに？」

木に座っている男性が手に握っていた小さいものを投げると、すつと、黒い何か飛び出して勢いよくこつちに向かってきて、窓をバリントンと割った。

「きゃあああああ!!」

廊下に叫び声が響き渡った。その声がすぐに土筆の声だとわかり、駿河が声をした方になつて走り出した。近くにいた他の生徒や先生もも何があつたのかと、声がした方に見に行った。

倒れている土筆に、土筆の周りに飛び散ったガラス。真ん中が割れていて周りにひびが入っている踊り場のガラス。

そして、倒れている土筆と立って土筆を見下ろす赤い目のもう一人の土筆。赤い目の土筆は駿河の気配に気づき、階段を早足で降りて行ってしまった。

「待て!!」

追いかけて階段を降りたがもうどこにもいなくなつたのだ。

「(あれ?)」

『もしもし、董ちゃん?』

『陽毬さん?何かありましたか?』

『あのね、いつもの医師から連絡あったの。また、今日運ばれてきた子の魂を悪が抜き取っているって。』

『またですか?!』

『だから、いい?』

『は、はい。で、どういう子ですか?』

『緑髪に...中学生で...』

『名前は?』

『医師が学校の先生から聞いたらしいんだけど、土筆ちゃんと言う名前の子』

『や、やっぱり...』

『もしかして知り合い?』

『い、いえ。土筆さんとは隣のクラスで体育一緒にやっていますんで...。』

『そう言うことね...。どうか土筆ちゃんを助けてあげて』

『はい。必ず土筆さんを助けます!』

「どこなんだ!!土筆!!」

駿河は校舎、グラウンド、学校の周りを走って赤い目の土筆を捜していた。

「(くそ!!何処にもいないだ?!)」

何回も同じところを捜している気がする。だが、まだ捜していない場所があったと気が付いた。それは体育館だ。

体育館に入ると、誰もいない。電気もついていなく暗かった。

「(体育館にもいないだと。。。)」

すると、今度は外に出て体育館裏を捜し始めた。すると、彼女はいた。

「っ、土筆!!」

大声で名前を叫ぶと、赤い目の土筆はこっちを向いた。

「。。。」

「土筆なんだろう?!」

「。。。」

「土筆ならいつもの土筆に戻ってくれ!!」

赤い目の土筆は何も言わずに、駿河に近付いた。駿河は一步一步後ろに下がったが、もう体育館の壁で逃げ場がない。

「..死んで」

赤い目の土筆はそう言い目を大きく開けると、掌を駿河の胸に当て手から電流を走らせた。

「ああああっ!!」

そしてバンつというでかい音共に煙が充満した。

赤い目の土筆はニヤツと笑ったが、ある人が見えて表情を曇らせた。

友情はきつと、これからも

「土筆さん、やっぱり貴方が次の標的だったのね!!」

董が両手を開いていた。その後ろに駿河がいた、その隣にネソがいた。

「大丈夫?」

ネソが駿河にそう聞くと、駿河は恐怖のあまり声が出なく、頷いた。

「ネソさん、この人を安全な場所へ。」

「わかつてるわ。こっちよ」

ネソが駿河の腕を引つ張りどこかへ誘導した。体育館裏に残っているのは董と赤い目の土筆だけだ。

「ふっふっふっ、やっと見つけた!!お前のその紫の水晶は私がいただく!!」

赤い目の土筆はそう言い、いつの間にか伸びた長い爪で董を襲おうとしたが董は、赤い目の土筆のお腹に闇の力で黒い丸いものを当てた。すると、それは爆発し赤い目の土筆は向こうの方へ飛んでいった。だが油断はできない。

赤い目の土筆は、立ち上がり叫び声をあげた。すると、体が黒くなりそのシルエットは上に伸びた。

すると、目が赤い黒い龍が姿を現した。

「ひいひい、こんな聞いてないよ!! っうわあ!」

龍はいきなり口から黒い炎を吐いた。何とか顔の前で両腕を交差して、熱かったが炎から身を守った。

「(こういう時、陽毬さんがいたらどういう指示される?)」

「……くし、つくし、土筆!!」

誰かがあたしを呼ぶ声。

目を開けると、電気がついている蛍光灯がある天井とあたしの顔を覗き込む男がいた。

「……お父さん?」

「何言ってるんだ、俺だよ!!」

ぼやけていてわからなかったが、父ではなく声の正体は駿河だった。

「駿河……? どうしてここに? あれ、あたし、何してたんだっけ……。」

あたしは体を起こして、今までの出来事を遡る。

「何か、だって土筆倒れてたんだよ!! 学校の踊り場で。」

「え？」

駿河の表情は泣きそうだった。

「お前、死んだかと思っちゃったんだよ!!余計な心配させんな!!」

「…」

駿河はベッドのシーツを掴み泣き崩れた。どういう言葉をかけようか迷い、何も言わずに駿河の頭を撫でた。頭を撫でると、駿河は顔を上げて不思議そうにあたしを見つめた。

「つ、土筆？」

「ありがとう、駿河。こんなに心配してくれたのは駿河だけだよ。本当ありがとう、後こないだの喧嘩の件は本当ごめんね。」

「そんな事どうでもいい。土筆が無事でそれだけでいいんだ。」

董とネソはそんな2人を病室のドアの外から眺めていた。

「ここからじゃドアが邪魔して何言ってるか聞こえないけど、土筆さん助かってよかったよね。ネソさん。」

「まあ、一生あの緑髪のひとつに御礼されないだろうけど。助かったならそれで良いん

「じゃない」

〈第5話〉青い髪の少女

「ねえ、実亜。そろそろ、次の戦士見つかりそう？」

陽球はパソコンにカタカタと文字を打っている実亜と言う名前の女性に話しかけていた。

「たまたまだと思うんだけど、他の戦士も董さんと同じ学校にいるという結果が出てい
るわ。」

「董ちゃんと同じ学校？もしかして、同じクラス？」

「同じクラスの可能性は低いわ。でも、90%同じ学校よ。」

「後の10%は？」

「他の学校よ。」

「おめでとうございます！一等は、ホテル山吹草と山吹草のプライベートビーチ一泊二
日貸し切りです！」

「本当ですか?！」

「たまたまスーパーでお買い物して1000円以上商品を買ったひとが福引一回でき

るといふイベントやっていて、たまたま一等当てちゃった！アングリフの人達誘ってみましよ！

「あー、山吹草行きたかったなーハズレのティッシュかー」

後ろから嫌味が聞こえた。後ろを向くと前見た青い髪の子がいた。青い髪の子は不満な顔をして、ティッシュを持っていた。

：少し迷ったけど青い髪の子に声を掛けることにした。

「ねえ、山吹草行きたい？」

「そんなの当たり前じゃないですかー、山吹草行きたいために1000円以上物を買ったんですけどー、外れちゃってー、」

「あ、あの。。。私、一等当たったんですけど良ければ一緒にどうですか？」

「本当ですか?!」

青い髪の子は目を輝かせたが、はっと我に返り私を睨んだ。

「そんなのいいです。どうせ私なんか山吹草に行けない族なんですからー、」

そう言い青い髪の子は何処かに行ってしまった。

正直声をかけなければ良かったと思ってしまった。

その時、後ろから声があった。

「陽毬！」

「ひっ!」

後ろを向くと純希がいた。

「浮かない顔して。何かあった?」

「な、な、何も無いわよ! あ、私福引で一等当てちゃった!」

「おお! 凄いじゃないか!」

「だから、良ければ貴方も来る?」

「良いの?! お言葉に甘えてついてくよ!」

「他の人誘ってもいいわよ」

「ありがとう!」

「なに、あの人。私に自慢して見せつける為に誘ってきたのかな?」

青い髪の少女は人が少ない道を歩いていた。すると、後ろから腕を掴まれた。

「よう、姉ちゃん。こんな所一人で歩いてて危ないぜ?」

4人組みの男が少女を囲んだ。

「や、やめてください!」

「気が強い女ってのも堪らんなあ」

「俺達と楽しいことしないか？」

「したくないです!!」

「俺たちなら姉ちゃんを満足してあげることできるよ?」

「や、やめてください!!」

嫌がると腕をもつと強く掴まれた。

「嫌とは言わせねえぜ」

もう駄目だと、少女が目を閉じて諦めた。

だが、何故か痛いという言葉が聞こえてきて、掴まれてた腕を離された。そして誰かに腕を掴まれた。目を開けると知らない男性が腕を掴んでいた。

「あ、あの」

「早く、逃げるぞ!」

その言葉と共に男性は走り出して、少女は腕を掴まれたままだった為、少女も走り出した。

「おい! 待てやゴラア!!」

「邪魔すんな!!」

「()は堂々と戦え!」

後ろからさっきの4人組の言葉が聞こえてきたが無視して、男性と走る。

ついたのは学校の前だった。

「ここなら、人が沢山いるし、さっきの奴らはもう追い付いでこないだろうから安心して」

男性は微笑んだ。

「あ、あの、助けてくださってありがとうございます…。」

「お礼はいいよ。困ってる人を助けるのは当たり前のことだから。」

「あれ、この人どっかで…。あ！」

少女はある事を思い出した。

この人は夢に出てきた男性と似ていた。

声も顔も。

「ど、どうかした？」

「あ、いや。何でもありません…。（私…。何で夢の中でこの人に愛してほしいか思ってたのかな）」

「そういえばさっき、何か山吹草に行きたいとか行ってたよね？誘われて断ってたよね

「？」

「あ、はい…。」

「遠慮しなくてもいいんだよ。実は僕あの女性と知り合いで、彼女ち誘われて僕も誰かを誘っていいとか言ってたから。だから一緒に行かないかい？」

「いいんですか?!」

「勿論」

「ありがとうございます!!」

「そういえばまだ名前乗ってなかったよね。僕は伊織純希。よろしく」
「私は水鳥菽と言います。宜しくお願いします！」

見知らぬ人たち

お泊まり当日。

山吹草に泊まりに来たのは、陽毬、純希、堇、ネソ、実亜だった。それ以外に2人いた。

「えっと、貴方は……。あれ、貴方私が誘った時に来ないって言ってたわよね？どうしているの？」

陽毬が声をかけたのは、青い髪の少女だった。

「純希さんに来ないかって声かけられたので。山吹草に来たかったし……。でも純希さんが貴方と知り合いだったなんてびっくりしましたよ。」

「純希と知り合いで悪かったわね……。私は降霊陽毬。」

「私は私は水鳥菽。宜しくお願いしますなんて言わないわ」

「そ……。そう……。(もし、この子が戦士だとしたら？いや、まさかそんなはずはないわよねえ……。こんなプライド高い子の相手してたら疲れちゃうもの)」

菽は別の方向を向けと、歩いて行った。

「で、紫の髪の子の名前は？」

「わ、私？」

「そうよ。紫髪なんて貴方しかいないじゃない。今時そんな髪色じゃ目立つわよ」

「あ、私の名前は井村董です。宜しくお願いします。（いや、そっちだって青色の髪でかなり目立つでしょーが!!）」

「私は、水鳥萩。で、そっちの茶髪は？」

「名前を聞いてきた方から名乗るのが常識でしょ。」

ネソは萩に対して嫌そうな顔をした。

「そんなら、仕方ないわね。私の名前は水鳥 萩。」

「へえ、そう。」

「私が名乗ったんだから名乗りなさいよ！」

「別に私から貴方の名前聞いたんじゃないもの。別に貴方の名前なんて興味ないし。」

陽毬はもう一人何故かいる見たこともないし話したこともない人に声をかけた。

「で、えーと、貴方は、誰？」

「私は志倉綿花と言います。純希の彼女です。宜しくお願いします。」

志倉が満面な笑みでそう言うとは何故か純希が焦り出した。

「ま、ま、まて！志倉！僕達付き合っていないよ？」

志倉は純希の腕に腕を絡めた。見せつけてくる二人に陽毬は苦笑いをした。

「な、仲良いんですね……。あ、志倉さん初めまして。私は、降霊陽毬と言います。」

「宜しくね降霊ちゃん！私の事は志倉か綿花って呼んでくれたらいいな！」

「じ、じゃあ……。志倉ちゃんって呼びますね」

「それでいいよ！」

「あ、あの……」

「ああ。貴方が董ちゃんね、話は聞いていたわ。けど挨拶する時がなくて今日が初めてね。私の名前は神川実亜。宜しくね。私は水晶や敵について研究しているアングリフの組織員よ。」

「実亜さん、宜しくお願いします。」

「で、僕が伊織純希。神川さんも董ちゃんも会った事なかったよね。2人とも宜しくね。」

こうして山吹草での1日が始まったのだった。

過去のトラウマ

「わー！海だー!!」

「まだ、暑くないから海で泳ぐのは禁止だけどでも膝までなら使って良いらしいわよ。にしても、綺麗で澄み切ってるわね〜!」

「泳ぎたかったな。でも、膝まで浸かるだけでも気持ち良さそうですね!」

そう言い履いていた靴を砂浜に置いた。そして膝まで海に浸かる。

「どう?」

「気持ちいいですよ!陽毬さんも是非!」

陽毬は履いていたサンダルを脱いで、片足を海に入れた。

「確かに、気持ちいいわね。夏に入ったらもっと最高だったのにね。」

「それ!」

「きゃ!!」

董はいきなり陽毬に向け、水を両手で飛ばした。その水が見事に陽毬にかかった。

「かかった〜!」

「すーみーれーちゃん?お返しよ!」

「ちよー陽毬さん！辞めてくださいー！」

それから董と陽毬の水の掛け合いは、誰も止めずに始まってしまった。

その様子から1人ぼつんと萩は、眺めていた。

「海か……。そういえば私、海に入る事が怖いんだよね……。」

過去のトラウマがフラッシュバックしてしまった。

『ママー！っちよー！』

『ち、ちよつと！萩！あまりそつち行つちや駄目よ！濡れちゃうわよ！』

母は手を伸ばしたが、その手は届かず萩は足がつかずそのまま濡れてしまった。

『（誰か……。助けてっ）』

そう願ったがそのまま深い所まで溺れてしまった。

『大丈夫？』

『萩！』

目を開けると、顔を覗き込んでくる母親と見知らぬ男性がいた。顔は覚えていないがその男性は紺色の髪の色だった。

『何とか意識を取り戻したみたいだね。』

『あの……。ありがとうございます……。』

『いいよ、いいよ。お礼なんて。娘さんが助かっただけでもそれだけで嬉しいですから。』

「(そう、私は過去に一回純希さんに助けられていたのね。で、こないだ助けられて2回目。)」

トラウマを克服しようと、海にちよつと足をいれたがすぐに海から足を出した。

「駄目、やっぱり怖い。」

そして視線を陽毬と董に向けた。海に普通に入れる2人が羨ましいと思ってしまうた。

夕方になった。夕方の海はさつきと違い夕日に照らされオレンジ色に染まっていた。浜辺でバーベキューが始まっていた。

「バーベキューって良いですよね！」

董は焼き鳥を見ながら呟いた。

「でしょ？私もよく若い頃は友達とバーベキューしてたのよ。」

実亜は懐かしい思い出を思い出しながら肉の焼き加減を確認していた。

「実亜ー、あっちの台車からお皿とつてくるわね！」

「頼むわ！陽毬！」

「私も手伝います」

「助かるわー、水鳥ちゃん」

萩はあることに気がついた。

「あれ、純希さんと茶髪の子は？」

「え？」

周りを見渡すとネソと純希がいないことにやっと気が付いた。

「バーベキュー昼から純希さんは見ましたけど茶髪の子は見てません」

「お手洗いとかじゃないかしら？」

「お手洗いでこんなに時間かかる？」

「…普通に考えてこんな時間かからないわね…。」

「あの、私探してきます！」

「駄目よ、危険だから。」

「じゃあ、私が探してきます。」

「董ちゃんなら安心だわ。」

「はい！」

そう言い残し董はネソと純希を捜しに行った。萩は陽毬を不満そうに見つめていた。

敵の気配

ネソは妙な気配を感じ、ビーチの近くにある森を彷徨っていた。

「(敵の気配がしたのに……。何処なのかしら)」

すると、上からカサカサという音がした。見上げると木の葉が風で揺れているだけだった。

「(ただの勘違いだったみたいね)」

戻ろうとした瞬間、誰かが近くにいるような気がした。

「ピンク髪の戦士。」

「?!」

「(っ)だよ」

ネソは周りを見渡した。すると、木の枝の上に狐のお面をしている人がいることに気がついた。

「貴方、誰?!」

「名は名乗らないけどさ、一応これも仕事だから。」

狐のお面の男はそう言いポケットからカプセルを取り出した。そして、カプセルをあ

けると勢い良く黒いモヤモヤしたものが飛び出しネソを目掛けて飛んできた。

「こんなもの!!」

背中に背負っていた剣を抜き出そうとしたが黒いモヤモヤした物体の速度は早く自分の中にすつと入りネソは倒れてしまった。

「君の心はやはり今来ているメンバーの中で一番、不安な気持ちが多かったんだな。」

「きやああああああ!!」

「…あれ、なんか今叫び声が聞こえた…。もしかして、あの森の中に…。」

董は森の近くのお手洗い付近でネソを捜していた。森の中から聞こえてきた今の悲鳴に気が付いた。

だが、メソメソしてられない。董は走り出し暗い森の中へ消えていった。

「暗…。」

森の中は、予想以上に暗く懐中電灯か電気がつくものを持っていれば良かったと後悔した。ただただ、未知の感覚で進むしかない…。その時、誰かにぶつかつた。そして尻餅をついた。

「いった…。」

上を見上げると、赤色の目と視線があった。そしてその人が背中に背負っている剣が反射して見えた。

「…貴方、ここまで何しに来たの。」

声でわかった。この人はネソだと。

「ネソさん！」

「ここは暗いわ。だから、森の外に出ましょ」

ネソ本人だということが分かったが、目の色が明らかに可笑しかった。ピンクなはずなのに。

「それとも、私の目が可笑しいの？」

森から外に出ると、空は黒く染まっており、空一面に星が煌めいて三日月が浮かんでいた。海は月の光を浴びて、キラキラと輝いていた。

どンドン先を歩くネソを追うように葦は歩いた。

「ネソさん、あの…陽毬さんや皆がいるのは反対側なだけど…。」

声をかけると、ネソは浜辺の上を歩いていた足を止めた。

「皆には用ないんだから。」

「え？」

ネソはニヤツと笑い、くるりと回った。そして、董を見つめた。

「私があるのは、董よ。」

「わ、私……？何かした？」

「ほんと、鈍いわね」

そういうとネソは笑い出した。ネソの体から黒い煙がモヤモヤと浮かび始めた。黒い煙がネソの全体を覆い、どんどんでかい巨大な何かへと化けていった。

「?!」

董は迷わず緊急事態ということが分かった為、携帯電話で陽毬に電話をかけた。

「もしもし、陽毬さん!!緊急事態です!!ネソが、ネソがああああ!!」

『ネソがどうしたの?!』

「とにかく……来たらわかります!!場所は反対側の浜辺です!!」

『わかったわ!すぐ行くわ。教えてくれてありがとう董ちゃん!!』

ネソから爪が鋭い巨大な亀に変わってしまった。

「こんなんー人で倒すなんて無理だよってわ!!」

亀は急に火を吹いてきた為、董は慌てて逃げる。すると、亀も董の方へドスンと突進してきた。

「寝疎外なきや無理だよおおおお!!なんでネソが狙われたのおおおおつてあー!!」

走っていたらこけてしまった。そんなことお構いなしに亀は近づいてきて、手で董を突き飛ばした。突き飛ばされた董は海に落ちてしまった。砂浜には董が落とした、紫の水晶が落ちていた。

亀の体からまた黒い煙がモヤモヤと浮かび始め黒い煙に覆われた体は小さくなり、またネソの姿に戻った。

ネソは歩き出して水晶に近付いた。だが、走って来た陽毬が先に水晶を手を取った。

「あれ、董ちゃんは?」

陽毬が周りを見渡すが、どこにも董がない。陽毬より少し遅く来た萩もやっと到着した。

「紫の水晶が欲しいの。」

「え?駄目よ。貴方は確かにアングリフの戦士ではあるけど紫の水晶は使えなかったんだから。」

姿を現した、青の戦士

陽毬はようやく気がついた。いつものネソではないんだと。

「それが、私の全てなの。」

ネソは紫の水晶に手を伸ばしたが、陽毬は紫の水晶を持っている手の反対の手でネソの手を振り払った。

「貴方、ネソじゃないわ!! 一体誰よ!! 私が知っているネソは、他の水晶に興味がないのよ!!」

「ネソよ!!」

「ネソは自分のことをネソと言わないわ!! だから貴方ネソじゃないわ!!」

「ネソネソしてんじやないわよ!! 早くその紫の水晶ちょうだい!!」

「いや、あの… 髪が短い茶髪さん…、そこはネソネソじゃなくてメソメソよ」

萩がツツコミを入れると、ネソは起こり出した。

「そんなことどうだっていい!! もう怒った!!」

ネソの体から黒い煙がモヤモヤと、浮かんできた。そして全身が黒い煙に包まれその黒い煙は、巨大化した。すると、爪が鋭い亀が姿を現した。

「ネソじゃない!!きや!!」

亀は陽毬を手で握った。陽毬は紫の水晶から手を離してしまった。そして、砂の上に紫の水晶が落ちてしまった。

「こ、降霊さん!!」

「お願い、紫の水晶を持って逃げて!!」

「は、はい!」

萩は砂の上に落ちた紫の水晶を持った。すると、なぜか紫の水晶が光り出した。

「紫の水晶が光っている?!」

萩も陽毬も驚きが隠せなかった。

紫の水晶が浮かび上がり、紫の水晶の中から青い光が浮かび上がり、その光は強まり六角形へと変形していった。

「そ、それは…もしかして青の水晶?!」

「え?!」

「多分、きつと…貴方は3人目の戦士なの。」

「わ、私?!」

「信じれないかもしれないけど青の水晶は貴方を選んだのよ。」

「い、意味わかんないってぎやー!!」

亀は萩に向かって火を吐いた。萩は青いバリアを張って無事だった。

「やっぱり、貴方はそうなのよ!! アングリフの3人目の戦士なのよ!! だから、お願い!! ことを倒して!!」

「なんかよくわかんないけど… アングリフの戦士ってなんのことかよくわかんないけど、やります!! 戦うわ!!」

萩は亀に向かって走り出し手から透明な水色の技を出し亀の頭にぶつけた。すると、亀は陽毬を握りしめていた手を緩めて陽毬は砂場に落ちた。

亀は炎を吹くが、萩はジャンプして亀の頭を足で蹴った。すると、亀は倒れた。

「(す、すごい!! 私ジャンプしてる!!)」

「水鳥さん、今よ!!」

「ど、どうするの?!」

「首を狙って攻撃して!!」

「く、く、首ね!!」

萩は勢いよく走り亀の首を狙ってジャンプして亀の首を足で蹴ると亀は叫び声を上げ、黒い煙になり消えて行ってしまった。

「凄いいじゃない、水鳥さん!!」

「ありがとうございます…。」

萩はちよつと照れていた。

「はっ… やつと戻つてくれた…」

董が海の中から出てこようとしていた。陽毬はすぐに董に気が付き董に近づいた。

「大丈夫？ つて、もしかしてさっきの亀に海に落とされていたの？」

「は、はい… あ、さっきの亀は？」

「水鳥さんがやつつけてくれたわよ。」

「水鳥さんつて、あの青髪の…。」

「そう。」

「つてことは…。」

「そうよ。水鳥さんが3人目のアングリフの戦士なのよ。」

「あれ、私… なにを…」

気が付くと、私は暗い森の中で倒れていたみたいだった。何があつたかは覚えてはいないが、唯一覚えているのはお面を被つた人と会つたという事だけ。

こんな所でメソメソしてる場合じゃない。ホテルに戻らないと。

ネソ以外の女性陣はお風呂に入っていた。

「へえ、そんなことがあったの。でも良かったじゃない。仲間ができて。ねえ、董ちゃん？」

「神川さん：：良かったです！でも、まさか水鳥さんが3人目の戦士で：：青の水晶よりの力を与えられた人間だとは思いませんでした：：。」

「私もびつくりよ！私、正直自分が戦うことになるなんて：：思えなかつたんだから。」

「まあ、これでネソも董ちゃんも仲間が1人増えたわけだし安心ね。後、ようこそ、アングリフへ！」

「こ、降霊さん：：。そうね、私はこれを機にアングリフの戦士として頑張つて戦おうと思おうわ！」

水鳥萩は、自分がアングリフの戦士だと知り、青の戦士として敵と戦おうと決意したのだった。

〈第6話〉 萩に芽生えた感情

「初めまして、水鳥さん。既に貴方が青の戦士だということは陽毬さんからお聞きしています。私は、このアングリフという組織の組織長。大熊奈苗です。」

萩は陽毬と共に組織長室を訪れていた。

「宜しくお願いします。：。」

「こちらこそお世話になります。」

「と云うことで、水鳥さんに渡さなきゃいけないものがあるの。」

そう言い萩の掌に何かをのせた。

それは、董も持っている折りたたみ式の携帯だった。

「携帯…ですか？」

「そう。これはアングリフに関わる人たちは絶対持つていなきゃ駄目なの。緊急の時とか、組織員から必ずメールか電話が来るから、いつでもどこでも必ずこれを持つてて。後、監視されているからプライベートなことに使ったら駄目よ。」

「了解しました。」

「水鳥萩か…。」

実亜はパソコンを見ていた。

「(水鳥つてまさか…。)」

検索をし、あるサイトを開くと…

「(やつぱり)」

「ねえ、ネソさん、一緒に屋上でご飯食べよ」

「何で？」

「昼ごはん前の時間、董はネソを誘っていた。」

「水鳥さんと仲良くなろうみたいなの」

「私、ご飯食べないから、いい」

「あ、あー、ごめん。」

董は謝り、弁当を持ち教室を出て行った。

「(戦士なんて3人もいらぬのに。私だけで十分なのよ。)」

既に屋上に萩はいた。ベンチに座って董を待っていた。

「やっときたわね。井村さん。」

「ごめんごめん！ネソさん誘ったんだけど…断れちゃって。」

「ネソって誰？」

「あ、茶髪の子だよ」

「あー。あの子。」

「じゃあ、食べようか。」

2人は弁当箱の蓋をとり、中身のおかずとご飯を食べ始めた。

「ねえ、純希さんってどんな人？」

「え？」

萩からの急な質問に葦は戸惑った。純希がどんな人か考えたことなかったからだ。

「私より前から組織に関わってんでしょ？なら、あの人とも関わったことあるんでしょ？」

「いや、こないだの山吹草の時が初めて関わったし、その時に初めて知ったよ。」

「そう…。」

萩は膝の上に弁当箱を置き、その上に箸を置き俯いた。

「…陽毬さんとかなら純希さんがどんな人だってわかるんじゃない？」

「…そうよね。」

「どうしたの?」

董は萩の心配をした。明らかに萩は暗くなっていた。萩は無理して笑った。

「何でもない。なんかちよつと、どんな人なのかなって思っちゃつて。別に深い意味はないんだけど。」

「そう・・それならいいんだけど……。」

董は気が付いていないが、萩の中で純希に対しある感情が芽生えていたのだった。

気持ち

「何？3人目の戦士だと？」

「はい。3人目は青い長い髪でどうやら、青の戦士だそうです。属性は水と。」

「そうか。つまり今のところは闇属性と水属性と剣で戦う戦士の3人と言うわけか。これは戦士の数を減らさなければならぬな。」

「カプセルの残りは6個です。」

「4人もこの中に封じ込められている闇の魔物を倒すとはアングリフの戦士はかなり力をつけてきていると言うことか。」

「つまりそう言うことです。もしかしたら、戦士がまた増える可能性が高いと考えた方がいいかもしれません。」

「と言うことは、増えない可能性もあると言うことだな？」

「はい。」

「あとは純希。君に任せる。」

「わかりました。」

純希は颯に頭を下げて組織長室から去っていった。

学校の帰り道、萩は一人で帰っていて途中のコンビニの駐車場で陽毬と遭遇した。そして、陽毬が萩の気分転換に海の見える丘に連れて行った。

海は夕陽に照らされて、綺麗なオレンジ色だった。

「綺麗よね。海って」

「そうですね。」

「海は好き？」

「…見るのは好きですが入るのは嫌です。」

「え？」

「私、小さい頃にお母さんと海に遊びに行ったんです。ですけど、溺れてしまって。それ以降海に入るのが怖くなってしまったんです。勿論、プールも嫌いになってしまったんです。」

「…そんなトラウマなことが過去にあったのね。」

「だからもし、これから水中戦あったとしたら私は戦えません。」

「大丈夫よ。だって董ちゃんとネソがいるんだから。それに無理やり入ってまた嫌な思いましたら今以上に水中が嫌いになるでしょ？」

「…そうですね…。」

「貴方がいるだけでも2人はきつと心強いんだから。」

陽毬は萩に微笑む。

「あ、あの…聞きたいことあるんですけど…。」

萩は顔を赤くした。

「何？」

「純希さんってどんな人なんですか？」

「純希？」

陽毬は腕を組み下を向いた。

「井村さんにも聞いたんですけど、こないだの山吹草の時間が初対面でどう言う人かはわからないって言っていて、降霊さんならわかるんじゃないかと言っていて…。」

「そうねえ…純気ねえ。うーん…なんか急に出てきてよくわからない人っていう感じね。」

陽毬の答えは答えになっっていないくて萩は呆れた顔をした。

「具体的にこんな感じーとかの方が。」

陽毬は更に悩む。

「強いて言うなら志倉ちゃんと付き合っているとかっていう情報なら。」

「え?!」

萩は目を見開く。

「え?」

「純希さんって彼女いるんですか?!」

「ええ。だって、この間志倉ちゃんに挨拶した時、志倉ちゃんが私が純希の彼女って言うていたのよ。」

「そ、そうですか…。」

萩はガクンと肩を落とした。陽毬はそんな萩を見て、首を傾げた。

娘の存在

「水鳥萩。董ちゃんとネソのクラスの隣のクラスの生徒。頭が良く、運動神経も抜群。そして、アングリフの青の戦士として水の技を使う中学2年生。」

「あの子をここに連れてくるのは元々、私の中のプログラムにありました。」

実亜は、パソコンを見ながらネソと話をしていた。

「萩はアングリフにとつてとつても重要な1人なのよね。可哀想なこと。」

「戦士は全員で6人。現在は井村さん、水鳥さん、私の3人だけ。紫の水晶が奪われることによって世界が滅びる。でもその前に残りの3人を見つければ世界は滅びてしまおう。」

「そうね。でも、世界が滅びるまで貴方達が生きているのか心配ね。」

「少なくとも、私は目的を果たすまでは死にません。きっと井村さんも、水鳥さんも世界を救うまでは生きていたいと思います。」

ネソは真剣な表情で自分の気持ちを伝えた。実亜は真剣な表情のネソを見て、少し安心した。

実亜を始め、アングリフの大人達にとって今できることは水晶から力を与えられた戦

士達に未来を託すしかないのだ。

「よかった。そう言ってくれて。じゃあ、私買い物行ってくるからまた後で。」

「はい。また後で。」

実亜は笑顔でネソに手を振り、ネソの部屋から出て行った。実亜が部屋から出ていく姿を、何も考えずただぼーっとネソは見つめていた。

「(正直、あんなこと言ったらけどアングリフの戦士は私一人でもいいのに。)」

「もしかしたら、董はもう一生もどってこないのかもしれない。」

「大丈夫よ。いつかきつと、あの子なら戻ってくれるはずよ。」

自宅のキッチンの机の上で頭を抱える颯の頭の上に、貴美子が優しく手をぼんとおき撫でた。

2人は、自分たちのせいで董がアングリフに行ってしまったことを反省していて、自業自得ということもわかっている。

「そんなわけ」

「私、董の事信じてますから。後、あの子の事だって。」

貴美子は落ち込む颯の頭を撫でるのを辞め、机の上に飾ってある、木の写真たてを手に取った。

そこには、颯と貴美子とまだ歩き始めて間もない董ともう一人の董と同じくらいの娘の家族写真が入っていた。

「あの子はもう、どこを捜してもいないんだ。きつと、殺されたんだ。」

「…きつと、生きてるはずですよ。私はあの子が生きていて、いつか私達の所に戻ってくることを願っていますから。」

井村夫婦にとつて、二人の娘はかけがえない宝物だった。

その二人が居なくなつてしまい、井村夫婦の心に穴が空いてしまった。その空いた部分を埋めるものなんてこの世には存在しない。

董と陽毬

歩いてスーパーマーケットへ行き、アングリフ本部に帰ろうとしていた。すると、アングリフ本部への近道である一本道に狐のお面を被った男が立っていた。

「貴方は誰?!」

実亜が眉を顰める。すると男はポケットから何かを取り出した。それは、小さなカプセルだった。

「君は今、とても不安な気持ちを持っているみたいだな。それでいいんだ。」

そう言いながら男が小さなカプセルを開けると、カプセルの中に入っていた黒いもやもやした物体が勢いよく実亜の中に入る。

「ああああああ!!」

悲鳴を上げた後、その場に倒れた。

『おかけになった番号は現在電源が入っていないか、電波が届かない場所にありません。』
あれ、昨日から全然実亜の姿を見ていない。ネソや他の組織員に聞いても誰も昨日から見ていないという返事が返ってくる。心配になり実亜に電話をかけたが、通じない。

アングリフの組織員という立場をサボリー人旅に出してしまったのか。

でも、組織長も実亜の姿を昨日から見えないからやつぱり何かに巻き込まれたんじゃない。

「陽毬さん!!」

誰かに名前を呼ばれ、はつと我に帰る。背後に董ちゃんと水鳥さんがいた。

「わっ! って… ああ、董ちゃんと水鳥さんじゃない。水鳥さんが本部にいるって珍しいわね。」

「私、一応アングリフの青のせんしになったんだし、アングリフ本部見学しておこうかなって。」

「す、董ちゃん」「ひ、陽毬さん!」

何と、董ちゃんとお互いを呼ぶ声が重なってしまった。

「あ、どうぞ?」

「い、いえ、陽毬さんからで…。」

「いや、いいのよ。私が言いたいことは大したことじゃないもの。」

「わ、私もです。」

「純希さんってどこ?」

「へ?」「へ?」

予想外な水鳥さんの言葉に董ちゃんと私はまたもや声が重なってしまった。

「じ、純希い?ここにはいないわよ。だってあの人、アングリフの組織員でも関係者でもないもの。」

「それは残念〜」

水鳥さんは肩をガクンと落とした。要するに、ここに来たのは本部見学とか言ってたけど純希目当てだったのね。理解したわ。

「あ、あの実亜さんっています?」

「あ、私が聞きたかったことそれよ!」

「最近、実亜さんに電話しても繋がらなくて。私の携帯壊れちゃったのかなって。」

「私もそう思ってたわ。それにアングリフで携帯直せるの実亜しか…って。」

董と陽毬はやつと何かに気が付き、お互いに目があった。

「… 私の携帯が可笑しいんじゃないかって」

「… 実亜が行方不明になったのよ。」

2人の連携

「実亜ー！！」

「実亜さんー！！」

「神川実亜さんー！！」って、何で私も一緒に捜さなきゃならないのよ！！こんな捜すのやらせるのよ！嫌なんだけどー！」

萩は頬を膨らませた。

「ごめんごめん、水鳥さん。嫌なら、帰っていいわよ」

「別に！人を捜すのって楽しそうだし！だから本部に来たんだし！！」

「(さっきまで嫌って言ってたのに、何この気持ちを变える子は！)」

「実亜さんー！！」

「実亜！出てきなさいよー！」

「神川さんー！！」

3人が大声出すが、人通りが少ない道の為、誰も歩いてくる気配がない。諦めようかと思つたその時。どこからか陽毬に向かつて石が飛んできた。

「何?!」

3人が後ろを向くと、そこには実亜がいた。

「実、実亜！無事だったのね！良かった！組織長だって、組織員だって、皆貴方の事心配してたのよ！」

「実亜さん!!：：。ち、ちがう！」

董は実亜のある異変に気がついた。それは、目が赤いということだ。董は全てを察した。董はすぐに勢いよく走り実亜にパンチした。

すると、実亜は叫び声を上げ、体からモクモクトと黒い煙が上りそれは、徐々に大きくなり煙がなくなると目が赤い黒い虎が姿を現した。黒い虎は董を引つ掻こうとするが、董はなんとか避けた。

「また、何かの仕業ね!!」

「何なのこれ．．．ってまさか、あの時の．．．仲間？」

萩は前回の戦いの時のことを思い出す。

「それはわかんないけど、また戦うしかないの！」

黒い虎が3人の方へ突進してきた、萩が両手を広げ水で青いバリアを張る。虎はバリアにぶつかりバリアにひびが入る。

董がバリアから出て、走って飛び黒い丸いものを手から出し虎の首にぶつけると虎が叫びだし、黒い煙になり消えていった。

すかさず陽毬が2人の董と萩の肩をポンッと叩いて
「ナイス！2人の連携すごいじゃない！」

と言った。董は素直に喜び、萩は少し照れた。

「あら、陽毬そんな顔してどうしたの？」

何故か陽毬は泣きそうな顔をしていた。

「だって、だって・・・実亜無事だっただもん!!殺されてたらなんて思ったけど!!うわあ
ああん!!」

陽毬は泣き出し実亜に抱きついた。

「ち、ちよつと！董ちゃんと水鳥さんの前よ？」

「ずっと心配してたんだからあ!!」

実亜は陽毬を引き離そうとするが、動かない為実亜は諦めて、右手で陽毬の頭を撫で、
左手で陽毬の肩に手を回した。

「これで一件落着つてとこですわね！」

「またあーいう敵いつか来るんだと思うとちよつと怖いな。」

〈第7話〉妹を嫌いな少女

シユラハトの組織長室では、颯が腕組みをし純希と話をしていた。

「何、ネイヴィーから貰ったカプセルが後5個だと？」

「はい。アングリフの戦士達は、何もなくこいつらを倒していつています。このままいけば近いうちに10個目もきつと倒されると。」

「にしても、この中に封印されている魔物達は紫の水晶すら奪えないなんて、とっても間抜けな奴らだな。」

「いいえ。魔物達は強いんです。でも、戦士達が徐々に強くなっているという事です。」

「そうだな。まあ、こんな所で会議していても時間の無駄だ。この魔物達に合う、次に不安な気持ちが多い人を捜してこい。」

「はい。わかりました。」

放課後の四組織中央学園の図書室では、ある1人の中学2年生の女子が熱心に勉強していた。

この子の名は、夏我緋桐。

内気な性格から、友達はいない。そのため放課後は、誰かと遊ぶ事をせずに一人黙々と、図書室で勉強していた。その努力が報われ、中学一年生の期末テストからは毎回学年トップの成績をおさめている。

「よし、今日の勉強は終わり。明日は、ここからやる。」

借りていた参考書を棚に戻し、図書室から出た。廊下を歩くと、会いたくない人に会ってしまった。

「花炎……」

それは、中学一年生である妹の花炎だ。花炎は、友達と一緒にいた。

「へえ、お姉ちゃんまた勉強？」

「……花炎には関係ないでしょ。」

「要するに、友達いないからここで時間潰してんでしょ。」

「花炎ちゃん、お姉さんに失礼だよ！」

友達の花炎の緋桐に対する煽りを止めようとするが、花炎は煽るのを辞めようとはしていない。

「私が羨ましいんでしょー？」

「……辞めて」

「良いよね！お姉ちゃんはさー、勉強できてーまあ、勉強が全てじゃないから!!」

「花炎ちゃん、辞めてよー」

緋桐は、花炎を無視して階段に向かった。階段を降りている時もまだ、花炎の声が聞こえる。

「別にどうでも良いんだけど。もう何も思っていないから。高校生になったらあんな家出て行ってやるんだから！友達いなくても良いから。私には勉強さえあれば何にだってなれるんだから!!友達なんて、今無理して作らなくてもいつかは出来るんだから!!」

緋桐にとっては、友達はいてもいなくても変わらない存在だった。確かに、幼稚園の頃は友達はいたが小学生な頃にその友達に裏切られ、それ以降その出来事がトラウマになり友達を作らなくなってしまった。

別に花炎を羨ましいと思ったこともない。

社会に出るまでに、自分一人で生きれる力を身につけていけばいんだと緋桐は思っていた。

家政婦としての娘

「ただいま。」

「お、おかえりつてああ。緋桐だったのね。花炎だと思った。緋桐、さつさと食事の支度して、洗濯物干して、風呂沸かして頂戴？ 今日、私仕事だったんだから。」

「はいはい。」

昔から親も花炎も家事は押し付けてくる。これが家に帰りたくない一つの理由なのだ。そのせいで家では勉強したくてもできない。だから、放課後図書館へ行き、ちよつとでも遅い時間に帰れるように勉強している。

家族からして私は、家族というより家政婦という存在の方が近いのかもしれない。

「ただいま——！」

「花炎！ おかえり——！」

私には厳しい代わりに、花炎にはとても甘い。こんな姉妹差別があつていいものだろうか。

「そういえば今日ね」

花炎が私の方を見て、何かを母親に話し始めた。

「何?」

「お姉ちゃんが友達いないから、またひとりぼっちで図書室で勉強してたよー。」

「あらあら、そうなの? ちつとも頭良くないくせに。花炎ちゃんは、お姉ちゃんみたいにならないようにしつかり友達と遊んで彼氏作って青春するのよ!」

「うん! 勿論!」

は? という言葉が頭に浮かんだが、もう気にしてない。気にしたら負けなんだから。

友達がなくて何が悪いの?

私に友達がいないことで貴方達に何か迷惑かけた?

それくらい私の勝手にさせてよ。

「わあ、またこの夏我さんが1位なんだ! 2位は、水鳥さん?! 水鳥さんって頭良かったの?! 3位が木通さんって…。ネソさんも頭いいんだ…。」

「そんなに凄いこと? まあ、でもいくら勉強しても夏我さんだけは追い抜けないのよね。でも、あの茶髪って頭良かったのは意外ね。普段、ぼーっとしてるイメージあるの

に。」

廊下の壁に貼り出された1学期の中間テストの結果を見て、2人はお喋りをしていった。

「私なんて、学年全体で10位以内にすら入れないよ……。」

「まあまあ、また次回のテストの前に誰かに勉強教えて貰えばいいのよ。私が教えてあげてもいいけど?」

「本当?!」

董は目を輝かせた。

「私の教え方が井村さんに合うかどうかはわかんないけど。」

「ありがとう!!」

「ところで、この夏我さんって誰か知ってる?」

「知らない…… わかんない……。直接会ったこともないし、話した事もないし。」

2人は首を傾げた。

「どこのクラスにいるの?」

「さあ?」

その時、誰かが董と萩の間に割り込んできた。

「いた!」

「誰?。」

割り込んできたのは、茶髪の女子だった。堇は、無表情で萩はその女子に冷たい視線を送った。その子は中間テストの結果を見るとそこから去っていった。

「なんなの! あの子! すみませんとか言っただけで間に入ってくればいいのに! もう!!」

「お、落ち着いて…。水鳥さん…。」

「私、あーいう子嫌い!」

その女子をきつぱりと萩は嫌いと言った。

不安な心

正直、廊下を歩くのだけでもとてつもなく怖い。妹に会わないか。すれ違った人に陰口を言われぬか。学校にも帰る家にも私の居場所は何処にもない。

本当に勉強だけで、学生生活を通せるのか。私の心は不安だらけだ。きつと、あの時、廊下の壁に貼られていたテスト結果見た時にいた2人組に嫌われたに違いない。

私がこんな性格なのは全て、母と妹のせいだ。

「俯いて何があつた？」

下を向き、廊下を歩いていたら誰かに声をかけられた。見上げると、そこには狐のお面を被つた人がいた。性別は多分男。

「誰?!」は学校ですよ!生徒でも教師でも用務員でもなくて学校の関係者じゃないならすぐに出て行ってください!!」

「俯いてる女の子を放つては置けないよ。しかも顔見れば君が何かに不安になってるのとくらいわかる。僕なら君の力になれるよ。」

「……」

男の言葉に少し、信じてもいいのかなと緋桐は落ち着きを取り戻した。

「君のその心の不安。取り除くことができる。」

「…… 本当ですか？」

「本当だよ。」

2人は場所を移動し、学校近くにある公園の椅子に座った。

「私、妹がいるんです。父は単身赴任で今はいません。母は、妹ばかり可愛がついて妹を溺愛してるんです。母は妹の事しか考えておらず、家事とか面倒くさい事は全て私に押し付けてくるんです。父も連絡も何もくれないんです。私はこの家族に生まれてきてはいけない存在なんだと思っただけです。しかも、私友達が1人もいないんです。自分から話しかけないのがいけないんですが…… 1人だけでも心から信頼できる友達が欲しかったんです。」

緋桐は、男に対して悲痛な気持ちを語った。男は空を見上げていたが、緋桐を見た。

「大丈夫。君にはもうすぐ本当の友達と呼べる存在ができるから。君はもうすぐ1人じゃなくなるんだ。」

「どうして、そんな未来のことわかるんですか?!」

「勘だよ。君は押し付けられた家事をしたり、優しい気持ちの持ち主だから。君には友達が出来ないわけない。」

「いつできるんですか?!」

「正確にはわからないけど、年内に出来るよ。」

「年内……。」

「大丈夫。年内と言っても、そう遠くはないから。君は君らしく生きていればいいんだ。」

「……ですよね。でも、この不安な気持ちはどうしようもないです。不安は消えないんです。」

緋桐の手はとても震えていた。そんな緋桐を見た男は、ポケットから小さいカプセルを取り出した。

「これで、君の不安な気持ちは消える。でもその代わりに、君は自分を失ってしまう。」

「これは……。」

「これで不安が消えるよ。」

緋桐は唾を飲み込む。

「……じゃあ、お願いします。」

「本当にいい?」

緋桐が頷くと、男はカプセルを開けた。すると、カプセルの中から黒いモヤモヤした物体が勢いよく飛び出し、緋桐の体に入っていった。

すると、黒いモヤモヤが入った部分は黒い光を発した。それと共に緋桐は悲鳴をあげた。

「あ——————!!!」

緋桐の目に光はなくなりその場に倒れた。

黒い光

今の光は何？

今まで見た事がない、それは黒い光だった。絶対何かあったんだと確信した。ネソさんと水鳥さんと合流して行かなきゃ。

図書室の窓から外を眺めていたら公園の下の方から空の方に黒い光が出ていた。きつと誰かが襲われたんだ。そう思った。だから、借りていた本を片付け公園の方へ走った。

「はー！ー！！」

公園ではネソと緋桐が戦っていた。緋桐は戦士でもないのに黒い炎を操っていた。

「私はもう、不安を抱えて生きて行かなくていいんだ。これで楽になれるのよ。」

「違うわ。不安があるから生きていると感ずるのよ。」

「うっさい！！」

緋桐は、掌をネソに向けるとネソは黒い炎に包まれた。黒い炎は渦を巻く。

「ぐっ……」

緋桐は掌を閉じると。すると、ネソを包んでいた黒い炎は一瞬できて、ネソは所々傷がついていて両手を前に出して地面に手につけた。黒い炎はネソからかなりを奪ったようだった。

「これでとどめだ!!アングリフの戦士の中の1人よ!!」

「(ごめん、私はここまでね。ごめんね、井村さん、水鳥さん、それに三春)」

緋桐が沢山の黒い火を片手から放とうとした瞬間、緋桐のその片手に何かが擦り、血が出ていた。

「だ、誰だ!!」

「その子を傷つけるのはやめなさい!」

「誰かの体を傷つけても、何も変わらないのよ!!」

ネソが声がした方に向くと、そこには紫髪の少女と青い髪の少女がいた。紫髪の少女は、手を腰に当てて仁王立ちしていた。青い髪の少女は胸の前で腕を組んでいた。

「井村さん…… 水鳥さん……」

2人はネソに近寄った。

「大丈夫?立てる?」

「…… 大丈夫。」

ネソが自分の力で立とうとするが足がフラフラして立てない。その為、董が腕を貸した。

「腕に捕まって。」

「：： 大丈夫。自分1人で立てるから」

すると、董はネソの肩に手を置いた。

「ネソさん、貴方1人だけで立てない。だって、ネソさん傷がついているから」

「傷：：。」

ネソの瞳は、ゆらゆらと揺れていた。

「まあ、いい。私が欲しいのは紫の推奨だから。ここで3人を始末して、私が紫の水晶をもらおう!!」

すると、緋桐の体から黒い煙が黙々と立ち上った。そして、その黒い煙はどんどん巨大化していった。

「また人間から化け物に変わる気?!!」

萩が叫んだ。3人は黒い煙を見上げた。

すると、黒い羽に足の指も爪の指も長く尖り、嘴も尖りつた巨大な黒い鳥が姿を現した。

「こんなのと戦えと?! 今までのよりとつても大きいじゃん!!」
董は目を見開いた。

黒い鳥との戦い

黒い鳥は、火を3人に向けた。萩が水のバリアで火を止めるが、黒い火は強く萩の力じゃ耐えられなかった。そして、そのまま萩は黒い火に飲み込まれる。

「水野さん!!」

董が助けようとするが、もう遅かった。

「あつい…。」

火の中では萩が、もがいていた。萩は青の戦士であり、水属性なので火には弱い。

「(どうしよう、もう駄目だ…。熱すぎるのよ…。)」

萩はその場に立ち崩れた。

「水鳥さんを返してええええええええええええ!!」

董は黒い鳥と戦っていた。

「井村さん…。」

董は黒い丸い尖ったものを黒い鳥にぶつけようとしたが足を握られそのまま地面に叩きつけられた。

「いった…。」

董が叩きつけられた地面はヒビが入っていた。痛みには耐えられずその場から動こうとはしない董。

ネソはずつと黒い鳥を睨んでいた。

すると、黒い鳥は手から黒い火を貯めて行きそれをネソに投げた瞬間、萩を飲み込んでいた黒い火が消え、それと同時に先が尖って、固まっていた水が黒い鳥が手に溜めていた黒い炎を消した。

「はあ、はあ、なんとか間に合った…。」

黒い炎によって萩はとても、疲れ切っていたみたいだった。その場に座り込んだ。

董は地面に叩きつけられ倒れたまま。

萩は黒い炎に体力を奪われ座ったその場にまま。

残るは私しかない、傷も気にせずネソは立ち上がった。

「私が倒すわ!!」

「駄目よ」

萩がネソの腕を掴んで制止する。

「貴方はさっきの黒い炎に体力を奪われたんでしょ？井村さんも、倒れたままだし。私がかどうにかするしかないの。」

ネソは腕を掴んでいた萩の手を振り払った。

「貴方だつて、傷があるじゃない!! 貴方一人でどうにか出来るなんて間違いよ!!」

「だったら、貴方一人があいつを倒してくれるの?」

「ち、違うわ!一緒に倒せばいいのよ」

「もし、貴方と私があいつに殺されてしまったら、井村さんがなんとかやってくれるとい

うの?」

「3人で戦えばなんとかなるのよ!!」

「じゃあ、もし3人で殺されたらどうなるの? 私達の代わりに誰か戦ってくれるとでも

言うの?」

「それは...」

「だから、私が先に行く。」

そう言いネソは剣を持ち黒い鳥に向かって飛んでいった。

「なんて... 自己中心的な人。」

萩は誰にも聞かれない小さな声でそう呟いた。

ネソは、黒い鳥の肩に剣を刺した。すると、黒い鳥は叫び出し、黒い煙となり空へ消えて行ってしまった。黒い鳥がいた所には、緋桐が倒れていた。

萩が近づくと、その少女は私と董の間を割って、入ってきた少女だとやっと思ひ出し

た。 緋桐は意識が戻り、目を開けた。

「大丈夫？」

萩は、迷ったが一応声をかけた。

「……はい。」

ネソも近づいてきて、董もなんとか立ち上がり2人に近づいた。

「自分のこと覚えてる？」

董がそう聞くと、緋桐はコクんと頷いた。

「また、感謝されずにさよならしちゃったね。」

背伸びしながら董はそう言った。

「まあ、同じ学校だからどっかのクラスに行けばいるんじゃない？」

赤い髪の少女の事をあまりよく思っていない萩は、欠伸をしながらそう言った。

「あの子とはこれっきりの縁だと思う。」

ネソは少し残念そうな顔をしながらそう言った。

〈第8話〉バイオリンを弾く少女は

四組織中央学園の体育館では、全校生徒が芸術鑑賞会の一環として、ある一人のお嬢様のバイオリン演奏を聴いていた。

演奏が鳴り止むと、体育館は拍手の音に包まれた。

『とても、綺麗なバイオリンの演奏でしたね。本日は本当にありがとうございました!』
アナウンスがそう言うのと演奏者は、全校生徒に向かって頭を下げ舞台から降りた。

校舎から出るとき、萩と董はたまたま会った。だから、道が分かれるまでは一緒に帰ることにした。

「あの、バイオリン弾いてた子、すごい綺麗だったよね! やっぱりお嬢様つて、皆あんな感じなのかな?」

「そりゃあ。私達一般庶民にはわからないことだつて多いと思うわ。家とかお城みたいな洋館なイメージあるわ。」

「羊羹?」

「そうそう。庭はすごくデカくて、庭に噴水があつて、どの部屋にもベランダがあつて、お風呂はバスタブは広くて、お湯の上には薔薇が浮いていて……。」

「でも、虫に食べられたらやばくない?!」

「む、虫?」

萩と董はお互いを見て、頭を傾けた。

「だって、家がそんな甘いものだったら虫がたかるでしょ?」

「あつ!」

萩はあることに気が付いた。話が合わない原因に。

「どうしたの?」

「井村さんが想像してるようかんはお菓子のあの甘い羊羹でしょ?!」

「そうだよ?!」

「私が言ってるのは、洋風の家の方の洋館よ! 食べる方ではないわ。」

「あー、そっち?! ごめんごめん、ずっと羊羹かと……。」

董は片手を頭にあて、呆れた表情をして、はあつと一発大きな溜息をついた。

そんな2人だったが、どこかからか誰かが争う声が駐車場から聞こえ始め、2人は駐車場へいくことにした。

駐車場には高級車が停まっていた。高級車の前で誰かと誰かが喧嘩していた。遠く

からでも何言ってるか聞こえてしまった。董と萩は、喧嘩している2人のうち1人が誰かわかってしまった。

「あ、あの子って……。」

「さっきのバイオリン弾いていたお嬢様よ」

「水仙！何度言ったらわかるんだ!!」

「だから、私バイオリンが嫌なの！やりたくないのに、将来の為ってやらされて。私がバイオリン大好きって勘違いされてるのかもしれないのよ！嘘ついてるみたいで嫌なの!!」

「水仙はバイオリンしかないんだ!!バイオリン以外にお前にお前には何も無い!!だから、辞めさせない!」

「もう、嫌なの!!嫌々、やってバイオリンが楽しいわけじゃない!わかって!きや!」

父親みたいな男は、少女の頬を叩いた。それをはつきり見てしまった董と萩は、手を口に当て目を丸くした。

「い、今のって……。」

「エスカレーターしたら虐待になるわよ……。」

「あの子をた、助けないと!」

喧嘩している2人組のところを走っていきそうになった董を萩は止めた。

「干渉するのは辞めといた方がいいわ。しかも、私達は、あの2人と知り合いでもないのよ、他人よ?」

「で、でも!」

「駄目、絶対あの二人のところに行かせないから。」

「でも、もしあれが本当に虐待なら、私達が止めるべきだと思うの。」

「だから、それはわかんないって。虐待じゃなくて、たまたま頭に血が上ってあの子の頬を叩いた可能性だってあるのよ?」

「でも、あの子の頬を男の人が叩いたのをこの目で見たじゃん!!」

「確かに、そうだけどそれが虐待とは限らないのよ?」

「虐待になる前に止めなきや意味がないじゃん!」

萩はため息をついた。

「あ!もう!いいわよ!そんなにあの喧嘩を止めたいなら止めればいいじゃん!でも、私は井村さんがどうなっても何もしないからね!」

ぶんぶんと怒り、萩はその場から去っていった。董はそんな萩を黙って見つめていた。気がつけば、バイオリンを弾いていた少女と何やら言い争っていた男性は車に乗り、駐車場から出ていったみたいだった。

バイオリンを嫌になった訳

浅黄水仙は小さい頃からバイオリンをやらされている。だがそれは、自分の意思ではなく両親の意思だった。やりたくもないバイオリンをやらされてもうそろそろ辞めていたいと思っていた。

『コンクールで優勝も出来ないなら、あんたがバイオリンをやってる価値はないのよ!』
専属のバイオリンを教える先生に言われた言葉。

『辞めるなら、バイオリンコンクールで優勝したら辞めろ。それまで、辞めるのは何があつても認めない。』

と、父が。

『水仙お嬢様? バイオリンのお時間です。休むという選択肢には、お嬢様にはありませんから。』

と、メイドが。

バイオリンのお稽古のお休みさえもさせてくれないのだ。一体、何のためにこんなバイオリンをやらされているのか水仙は理解できなかつた。バイオリンは、将来使うかも

わからないのに。

「(もう、こんな生活嫌よ。お嬢様なんて立場なんてもう嫌……。ごく普通の、一般人に生まれたかったのよ……。)」

水仙は、バイオリンを床に置き出窓から、外の青くどこまでも果てしなく広がる空を見つめた。

「(ただただ私は普通の女の子に生まれたかった。)」

そう思っていたら、部屋のドアがノックされ誰かが部屋に入ってきた。

「お嬢様、バイオリンのお稽古の時間です。」

「……ええ。」

またこの時間がやってきてしまった。

「違う、そうじゃない!」

「だから、何度やってもここだけは覚えられませんから!!」

「やる気あるの?」

「ありますけど!」

「さぼるの? サボりたければ、サボってもいいのよ? この時間。」

「きゃ…」

専属の先生にバイオリンを取り上げられ、水仙はバイオリンで殴られた。バイオリンは地面に落ちた。

「今のことを口が滑っても、親や他の人に言うんじゃないわよ。」

「…。」

「返事は？」

「…はい…。」

小さな声で返事をする、専属の先生は怖いか表情に変わり、水仙の頬を勢い良く叩いた。

「もっと、大きな声で返事しなさいっていつも言ってるでしょ?!」

「…はい」

「貴方のバイオリンの時間に休憩時間なんて存在しないわよ。さっさと、練習するわよ。」

「…。」

水仙がバイオリンを嫌になる原因は、専属の先生にあった。先生は、両親の前だと笑顔になって良い人ぶるが、水仙と2人つきりになると殴ったり、叩いたりあたりまえ。殴られたりするるのが怖くなり、水仙の中でバイオリンをやりたくない気持ちが日に日

に大きくなってしまった。

また、明日もこの時間が来るのかと思うと不安になる。

狙われた人

「ねえ、ネソさん、こないだのバイオリンの演奏凄かったよねー！なんかあの演奏してた子って中学生とは思えないくらい雰囲気大人びてたし、憧れちゃう。」

2人は、街中を歩きながらこないだ、来たバイオリンを弾く少女について話していた。「綺麗な音色。きつと、あれはあの演奏者が幼い頃からやってきたバイオリンの成果だと思っの。」

「だよねー、あー、私もバイオリン始めたいなー。」

だが、董はある事を思い出した。

萩と喧嘩中だったと言う事を。本当は今日、萩とネソと董の3人で買い物しようと言う約束だったが、萩は董と会うのが気まずかったようで萩はネソに董と2人で買い物行くように伝えた。

「大丈夫。井村さんなら何とかなるはずよ」

「だよねー。ねえ、今からデパートいこーこの近道だからー！」

董がネソの腕を掴むと、近道である道に入った。そこは、路地裏だ。すると、あまり人を見かけない路地裏に誰かいることに気が付いた。

その誰かは誰かを追い詰めていた。

「!!」

ネソは追い詰めている人物の背後を見て驚いた。

「(あの子は!)」

董は、追い詰められている人物の顔を見た瞬間、誰かわかった。

「きみのその不安、取り除いてあげれるよ。」

「だ、誰ですか! 私はそんな、信憑性ないものなんて信じられません!」

「大丈夫、何も痛くないから。」

追い詰めている人物がポケットから、何か取り出すと黒いモヤモヤした物体が追い詰められている人物の体へと入った。

そして、黒い光が発した。

「あ—————!!」

追い詰められた人は、苦しそうに叫んだ。

「ちよつと!」

董が声を出してしまった。すると、追い詰めた人は董とネソの方に振り向いた。

「(やつぱり!)」

前に、会ったことのある人。狐のお面を被ってる人物だった。

「アングリフの戦士にばれちゃいましたか。まあ、それはそれで仕方ない。」

「ちよつと、何で私たちがアングリフの戦士だつてこと知ってるの?!」

「貴方、一体何者?」

ネソは、顔を顰める。

「正体はそのうちバレてしまう。だから、その時になったらお面を外すよ。」

「そう言い狐のお面を被つた男は、どこかへ走り出しネソと董の前から姿を消した。人は

倒れた人の近付いた。

董は倒れた人の顔を覗く。

「やつぱり、この人、学校の芸術鑑賞会でバイオリン弾いてた子だ!」

「まさか、次はこの子が狙われるなんてね。」

ネソと董がお互いの顔を見る。

「次に狙われるとしたら誰?」

「わからないわ……。子どもじゃない人が来るかもしれないわ。」

企み

「……ん」

「起きたみたいね！」

水仙が目を開けると、知らない2人が自分を覗き込んでいることに気が付いた。2人はとても心配そうな表情だった。

水仙が体を起こす。

「(ハハハ)はどハハ？」

「デパートの休憩室のソファの上だよ！」

「何があつたか、よく覚えてないんだけど……。」

「覚えてない方が幸せなこと。」

董がそう言うと、水仙は困ったような顔をした。

「ああ、気が付いたのですね。ペットボトルの紅茶買ってきたけど良ければどうですか？」

ネソはペットボトルの紅茶を水仙に渡した。水仙は、ネソにありがとうございますと言ひ、ゴクゴクと紅茶を飲み始めた。

「これって高級な紅茶？」

水仙がネソに聞くと、ネソは頭を横に振った。

「高級な紅茶ではないです。」

「高級でなくても、こんなにも美味しい紅茶があるなんて！」

ネソは、ある事を思い出したようで水仙に聞いた。

「あの、何か体の異変はない？」

水仙は不思議そうにネソを見つめた。

「いいえ、体に異変は何もないけど」

ネソはほっとため息をついた。

「それならよかったです。（あれ、さっき私が見た黒い光は何でもなかった？）」

「あの、そういうえば私の体、運んでくる時重くなかった？」

水仙が頬を赤く染めて、2人に聞いた。

「あー、それなら、あの後私がデパートに行つて、店員さんに言つたら男の店員さんが貴方が倒れてた場所まで来てくれて、デパートに運んでくれたから多分大丈夫！」

董は笑つてそう言った。水仙はそんな董にクスツと笑つた。

「そういうえば私の名前まだ名乗つてなかったわよね。私は、浅黄水仙。」

「あ、私は井村董ですー。」

「私は、神川木通。」

「董ちゃんと木通ちゃんね、いきなりだけれど、2人に紹介したい場所があるの。ついて来てくださいますか？」

董とネソは顔を見合わせたか、その場所に行くことにした。

その場所は、デパートから少し距離が離れた古びた音楽ホールだった。緞帳は少し汚れがついていて、観客席は多かった。壁には昔の演奏会のポスターが貼られていた。少し不気味な音楽ホールだった。

「ふふふ」

水仙の不気味な笑い声が、音楽ホールに響いた。

「水仙ちゃん?」

董が後ろから水仙に声をかけると、水仙はいきなり振り向いて董に掌を向けて、黒い稲妻のようなものを董に向けて撃った。

「きゃー—————!!」

黒い稲妻があたると、董は全身痺れ出した。

「井村さん!!」

ネソが董に近寄ろうとすると、水仙が足でネソを蹴った。ネソはその場に倒れた。

思い出さなくて良い記憶

「ここなら、誰も助けに来れない。しかも、ここにいるのはお前たち2人だけだから。紫の戦士を殺して、紫の水晶はいただくとするよ。」

体が痺れている菫に水仙は一步一步近付いていく。菫は四つん這いになったまま顔を上げ、水仙を見つめる。

「絶対：：につ、わたさ：：なあつ」

「アングリフの紫の戦士として生まれた自分を恨め。貴方を殺す私に罪は何もない。」

水仙は菫を睨み、片手をあげた。菫はもう私は駄目なんだと目を閉じた。

その時、ネソが水仙に襲い掛かった。

「な、何をする!!」

「井村さんを殺すのはやめなさい!!井村さんを殺すぐらいなら、私を殺しなさい!!」

「お前には要はない!お前を殺しても何も意味がない!!」

水仙がネソの首を両手で掴んだ。ネソも水仙の首を両手で掴む。

「ネソさ：：んっ」

菫はネソを見て、頬に涙がついた地面に垂れ落ちた落とした。すると、ズボンのポ

ケツトの中に入っていた紫の水晶が光り、音楽ホールを光が丸ごと飲み込んだ。

董が目を開けると、自分の体痺れていなくなっていた。水仙から見ると、董の体に乗っていた稲妻は無くなっていた。水仙は悔しそうな顔をしたが、すぐにニヤツと笑った。

すると、水仙の体から、黒い煙がモヤモヤが出始めていた。ネソは水仙の首を両手で掴んでいたがその片手を、水仙が手で掴みネソを客席に投げ飛ばした。

「きゃあー！ー！！」

ネソは客席にぶつかり、客席はヒビが入ったりポロポロになった。

「ネソさん！！」

「さあ、本編は今から始まるわよ、ふふふふ」

不気味な笑い声とともに水仙の体は黒い煙に飲み込まれ、だんだんそれが大きくなっていく。

そして、黒い煙がなくなると、巨大な赤い目の黒い熊が姿を現した。熊は、いきなり手を左右に振り董は、その手を交わした。

「ぎゃー！！」

「井村……さん。」

ネソは痛い右肩を左手で抑えて、黒い熊と董の戦いを何もできずただ見ていた。

「あー言うのって、確か首を狙えば良いんだよね？」

董は突進してくる熊に向かつて、闇の力を手に溜めた。

そして黒い熊が、ちょうど上に来たと思つた瞬間、ジャンプして黒い丸いトンがった物を黒い熊の首に刺した。

黒い熊は苦しみ、泣き叫んだ。

そして、黒い煙に変わっていつて、黒い煙は人の形になり、水仙に戻り、水仙はそのまま地面に仰向けで落ちた。

「…っ、あれ？」

水仙が目開けると、ベッドの上にいることに気が付いた。

「やっつと、目が覚めた？」

「あれ？私は一体何を」

「わざわざ、思い出す必要もないよ。」

董にそう言われ、水仙は今まであつた事を無理矢理思い出すのは辞めると決めた。

〈第9話〉 青の戦士の心の傷

シユラハトの組織長室では、純希が呼び出されていた。

「7体カプセルを使っても、紫の水晶を手に入れることができないとはどう言う事だ？」
「すみません。アングリフの戦士達がとても強くて。」

1体目、水鳥菘。

2体目、伊織純希の姉。

3体目、永緑土筆。

4体目、ネソ。

5体目、神川実亜。

6体目、夏我緋桐。

7体目、浅黄水仙。

残るは3体。

今日は朝から一日中、雨。

憂鬱な朝。

夏になりかけてる朝。

学校にすら行きたくない朝。

怠い朝。

両親と話もできない朝。

水鳥さんとも仲直りができない朝。

1日がまた、こうやって始まってしまう。

学校の昇降口に行くと、たまたま萩がいた。萩は浮かない表情をしていた。

「お、おはよう」

萩に声をかけると、萩はこつちを一瞬見たが、そっぽ向いた。萩は、同じクラスらしき友達を見かけると、そつちにいつてしまった。

結果、無視された。

萩は、私と会うのが気まずいのだろう。すると、後ろから誰かに肩を叩かれた。振り返るとそこには、ネソこと神川木通がいた。

「おはよーネ．．．あー、木通さん。」

「あの青髪、完全に井村さんを無視してたわね。」

「挨拶くらい返してくれば良いのに」

「それより、早く行かないと朝の会に遅れちゃう。」

「そうだね!」

私は急いで朝の会に間に合うように、駆け足で教室へと向かった。

その日の帰り、萩は一人で下校していた。とその時、楽しそうで2人で下校する董とネソを見てしまった。董と喧嘩していなかったら、今頃3人でいたのにと少し、残念がった。

もしかしたら、許されるのかもと思いい2人に声をかけようとするが、朝の董の挨拶を無視した事を思い出した。

やっぱり、声をかけるのを辞めた。

その日の晩ご飯は、萩が作る事になっていた為、途中にあるスーパーマーケットへ寄り材料をかう事にした。

「水鳥さん!」

買い物中に誰かに呼ばれ顔をあげると、陽毬がいた。

「降霊さん」

萩は陽毬に近寄った。

「貴方、お買物？ちゃんと家の手伝いして偉いわね〜！」

「い、いえ……。」

萩は頬を赤くし、ちよつと照れた。陽毬から目を逸らした。

「もー！う！照れちゃつて！可愛いんだからー！これだから最近の若者は……。」

「何も可愛くありませんよ……。」

「そんな可愛い水鳥さんも、まさか裏では戦ってるなんて誰も思いもしないわよね。」

「ですよね……。多分きつと、悪と戦ってるなんて言つても、物語の中の話だと勘違いされると思います。私自身、青の戦士として覚醒するとは思いませんでしたもん。」

「そうよねえ。きつと董ちゃんも自分が、紫の戦士なんて意味不明だったと思うわ。でも、きつと3人で力を合わせればなんとかなるわ！」

「3人……。」

3人と言うキーワードを出されると、余計に心の傷が深くなってしまふ。今は、3人じゃなくて、2人と1人なのに。

もう、2人と一緒に悪に立ち向かう事なんて出来ないのに。

全ては、自分のせい。

3つのカプセル

萩は買い物から帰った後、台所の机の上に今日買ってきた材料を置き、母のおかえりの言葉を無視して、階段を上り2階にある自分の部屋に入り、ドアを閉めベッドに顔を埋めた。

萩は気が強くて、すぐにきつい事を言ってしまう性格だ。だが冷静になった後に誰かにきつく言ってしまった事に対しても後悔するタイプだ。

萩は折られたみ式の携帯をひらき、メールで董に「あの時はごめんね」と打ち、送信しようとしたが文字を消し、やっぱり董に送信するのは辞めてしまった。

もしかしたら、董はネソと自分の悪口を言い合ってるんじゃないかと萩は思った。仲直りしても、友達とはもう思われないんじゃないのか。

「(本当に私って本当:.)」

『もしもし颯よ、あのカプセルを使って紫の水晶を手に入れることは出来たか?』

「あ、虚構か:.)。あーあー、そうだな。そ、そろそろ部下が紫の水晶手に入れたんじや

ないか?」

『そうか。早く渡してくれ。楽しみに待っているよ。』

そして、相手は電話を切った。

「(純希のせいだ!!あいつが悪い!)」

そして颯はある人へ電話をかけた。

「もしもし、純希か?」

『あー、颯組織長。いきなり、電話してきて何かあったのでしょうか?』

「おまえ、そろそろ本気で紫の水晶を、手に入れて帰ってこい。ネイヴィーの組織長にとっても、期待されているんだからな。」

『すみません。アングリフの戦士たちが強すぎて、叶いません。』

「言い訳は、良いわけ!!」

『すみません。でもきつと、もうすぐ紫の水晶を手に入れられるはずなんです。』

颯はある事を思いついた。

「なら1回、残りのカプセル3つを持ってちよつと組織長室に来てくれないか?」

『は、はい。』

「すぐに来い。待ってるぞ」

そう言い、颯は電話を切った。颯はニヤツとした表情を浮かべた。

「（純希のやり方でダメなら、俺の独断専行で今後からやるしかないな。まあ、俺が今考えているやり方なんてあいつには思いつきはしないだろう。アングリフの戦士が3人もいるならこつちも…。）」

ネソは、実亜の部屋にいた。

「で、敵の姿を見たと言うの？」

「はい。狐のお面を被っていました。私の時も、狐のお面を被っていたので、狐のお面を被ってる人が私達が本当に倒さなければならぬ人物だと。」

「確かに、私が襲われた時もそんな人物がいた気がするもの。信憑性は高いわね。ただ、そいつが次誰襲うか分からないから…。」

「井村さんや陽毬さん以外にもまだ、襲われてない人は大勢います。その中で、襲われる人を襲われる前から、調べる方法なんて存在しません。」

ネガティブな心

「ひ、ま、りさん！」

「ぎ、きや！」

気が付けば董に抱き付かれていた。

「えへへー、驚いた？」

「もうー、董ちゃんったらく！ふふ、なんか董ちゃんって出会った頃より、明るくなったわよね。」

「そうですか？」

「そうよ。」

「陽毬さんが言ってくれるなら、自分でもなんかそんな感じがします。」

「それで良いのよ。自分に自信持つて良いのよ！董ちゃん！あ、そう言えばさつき買い物に行ったら水鳥さんに会ったのよ！」

「水鳥さん……。」

水鳥というキーワードを聞いた瞬間、董は俯いた。そんな董を見て陽毬は、2人の間に何があったという事を察する。

「… よければ、話し聞いわよ?」

「えっ、いやー、何でもないです…。」

「話せる範囲で話してくれて構わないから、ね?」

陽毬の顔を見て、少し迷ったが董は萩との間に何があったのかを語り始めた。

「こないだ…、学校で芸術鑑賞会が行われてて、水仙ちゃんつて子が演奏しにきててバ
イオリンで演奏してたんです。で、水鳥さんと下校していたら、駐車場で水仙ちゃんと
男の人が喧嘩してて、私が止めようとしたら水鳥さんが辞めといた方がいって言うて
きたんです。でも、私が馬鹿だからその忠告を聞かず、喧嘩してる2人のところに行こ
うとしたら水鳥さん怒っちゃって…。結局、関係修復出来てないままなんです。」

「そんな事があったのね。」

俯く董の肩に、手をポンと置いた。

「私が悪いんです!素直に、水鳥さんの言う事聞いてれば、こんな事にならなかったんで
す!!もし、水鳥さんが青の戦士辞めたとしたら、私のせいです!」

「董のちゃん!」

董は名前を呼ばれ、顔を上げた。

「喧嘩することは当たり前よ。でもね、大切なのはこれからどうするか。このままで良
いの?喧嘩したままで良いの?」

「陽毬さん……。」

董の瞳はうるうるしていた。

「大丈夫。謝れば。きつと、水鳥さんだつて、董ちゃんと今の関係のままなんて……喧嘩したままの関係なんてきつと嫌だと思つうわ。」

董は目を閉じ、深呼吸した。

「……ですよね。」

董はゆつくりと目を開けた。

「大丈夫。今の貴方なら。」

「じゃあ、謝つてきます。」

「ええ、それが良いわ。」

そして、董は陽毬の前から去つていった。

「(大丈夫。董ちゃん。今ならまだ仲直りできるわ。)」

仲直りすると言つたものの、やっぱり怖い。水鳥さんは気が強そうだし……。絶対、許してくれないよね。

「どうしたの、井村さん？」

「え？」

「そんな浮かない顔して。」

「ね、ネソさん！」

顔を上げると、ネソさんがいた。

「もしかしたら、紫の水晶によって、貴方が曇った表情してるのかもしれないわ。」

「これのせい？」

私はポケットから紫の水晶を取り出した。

「そう。」

董は手で持っている紫の水晶を見つめ、何か考えていたが、ネソに紫の水晶を渡した。

「もし本当にそうだったら、これのせいで仲直りできないの嫌だから、暫くネソさんに預

けるね。」

「了解。」

「仲直り出来たら、また取りに来るから。」

「わかった。それまで持つてるわ。」

罪悪感

「純希……」

志倉はいつものように、純希に後ろから抱きついた。

「わー！」

純希は、驚いたように声を出した。志倉は純希にそんな驚かなくても良いのにと
言った。

「邪魔するな。今から颯組織長の部屋に行くから。」

「なら、私も一緒に颯組織長の部屋に行く！」

「大事な用があるんだ。だから、何がどうしても一人で行かせてくれ。」

志倉はある事が気になった。

「純希、貴方……もしかして、颯組織長に裏でやばいことでもやらされてるの？」

志倉がそう言った瞬間、颯は電流が体に流れたようにびくつと震えた。

「そ、そんなことない。颯組織長が僕にそんな事させるわけない。志倉の考えすぎなんだ。」

純希は、何かを上手く誤魔化そうとしているという事に気がついた。

「もう、何やらされてんのよ!!」

「大丈夫。志倉は首を突っ込まない方がいい事。知らない方がいい事だよ。」

「もー、やつぱり!」

「だから、組織長室に行かせてくれ」

志倉は純希を抱きしめたまま離さなかった。

「隠し事教えてくれるまで、離さないから。」

純希はため息をついた。

「はあ。わかったよ。教えれば良いだけだよね?それより、離れてくれないかな」

「えーどうして?」

「それじゃなきゃ、ちゃんと説明出来ない。」

志倉は何も言わずに純希に巻いていた腕を離れた。すると、純希はポケットから透明なカプセルを取り出した。

「な、何これ?しかも、中に入ってるの…。黒くて、もじやもじやしてて気持ち悪い…。」

志倉は目を細くして、中に入っている黒い物体をジーンと見つめる。

「これを不安な人の心に刺して、黒い動物にしてしまうんだ。で、その黒い動物に紫の水晶を探し出してもらおう。それが僕の秘密さ。正直、罪もない人々を巻き込んでしまうの

は罪悪感でいっばいだ。でも、今の僕はそうするしかないんだ。」

その話を聞いた志倉の表情は、固まってしまった。まさか、自分の好きな人がこんな事をやらされてたとは思ひもしなかつたのだろう。

「……ごめんなさい純希。ちょっと、体調悪くなつたから部屋に戻らせてもらうわ。やっぱり、今から貴方の組織長室へ行くのを同行する事なんて、出来なくなつたわ。本当に、私から一緒に組織長室に行くって言ひ出したけれど、ごめんなさい。」

そう言い残すとぼとぼと自分の部屋に戻るため志倉は歩き出した。

純希は、志倉が自分の視界から消え去つてから組織長室へ歩き出した。

「(君は、悪くない。僕が悪いんだ。組織長から命令でこんな事を引き受けた僕が。)」

運がついていない紫の戦士

「水鳥さん、この間はごめんね。やっぱり直接ちゃんと言葉で謝りたいから、今日の放課後に、昇降口へ来てください。私は許されない覚悟で謝ります。」

誤字脱字をしていないか確認して、萩宛にメールを送信した。これでもし、今日の放課後に萩が昇降口に来なかったら許してくれないという事になる。董はゴクンと唾を飲み込み折り畳み式の携帯電話を閉じた。

学校に着くと、靴箱にまた萩がいた。萩と目があったが、董は目を逸らして運動靴を脱ぎ、靴箱の中に入れ上靴を履きそのまま教室向かっていった。萩は同じクラスの友達と待ち合わせしてたらしく、友達が来たら、一緒に教室へ向かった。

学校行く前に、あのメールを送ったものの、やっぱり喧嘩したままだから萩と会うのが気まづかった。

授業中は、ずっと萩との事で頭が不安でいっぱいになっていた。本当に仲直りできるのだろうか。彼女は、こんな自分を許してくれるのだろうか。仲直りしたら、これからも友達……仲間として一緒に、敵に立ち向かってくれるのだろうか。

こつそりと持つてきた折り畳み式の携帯電話を見るが、返事は返ってきていない。「(やっぱだめか…。)」

落ち込んだ時、誰かに携帯電話を取られてしまった。

横を見ると、そこには担任がいた。

「井村さん？携帯電話持つてくるなんて、しかも授業中に携帯電話いじってるなんて校則違反です！持つてくるのも、校則違反です！1週間、携帯没収させていただきます！」

「あ、あの！深い訳があつて、どうか見逃してください…。」

そう言うが、担任は携帯電話をそのままポケットの中に入れてしまった。しかも、クラスメイトに笑われる始末。そんな中、ネソだけは真剣な表情をして董を見つめていた。

「校則違反したからちゃんど、反省するように！わかつたわね？」

「…。はい。」

董は担任に何も言い返せずにそう呟いた。

これで、1週間の内に何かあつたらそこへ駆けつけられなくなり、自分に何かあつても誰も呼ぶ事ができなくなった。挙げ句の果てに、萩からの返事を見れずに終わる。董はガクンと肩を落とした。

「確かに、授業中に携帯いじつてた私が悪いけど、こつちは組織がかかつてるんだっ

っの。）」

董は誰にも聞かれない音の大ききで、舌打ちをチツと一回した。それが、周りの人に聞かれていたらしくて

「先生ー！今、董が舌打ちしました！」

と言われてしまった。董は焦って

「ち、ちがう！今のは、何も考えずに舌打ちしちゃつてたの！」

と誤魔化そうとするが、担任は董の言葉を聞かずに董を廊下に立たせた。

「（あー！もう、本当最近運ついてないんだから！）」

〈第10話〉狙われた人達

「純希よ、これが3つのカプセルなんだな？」

「はい。これ以外は全て、もう使い果たしました。」

「戦士は確か、3人だったよな？」

「はい。紫の戦士、青の戦士、そして剣で戦う戦士の3人です。」

純希が答えると、颯は机の上に置いてあった3つのカプセルを床に落としてそれを力強く足で踏み付けた。

「これをこうしてだな」

「な、何をやる気なのですか?！」

すると、カプセルはバキバキと音を立て、どんどんヒビが入っていく。

「俺のアイデアだ。純希の事をもう信頼なんてしていない。この3つは俺の独断先行で行くからな。」

すると、カプセルは、粉々になり、中に入っていた暗いモヤモヤが上に浮いていく。「3つも使って・・・上手くいしく訳・・・あつ・・・。」

1つは何と純希の中に入り込んでしまった。2つ目と3つ目は、開いていた窓から、

外へ出て行つてしまった。

純希の体から、黒い光が発した。

「あ—————!!」

純希は、その場に倒れる。それを颯は見下ろした。

「ふっ、お前は不安なの心の持ち主だったんだな。哀れだな。まあ、これもお前の人生の一つだから仕方ない。」

数分経つと、ようやく純希は目を開けた。

「あれ……、僕は一体何を。」

「やつと気が付いたのか。お前は、いきなり急に倒れたからびっくりしたよ。」

「…… あっ！3つのカプセルは……？」

「あれは、処理した。純希が気にする事ではない。」

颯は、不気味な笑みを浮かべた。

放課後の学校の昇降口。

萩は、董を待っていたが董は現れる気配がない。そんな時、ネソが通りかかった。

「ネソさん！」

萩がネソを呼び止めると、ネソは萩に呼ばれたことに気がついて近づいて来た。

「水鳥さん……。」

「あ、あの…… 井村さんは？」

「あー、井村さんなら…… 授業中に携帯見てた罰として、携帯1週間没収と、教室掃除させられてる。」

「そう……。で、井村さんのクラスって、何組だったっけ？」

「1組。」

「1組！ありがとうございます！」

「どういたしまして。」

そう言いネソは、アングリフ本部へと帰って行った。萩は董とすれ違っていけないと思いい、昇降口で待つ事にした。

夕日を見ていると、黒いモヤモヤしたものがこっち側に飛んできて、2階の窓に入っていくのを見てしまった。

「(… あれ、確かあの窓って…… 1組の…… 井村さん!!)」

萩は何だか嫌な予感がした。

「ネソさん!!」

校門から出たネソを走り追いかけた。ネソは、驚いた顔をして萩の方に振り向いた。

「水鳥さん? どうしたの?」

「井村さんが…狙われてるかも…。」

「井村さんが?!」

すぐに2人は、校舎へと戻った。

襲われた人達

誰もいない教室。いつも誰かが騒いでる教室と違って、何だか新鮮だった。自分が一人しか存在していない世界に来てしまったみたいだった。たまには、こう言うのもいいかも。何故かわからないけど、居残りで掃除もたまには悪くはないような気がした。

窓から時々教室に入ってくる、風も涼しくて気持ちいい。携帯いじつてた罰の掃除をしていると言う事を忘れてしまいそうになる。

窓を見ていたら、何か黒いものがこつちに勢いよく飛んでくるのが見えた。目を細めて、何なんだと確認しようとしたが何かよくわからない。すると、窓からそれが入ってきて私の中に入ってきた。

「あ—————!!」

ぼんやりと、視界が霞み始め視界は黒……く……。

バリンツ!

「あっ!」

食器が割れる音がしてようやく気が付いた。いつの間にか、手が滑ってお皿を割ってしまったみたい。最悪なんて、思いながら箸と塵取りを持ってきて、粉々になったお皿を回収した。そして、その粉々に割れたお皿をゴミ箱に捨てた。

何故かさつき、母の声が聞こえた気がして、それで、気付いていたらお皿を落とした感じだった。

どうしてなの？母は、私を嫌っていたのに。何で、今更。父と母は、私が幼い頃に離婚して、私の親権は母になった。だが、母はお酒にまみれる毎日だった。家事すら私に押し付けてくるようになった。お酒で母は、私に暴力も振るようになってしまった。昔の優しかった母は、優しさのかけらすらもなくなっていた。だが、いつの日か母は、事故で亡くなってしまった。もし、あの時私が父親に引き取られていたら、日に日に狂っていく母を見る事はなく、暴力も振るわれることもなかったのかもしれない。

それなのに、何で今更母の声が聞こえるのだろう。きつと、勘違いだ。そうよ、きつと勘違いなのよ。

そんな事を考えていたら、体に何かが入った。

「きゃー!!」

気がつけば、自分の体から黒い光が発せられていた。

怖い。

もしかして、母の呪い？

叫んでも誰も助けてくれないことは知ってる。

「きゃーーーーーー！！」

誰か…… た…… すけ……

「な、何今の叫び声！」

「きつと、今のは…… 井村さんの叫び声よ！」

ネソと萩は学校の階段を上っていたら、叫び声が聞こえた為、少し早く階段を上った。

「な、何今の声は……」

「誰かの叫び声でしたよね……」

実亜は、組織員と食堂でご飯を食べてる時だった。その叫び声は、食堂まで聞こえていた。

「何か、嫌な予感がするわ。」

「戦士達を呼びますか？」

実亜は、少し悩んだがコクンと頷いた。

「さっきの声は一体……」

志倉はシユラハト本部の廊下を走っていた。その訳は、純希の声らしき叫び声が部屋まで響いてきたからだだった。

叫び声

教室に着くと董は倒れていて、バケツの中にあつた水が溢れていて、雑巾は床に落ちていた。ネソと萩はその光景に目を見開く。

「井村さん!!」

萩が董の肩を揺するが、反応がない。

「やっぱり……遅かったのね……」

ネソが声のトーンを低くし、そう呟くと萩は諦めて、董の肩を揺するのを辞めた。

「ごめんなさい……、私がもうちよつと早くネソさんに伝えてれば……こんな事には。」

「いいの。水鳥さんが悪いんじゃないわ。」

暫く、2人は黙っていると董は、瞼を開けた。萩とネソはそんな董を見て、表情が少

しだけ晴れた。

「……あれ、どうして倒れてたっけ……。つてうわ!」

董に萩は抱きついていた。

「井村さん!良かった!気が付いたのね!」

「は……え、あれ……水鳥さん……」

「この間はごめんなさい……。私、あの時感情的になっちゃって……。」

「こ、こつちこそごめんなさい。萩さんの注意をちゃんと聞けばよかつなつて……。」

「許してくれる?」

「.:こちらこそ、許してくれる?」

萩は董に抱きついたまま、顔を緩めた。

「勿論」

ネソはそんな2人を笑顔で見守っていた。

「良かったね、井村さんも、水鳥さんも。」

「まり.: 陽毬!」

名前を呼ばれてやつと気がつく。

「あれ、実亜.:?」

「良かった.: 気が付いたみたいで.: 床の上に倒れていたのよ!もう、びっくりしたわ。つたく、心配させないでちょうだい。」

「私が、倒れてた?何のこと?」

「とほけないで。眠くて、ベッドまで行くのめんどくさかつたから床で寝てたんでしょ

「？」

「そんな、まさか……。流石に、めんどくさがり屋の私でもそんな、床の上で寝ることなんてしないわよ！」

陽毬は、上半身を起こした。

「寝るのはベッドの上だけにしなさい。」

「……そう言えば私、さつきお母さんの声が聞こえてぼーつとしてお皿を落としちゃったの。」

急に陽毬は深刻な顔をして、何かを語り始めた。

「母の声？」

「そう。で、その後記憶ないのよ。別に眠かったわけじゃないし。あ、でも少し何かに対して怖かったのは覚えてる。」

「純希！」

志倉が呼び止めると、本人はその場に止まった。

「志倉？」

「さっきの叫び声……。純希の声に聞こえたのだけれど。」

「そう？そんな声何も聞こえなかったよ。志倉の勘違いじゃないかい？」

「ああ……。私の勘違いなら、良かったのよ。貴方の叫び声じゃなくて、少し安心した。志倉は、ほっとため息をついたのだった。」

精神世界

「ねえ、私の事表では許してくれたけど、裏では許してくれてないんですよ？」

気付けば私は何故か踏切の前に立っていた。踏切の向こう側には萩がいた。空の色は暗く、いまにも雨が降ってきそうな空模様だった。

「そんな事はないわよ。井村さん。貴方が私を許してくれると言うなら、私も許すわ。」
「そのつもりよ。」

踏切の向こう側にいる萩にそう答えた。

「でも、本当は私の事嫌い、井村さんにきつい言葉を投げた私とはもう仲良くしなくな
いとか思ってるんでしょ？」

「違う、そんなことない！友達としても、アングリフの戦士の仲間としても、水鳥さんと
仲良くやっていきたい！」

「本当にそう思ってる？」

「思ってるよ！」

「本当に？」

「はっ！」

声は萩からネソの声へと変化した。踏切の向こう側にいるのもいつの間にかネソだった。

「水鳥さんは…?」

「井村董。アングリフの紫の戦士。1人目の戦士。四組織中央学園の中学に通う中学2年生。親と喧嘩して、公園にいたら降霊陽毬と出会った。」

「どうしてそれを…。」

董はまだネソに対して、陽毬と出会った話をしていなかったはずなのに。何故か踏切の向こう側にいるネソは知っていた。

「降霊陽毬と出会った事により、貴方はアングリフの紫の戦士になってしまった。」

その時、電車が通過した。

「ハイハイはっ。」

目を開けると、地面はゆらゆらと安定しなかった。

「伊織純希。」

誰かに名前を呼ばれ、顔を上げるとネソが舐先に立っていた。純希は船の上だと察した。

「で、一体何の用だ？アングリフの戦士。」

「伊織純希。シユラハトの組織員として働いている。組織長に命令され、裏では危険なことをやっているのが志倉にばれそうになる。紫の水晶を奪う為に、カプセルを10体与えられたがそのうち7体を結果得ずに失ってしまう。降霊三春によって、呪いをかけられているため、陽毬に嫌々近づこうとしている。」

「違う!!陽毬は… 陽毬は… 心からずっと…。」

「愛してなんてないの。」

急に波は荒くなり、船が波に襲われた。

「ん。」

目を覚ますと、何故か中学生の頃まで住んでいた家のソファの上にいた。小さめの机が置いてあり、その向こう側にネソがいた。

「降霊陽毬。アングリフの組織員。幼い頃に両親が離婚、母に引き取られるが、母は酒を飲み、暴力を振るって狂っていく。それを見るのが嫌になっていたある日、母は急に事故する。結局、貴方は母親に愛されていなかった。」

「そんな」と言わないでよ！ネソのくせに…。」

陽毬は両手でバンと机を叩いた。

「わかるわ。」

「軽々しく言わないでよ！」

「私は母の気持ちかわかるわ。だって」

「何?!」

その時、急に火に包み込まれた。

前だけを向いて

萩とネソは董の教室掃除を手伝い、2人のおかげで教室掃除はかなり早く終わった。

「ごめんね、水鳥さんとネソさん。教室掃除を手伝ってもらっちゃって。」

「良いの良いの。私がやりたかったんだし。お礼なら、ネソさんに言っつて。」

「私は、暇だったから手伝っただけよ。」

「2人とも、本当ありがとね」

董はいつも通りで、変わった様子はなかった。いつ敵が姿を表すのかと躊躇していたがそんな気配もなく2人はほっとした。このまま何もなく、時間が流れていってくればそれで良い。それは、2人の本心だった。

「どういたしまして。」

「ねえ、そういえば水鳥さんは、アングリフに住み込みしないの?」

「え?」

董からの急な質問に萩は頭を傾げた。

「だって、水鳥さんって…アングリフの青の戦士じゃん?だから、アングリフの地下に住まないのってこと。」

「え、アングリフって住める場所あるの？」

「あるよ。アングリフには実は地下があつて、そこで組織員の人達とか住んでるんだつて。因みに、私は陽毬さんの隣の部屋に住んでるの。」

「つてことはつまり、アングリフに住めば毎日純希さんに会える？」

萩は目を輝かせて、董に聞いた。董はそんな萩を見てきつと、純希さんのことが好きなんだなと思つた。

「残念ながら、水鳥さんお目当の純希さんはアングリフの組織員じゃないわ。」

ネソが横から答えると、萩は酷く落ち込んだ。

「はー、アングリフに泊まり込めば純希さんと毎日会えて、毎日話せる特典付きだと思つてたのにー。」

萩は頬を膨らませた。

「あの純希さんは、急に来るようになったのよ。何があつたかは知らないけど。」

「どーせ、ガールフレンドいるんだもん、志倉さんつて人が！」

「え、いるんだ!？」

董は驚きの声を上げた。

「どうせ、純希さんはその志倉さんつて人に夢中だから、私がある間に入る隙すらないだけ。」

「まあ、確かに個人的にはあんまかつこいいとは思わないけど…。好きな人とかできたら突っ走りそうな感じだからねえ…。」

「でも、純希さんに一途に思われてる志倉さんが羨ましい…。って思うし、志倉さんと体入れ替わってないかなって。」

「水鳥さんが、努力すればもしかしたら純希さんは水鳥さんに振り向くかもよ！」

董の言葉に少し安心して、萩の表情は綻んだ。

「何だか、井村さんにそう言われるとそんな気がしてきた。暗いこと考えずに、前を見てポジティブな事考えないとね！努力すればいつかは報われるはずよね！」

〈第11話〉見てしまったもの

董とネソは学校からアングリフに帰ろうとしていた。すると、陽毬とぼったりあった。その為、買い物に一緒に行くことになった。

「好きなお菓子あったら買っていいわよー」

陽毬がそういうと、董の顔にはパツと花が咲いたようだった。

「本当ですか?！」

目をキラキラ輝かせ、陽毬に聞いた。陽毬は笑顔でコクンと頷く。

「でも、お菓子あまり食べ過ぎると太るから要注意。井村さん。」

「わかってるって!!」

董はお菓子が置いてあるコーナーへと移動した。お菓子が置いてあるコーナーにはチョコレート、飴、スナック菓子、ガム、クッキー等色々置いてあった。董はどのお菓子を買ってもらおうかと悩んでいた。

お菓子が並んでいる奥側に母らしき人を見つけた。まだ母だけなら良かったが、母は父じゃない別の人と楽しそうに話していた。

「…はっ…。」

董はそれがショックになり、陽毬とネソのところへ戻ってしまった。

「どうしたの？董ちゃん？」

董は俯いたまま何も言おうとはしなかった。ネソもそんな董を心配して見つめる。

もし、あれが父と母だったら落ち込むことはないが、母と知らない男だった為落ち込んでしまった。

ただ一緒にいるだけで、楽しそうに話してただけなのに。

実は既に父と母は離婚してるんじゃないかと言う考えが頭を横切った。

「（そんなはずない）」

もし、母の浮気だったら父に言うべきか。

でも、そうしたら本当に家族が崩壊してしまうんじゃないか。

誰かに相談するべきか。

もし自分が言ったってことバレたら母に何されるかわからないし。

悪い噂でも流されたら嫌だし。

董の頭の中で不安がグルグルと回り出した。

そして、心の中で何かがプツンと切れた気がした。

「董ちゃん？」

陽毬に名前を呼ばれ、はっと我に帰った。今日はもうアングリフの自分の部屋に帰り

たくなつてしまった。

「あの：：私、先にアングリフに帰らさせてもらいます。」

「董ちゃん？お菓子はいいの？」

「食べたい気分じゃなかったんで：：ごめんなさい。」

「ま、待つて！董ちゃん！」

陽毬は董の腕を掴んで、話を聞こうとしたが董は駆け足で店から出て行つてしまつた。ネソと陽毬は目を合わせる。

「：：一体何があつたのかしら。」

「さあ：：。」

「取り敢えず、早く買い物済まして、アングリフに戻つて董ちゃんのお話聞くしかないわね。あんな元気のない董ちゃんつて、何だか董ちゃんじゃないみたいだから。」

「：：そうよね：：。一応水鳥さんにも井村さんにも何かあつたのか聞いてみるわ。」

悪いのは

アングリフにある自室へ戻るとすぐに、ベッドに潜り込む。忘れたくても忘れない。思い出したくなくても、思い出してしまふ。母が父じやない男と楽しそうに話していたのを。正直、浮気だとは思いたくない。

コンコンと部屋のドアをノックする音が聞こえた。

「入るわよ、董ちゃん。」

声の主は陽毬だとすぐにわかった。

陽毬はドアを開け、部屋に入ってきた。

「董ちゃん……。元気なくしちやって何かあったの？」

「……。何でもないです。」

「私でよければ、お話聞くわよ？もし、話をしてスッキリするなら何でも話して頂戴。」

「だから、何でもないって！」

気が付けば、怒鳴っていた。董は気まずくなり黙り込んだ。陽毬もそれに釣られるように黙り込んだ。少し、時間が経ってから陽毬は口を開け

「……ごめんなさい……。」

と謝り、陽毬は部屋から出て行くことにした。董は、泣きそうになっていた。何で、怒鳴ってしまっただろうと。陽毬に嫌われてしまったんじゃないかと。

すると、董の体から黒い煙が黙々と浮かんだ。

「あーーーーーっ!!」

その黒い煙は、董の部屋を覆った。

今の声は董ちゃん？

何故か嫌な予感がした。

私は、もう一回董ちゃんの部屋に行こうとした、だがドアが開かない。どんなに強くドアノブを引っ張っても開かない。鍵でもかけちゃったのかな…。

「す・みれ… ちゃ!!くっ!!」

どんなに強くドアノブを握っても、ドアは開かない。ちょうど、そこに実亜と数人の組織員が走ってきた。

「今の声は、董ちゃんの声よね?！」

「董ちゃん、この部屋にいるはずなのよ!!それなのに!!」

「ぐっ…。」

実亜がドアノブを引っ張るがドアは開く気配がない。数人の組織員が、実亜の手を引っ張るがやっぱりドアは開く気配がない。

「どんなに力入れても開きませんね!!」

「何があつたんでしようか。」

「紫の戦士に一体何があつたんでしようか?」

私は、なぜか罪悪感に襲われた。

もし、さつき董ちゃんに怒鳴られて、部屋から出ていかなかったら?

董ちゃんが落ち込んでる理由を聞き出せていたら?

全ては私が悪いんじゃないかと思ひ始めた。

「: : ごめんなさい、ちよつと外の空気吸ってくる。」

「ち、ちよつと!もしかして、貴方、董ちゃんに何かしたんじゃないの?」

「何もしてないわよ!」

「本当の事言いなさいよ!」

そう言われて実亜に頬を叩かれた。

「本当に何でもないわよ!!」

私はそう言い残し、走ってその場から去った。

暗闇の下に

外の空気を吸う為に、ベンチに座っていた。空は既に黒く染まっっていて、星達がキラキラと輝いていた。すると、頬に冷たい何かがぶつかった。

「きゃー！」

陽毬が叫ぶと、いつのまにか隣に純希がいた。

「やあ、陽毬。」

「じ、純希!!」

「取り敢えず、これをあげるよ。」

「… ありがとう」

純希は陽毬に、冷たいペットボトルのお茶を渡した。陽毬はそのお茶を両手で持ち見つめる。

「たまには、こうやって何も考えずに空を見上げるのもいいよね。」

「… ふふ、そうね。悩みが消えて行くみたい。」

「悩み?」

「ええ… あ、何でもないわ。」

「いや、絶対悩んでることありそう。僕でよければ話聞くけど。」

陽毬は顎に人差し指をあてて、夜空を見上げた。

「そうねえ……。」

「家族のこと？」

「いいえ……。実は、夕方くらいに董ちゃんとネソと会ったの。それで、買い物一緒に行く事になってね、一緒にスーパーへ行つたわけ。で、途中で董ちゃんが何故か元気なくなっちゃったの。その訳を聞こうとしたら、先に帰っちゃって。で、董ちゃんの部屋まで行って、悩み聞こうとしたら怒られちゃって……。そのあと、董ちゃんの叫び声聞こえて、部屋に入ろうとしたらドア開かなくなっちゃって。」

その話を聞いた純希は、ビクツと震えたが、冷静を保った。

「：そ、そう言う事だったのか……。」

「私って董ちゃんに信頼されてないのかしらって。思つて。」

「そ、そんな事ないよ。君はちゃんと、その子に信頼されてると思うし、きつと悩み聞いて欲しかったけど自分のプライドが邪魔して素直になれず、怒っちゃったんだと。」

陽毬は純希を見ると、首を傾げる。

「そう？」

「それか、陽毬に悩み事話して迷惑かけたくない可能性もあるよ。」

「… 私は、董ちゃんの力になりたいし迷惑だなんて全く思っていないわ。彼女には頑張ってもらいたいだけなの。」

「大丈夫、彼女は頑張れるよ。」

「そういえば、最近杏樹ちゃんは元気？」

「ああ、この間会ってきたけど母親と幸せそうに暮らしてるよ。あの時の記憶なんてもう忘れてるんだらうから。」

『ママ！なんで！ママ！』

『うるさい！』

『いつものままにもどって!!あつ!!』

精神的に強かった杏樹を思い出す。母親を自分で助けた事も。

「杏樹ちゃんは、とても強いと思うわ。自分の母親が豹変して、とても怖かったと思うの。母の手を握って母を助けるだなんて、私がいも杏樹ちゃんだったら怖くてそんなこと出来ないわ。」

「だね。」

夜空を見上げた陽毬の手に、純希は手を重ねた。

別の世界

「ん…?」

目を開けると、視界には黒い世界が広がっていた。ここはどこ? さつきまで、自室にいたはずなのに。

「ここは不安の世界よ」

「へ?」

後ろから足音と声が同時に聞こえ、振り返るとそこには自分がいた。

「あ、貴方は!」

「私は貴方、井村董の負の姿。つまり、影の貴方よ。」

もう一人の私はニヤツと笑った。

「影の私?」

「もう、貴方はこの世界から出られない。だって、貴方は紫の水晶を持っていないんだから。戦う事もできない。」

私はズボンのポケットに手をつ突っ込み、紫の水晶を探そうとしたがネソに紫の水晶を渡したままだと言う事を思い出した。

「そんなあ……。戻らせてよ！下の世界に！」

「元の世界に戻っても、良いことはない。元の世界に戻ったら、お母さんの浮気を見る事になるのよ？しかも、降霊陽毬を傷つけたのよ？」

「違う、あれは……。陽毬さんに迷惑をかけたくなかっただけで」

「なら、まだこの世界に閉じ籠ってる方が良いわよ。あんな嫌な思いしなくて済むのだから。」

すると、もう一人の自分は近づいてきて私の頭に手を当てた。

「……。そんなの……。は、絶対……。い……。や」

何だか眠くなってきたような。

自分の感覚がなくなっていくような。

何かを忘れて行くような……

『董ちゃん!!』

『井村さん!!』

『井村さん!!』

陽毬さんと水鳥さんとネソさんの声が聞こえ私は我に返った。もう一人の自分を突き飛ばすと、もう一人の自分は尻餅をついた。

「ぐっ!!」

「私がいる場所はここじゃないから!! 例え、嫌な事や辛い事があっても自分の本当の世界で暮らしたいの!! こんな黒い世界に閉じ籠められるなんてまっぴらごめんよ!!」

「でも、嫌な事や辛いことは耐えれないじゃない? だから、この世界にいる方が自分の為よ。」

「例え、嫌な事や辛い事があつたとしてもいつかは晴れるから!! 私はそう信じてるんだから!!」

私はこの世界から出る為、勢いよくもう一人の自分まで走りもう一人の自分にパンチをした。もう一人の自分は腕で私のパンチを受け止めた。

「ふん、紫の水晶なくても自力で戦えるのね。」

腕を掴まれ、遠くに投げ飛ばされた。そして、地面に落ちた。痛みが体を走る。

「い… たっ」

もう一人の自分は腕を組んで、仁王立ちで私を見下ろした。

「この世界は私が仕切ってるの。だから、私を殺さなければ貴方はここから出ることは不可能。残念だったわね、井村董」

体に痛みが走るが何とか、両手を床につきながら立ち上がる。

「そんなことないっ…。別の方法でこの世界から出れる気がする。貴方を倒さなくても、鍵がどこかにあるはず。」

黒い世界を見渡した。すると、上の方に黒くて丸い水晶が浮かんでるのが見えた。きつと、あれを壊せばこの世界から出れる気がした。

私の居場所

陽毬はもう一回、董の部屋まで行き董の部屋のドアを開けようとしたが、ドアの隙間から黒いもやもやしたのが見えた。陽毬は自分のせいでもしかして、闇が抑えきれなくなつたんじゃないかと思ひ込んだ。陽毬に恐怖が襲う。

「違う…、私のせいじゃないから」

陽毬の顔の色はどんどん悪くなっていく。

顔から汗がどんどん出てきた。

ドアノブを触ろうとすると、どんどん怖くなる。

ついに陽毬はその場から逃げ出してしまった。

「はあー！ー！！」

「黒い水晶には触らせない！」

「ぎゃー！！」

黒い丸い水晶に向かって飛んだが、もう一人の自分に邪魔され、そのまま床に落ちた。「簡単にこの世界から脱出できるわけない。世の中はそんな甘くはない。」

もう一人の自分はニヤツと笑った。

「たしかに、世の中はそんな甘くないよ。でも、元の世界に戻りたい、戻ったら何がいけないの?」

もう一度立ち上がった、黒い水晶に向かってジャンプした。もう一人の自分が、攻撃してきたがそれを交わした。

「簡単に戻れる方法なんてないわ!!」

もう一人の自分は、黒い雷を打ってきた。それに当たってしまった。

「うぐっ…。」

まるで、水仙ちゃんの時みたいだった。

全身に稲妻が走り、痺れて上手く動けない。私は四つん這いになり、地面を見つめた。「貴方には現実とは似合わないわ。この世界なら、似合うわ。だって、貴方は紫の戦士なんだから。汚れて、醜く、歪んだあの世界にいるのはもう嫌なんですよ?友達とかとの人間関係めんどくさいんですよ?母が別の男の人と喋ってるの見るのもう嫌ですよ?なら、この世界にいなさい。何もしなくても、無言でも許されるこの世界にね。」
「そんなことはない…。たしかに友達とは喧嘩したり、母が別の男といるのを見るのは嫌だけど。でも、私はずっと育ててきたあの世界が好きなの、だから…。」

気付けば私は手に力を溜めていた。

「な、何?！」

「だから、私がこの世界から脱出する事を邪魔しないで!!」

頭に血が上り、もう一人の自分を殴った。すると、もう一人の自分は飛んで行き、黒い丸い水晶にぶつかった。

黒い丸い水晶はパリンツと音を立ててヒビが入った。黒い丸い水晶から白い光が差し、全てを包み込んだ。

光が眩しく私は目を閉じた。

…気がつけば、ベッドの上で倒れていた。

見慣れた天井。ここは、自室だとすぐにわかった。私は、本当に元の世界に戻ってこられたのかと疑い、ドアを開くとそこには実亜さんと組織員数人とネソさんがいた。

「す、董ちゃん!!無事だったのね?」

「は、はい」

「ドアの隙間から、黒いモヤモヤしたものが見えたから心配してたのよ。でも、無事で良かったわ。」

実亜さんとネソさんと数人の組織員が私に拍手をしてくれた。

私は、やっぱりこの世界が居場所なんだと実感した。

〈第12話〉黒い世界

陽毬の髪は風に靡いていた。

陽毬の目からは希望はもうなくなっていた。董に会いたくないという気持ちと会いたいという気持ち halves だった。董の怒った顔。思い出すと、胸が締め付けられる。もう前のように董とは仲良くできないんだなど不安を感じた。

その時だった、陽毬の体から黒い煙が黙々と空に上がった。陽毬はそれに気づき叫んだ。

そして、その黒い煙は陽毬を包み込み、黒く丸い大きなものへと成長した。陽毬はただ、ただ目を閉じた。

頭に浮かぶ母の顔。

嫌いなのに、嫌いなんて言えるはずない。

『陽毬、こっつちよ。』

何処かで私を読んでいる気がする。そんな気がした。

『お母さん?』

濁った川の向こうに母はいた。

『貴方は、私がいるこっちの世界に来るの。』

両手を伸ばしていた。

空は暗く濁っている。

地面は草が生え、ピンクのペーパナが咲き誇っていた。そして真ん中には、石畳の道があった。

『お母さん……。』

『陽毬、貴方が大人になったんだから。今度こそ上手くやれると思うわ。だから、こっちにきて一緒にずっといましょ。』

『嫌よ、なんで今更。』

『あの頃は、まだ貴方は中学生だったじゃない。』

『私は現実に戻らなければならぬの。まだ、何も解決してないわ。』

『そんな事、どうでも良いのよ。貴方が生きやすい世界はこっちなだから。あつちの世界を気にする事はないわよ。』

「こんなの違う。私がいいたい場所はここじゃない！ちゃんと、自分の生きていた世界よ！」

頭を抱えて泣きそうになっていた。

視界に入っていた風景に、ひびが入り粉々に割れた。そのまま下に落ちた。

下に落ちると、懐かしい匂いがした。

顔を上げると、中学生の頃に住んでいた自宅だった。

母はその頃の姿で、料理をしていた。

「お母さん？」

立ち上がり料理をする母に近づいた。母はくるつとこつちを向いた。

「あら、お帰り。陽毬、今日の学校どうだった？」

「お母さん？何言ってるの、私は……。もう、大人よ。」

「社会人でも、中学生でもそんなのどうでも良いわよ。ご飯支度してるから待っててね。」

今更、気がついた。

これは、私の理想の母なんだと。

私はずっと、求めていた光景だったんだと。

「これも違う!!」

また、視界に入っていた風景にひびが入りバリンツと、音を立てて粉々になった。そ

して、また今度は下に落ちる事はなかったが、その場から動けなかった。「どう？ 求めていた幻覚は。」

隣に、もう1人の自分がいることに気が付いた。

「貴方は．．私？」

「そう。貴方の中の貴方よ。」

「私の中の私？ きゃー！」

もう1人の陽毬が、陽毬の頭に手を当てると陽毬は目を瞑った。

「ふふふ、暫く眠っていないさい。もう、貴方は誰にも助けられないから永遠の眠りにつくのよ。」

拒絶

「あれ、陽毬さんは？」

陽毬を捜していたが、どこに行っても見つからない。その為、奈苗に尋ねた。

「陽毬さんは……。昨日以来、姿を見かけなくなりました。まさか、何かに巻き込まれたのでは？」

「そうですかね……。」

董は携帯電話で陽毬に電話をかけてみる。だが、電波は届かない。深く考えるてみるも心当たりがない。だが、ある事を思い出した。

「井村さん？」

「(もしかして、私が怒鳴った事……。気にして私の前から姿を消しちやつたんじゃないかな。)」

董は何も言わずに奈苗の前からさっさといった。奈苗は表情を曇らせた。

学校では董と萩とネソが屋上で昼飯をとっていた。

「ねえ、陽毬さんがいないんだけど……。どこにいるか知らない？」

「私、ずっとアングリフにいるわけじゃないし。知らないわ。」

「ネソさんは？」

「ごめんなさい。知らない」

「だよね……」

萩が椅子の上に弁当を置き、柵の向こうに広がる町を見渡し始めた。ネソと董は萩を不思議そうにみる。

「ねえ、あれ！」

萩が何か指差していた。指先ていた方向を見ると、黒く丸いものがあつた。董は勘付く。

「まさか……今度は陽毬さんが狙われたんじゃ？」

「今日、学校終わったら3人であそこまで行きましょ！」

ネソが提案すると、董と萩は頷いた。

黒く丸いものがある場所へと3人は走っていた。その途中、純希と志倉にバツタリ会った。純希と志倉に事情を説明したため、純希と志倉も3人についていく事にした。

その場所につくと、黒い丸いものはさらに大きくなっていた。昔からアングリフにいるネソですら手がつけられない状態になっていた。純希は唾を飲み込む。

『純希、こつち。』

どこからか、声がした。

「い、いま陽毬の声…しなかった?!

「い、いえ。」

「私には聞こえなかったですけど」

周りにいた4人には聞こえていなかった為、耳を疑った。勘違いなのかなと。

『お願い、きて』

やつぱり、はつきりと陽毬の声が何処からか聞こえた。純希は黒い丸いものの中に入る事を決めた。

「やつぱり、この中に行くよ。この中に陽毬が!」

すると、志倉と萩が純希の腕を掴み純希を制止させる。

「だ、駄目ですよ! 私達は戦士だから、なんとか戦えますけど純希さんは普通の人間なんですから!」

「この中に入っていいたら、何が起こるかわからないのよ!それに、降霊ちゃんを救えるのかもわからないのよ!」

「それでもいい!ただ、ただ、陽毬を救いたいだけだ!」

そう言い、2人の腕を振り払ってそのまま黒い丸いものに走った。勢い良く黒い丸い

ものにぶつかると、簡単に入れてしまった。

萩と志倉が純希の後を追いつ、黒い丸いものに勢い良くぶつかるが、黒い稲妻が体を襲い入れる気配がない。

「まさか、降霊ちゃん……。純希以外の人を拒絶してるって事？」

「そんなわけ……。」

4人はただだと黒い丸いものを見つめるだけだった。

幻覚

目を開けると、視界には黒い空間が広がっていた。そして、黒い地面はなくなり下に落ちた。

痛いと思いつながら、目を開けると視界にフローリングが広がっていた。ここは家か。そう思いつながら、体を起こすとここは何処かの家だった。後ろから足音がした。振り返ると、セーラー服を着た、茶髪の少女が立っていた。その少女の表情は泣きそうになっていた。

僕は立ち上がり少女を見つめた。

「お母さん、今日ね、私：。数学のテストで100点だったのよ。」

そう言い少女はテストをポケットから取り出し、見せてきた。すると、背後から足音が聞こえてきた。振り返ると、そこには降霊三春がいた。やっと気が付いた。ここは、陽球の記憶の中なんだ。僕は部屋の隅に置いてある椅子に座った。

「そんな事、どうでもいい。さっさと家事しなさい。それがあんたの家庭での役割なんだから。」

「中学生になって初めて、数学のテストで満点取ったの！」

テストを三春に渡すが、三春はテストをゴミみたいに扱丸めてゴミ箱へ捨ててしまった。流石に、それはないんじゃないか。陽毬はきつと母親に褒めてもらいたくて、見せたのにその態度はないんじゃないか。

「何で… そんな事するの?!」

「だから、お前はこんな点を取っただけで余裕ぶってんじゃない!! 家事をなさい! こんな事を言うために、私に話しかけてるなら勉強なさい!! 時間は有効に使いなさい!!」

そして三春は陽毬の頬を叩いていた。

「いたっ…。」

叩かれた陽毬の頬は、赤く染まっていた。

例えば、娘の事が嫌いだったとしても中学生の娘にこんな仕打ちはないんじゃないか。

「今言った事が伝わったなら、さっさと自分の部屋に行つて勉強でもしてなさい!!」

「…。」

「返事は?」

「… 私は、お母さんとお話しする権利もないのね。」

そう言い残し陽毬は何処かへ行つてしまった。陽毬を追いかけるために、椅子から立

ち上がり走った。

「陽毬!!」

陽毬は玄関のドアの向こうの黒い世界の中へと消えていった。その時、風景が急にパリンツとヒビが入り、粉々に割れた。そして、気が付けば既にさつきまでいた黒い世界に戻っていた。陽毬を見失ってしまった。早く、陽毬を助け出さないとなんて思いながら、永遠に続く黒い道を歩いてきた。すると、誰かが浮かんでいた。茶色の長い髪に、赤いワンピースを着て、茶色のコートを着ているように見えた。それが本物の陽毬だと確信した。陽毬はまるで安らかに眠っているようだった。

剣の意味

「純希と降霊ちゃんを返しなさい！きや!!」

「志倉さん!!」

志倉が黒い丸いものの中に入ろうとしていたが、どうぶつかつても入れはしない。ぶつかるが、体に黒い稲妻が走り痺れて、押し返され尻餅をつく。萩と董とネソがどんなに黒い丸いものに攻撃しても、小さくなる気配はない。

「陽毬さん、どうして純希さんだけ拒絶しないの!？」

「わからないわ。もしかして、何か深い意味があるんじゃない?」

ネソは勢い良く剣を振って投げたが、剣はなぜか黒い丸いものの中に入った。

「?!」

「剣がどうして?!」

董も萩もネソも志倉も驚きを隠せなかった。

「この中で何が起こつてると言うの…純希…。」

「ぢやー!!」

陽毬の近くに行こうとしたが、足に何か引つかかかって躓いてしまった。足元を見ると、黒い茨があつた。これが原因か。よく見ると、陽毬がいる場所まで行く道を黒い茨が邪魔していた。しかも、陽毬は茨で手足を縛られていた。早く助けなければと思いつながらどうすればいいか考えていた。

カラントツと言う音と共に何か上から落ちて来た。よく見ると、それは剣だつた。純希は剣を持ち立ち上がった。そうか、これで茨を切つていけばいいんだとわかつた。

「とつ!!」

何十本も生えている茨を剣で切り刻んでいく。

…そしてようやく、陽毬に辿りついた。

「…陽毬迎えに来たよ」

陽毬の頭に手を当てるが、陽毬の目は覚めなかつた。陽毬の手足を縛っている茨も剣で切る。そして、陽毬が何処にも行かないように陽毬の腰に手を当て、抱きしめた。

『私は』

陽毬の声が聞こえた。陽毬自体は喋つてはいないが、心の中に入って来た気がした。

「大丈夫。一緒に、皆の所へ戻ろう。こんな世界にいても、君は辛くなるだけだ。だか

ら、一緒に元の世界へ帰ろう。」

すると、陽毬は目を開けた。

「純希……、助けてくれてありがとう。」

「ううん、君自身が頑張ったおかげだよ。」

陽毬は純気が持っている剣に気が付いた。

「その件って……。」

「あーこれ？なんか、転けた時たまたま落ちて来たんだ。」

「ネソの剣ね、これ……。ねえ、ちょっと剣貸してもらっていい？」

純希は陽毬に剣を渡した。陽毬は、剣の先っぽを何かに向けた。剣の先っぽの先には、黒の水晶が浮かんでいた。

「な、何をするんだ？」

「あの黒い丸い水晶を壊して、この世界から脱出するの。もし、剣があれを割れなかったらもう2度と戻れないけど、いい？」

「勿論。」

「運任せで行くわよ。」

そう言い、陽毬は剣を投げた。

すると、剣は見事に黒い水晶に突き刺さり、割れたのだった。

おかえり

黒い水晶は、白い光を発した。それと共に、黒い煙がもくもくと出てきたが、暗い煙は白い光に負け視界は白くなった。

「助かるかと思ったのに、やっぱり駄目だったみたいね。私のせいでごめんなさい。純希。」

「別に良いよ。自分は助からなくても、陽毬さえ助かればって思っていたのに。」
意識が朦朧とし視界は黒くなった。

目を覚ますと、白い天井が見えた。ここは自室ではない。それだけがわかった。

「降霊ちゃん！」

誰かが私の顔を覗いている。ぼやけてる視界が、はつきりとしてきた。どうやら、私の顔を覗いてるのは志倉ちゃんみたい。

「志倉ちゃん……。」

「ひ、陽毬さん……。」

「董ちゃん…。」

志倉ちゃんの隣に董ちゃんがいた。

私は体を起こした。隣のベッドで、純希はまだ目を瞑ったままだった。まさか、私のせいで…。

「純希は？」

そう聞くと志倉ちゃんは微笑んだ。

「大丈夫よ。降霊ちゃん。純希は、さつき目が覚めて今は疲れちゃって寝てるだけだから。」

純希は眠ってるだけみたいで良かった。私のせいで、もし純希が一生目を覚まさなかつたとしたら後悔しか残らないもの。

「でも、急にびっくりしちやったわ。だって、ネソさんと井村さんと志倉さんと私の4人であの変な黒い丸いものの外で2人を待っていたら、急に白い光が黒い丸いものの中から差しして、強い光が私たちを襲って、目を開けたら2人が倒れてたんだから。でも、2人とも、無事そうで何よりよ！」

4人は2人の無事を確認して、病院から出て行った。それぞれの家に帰る前に、志倉

の提案で4人はカフェへ寄ることにした。

萩はクリームソーダ、ネソはオレンジジュース、志倉はアイスコーヒー、董はフライドポテトを頼んだ。

「に、しても、よかったですね！陽毬さんも純希さんも無事で。」

董はモグモグとフライドポテトを食べていた。志倉は、アイスコーヒーを一口飲み、グラスを机に置いた。その振動で氷はカランと音が鳴る。

「……私、ずっと純希に片想いしているの。」

「え、志倉さんと純希さんって付き合ってるんじゃないの？」

純希は志倉と付き合ってると思っていた萩は、不思議そうな顔をした。ネソはオレンジジュースを飲みながら志倉を見つめる。董はフライドポテトを食べていたが一旦、止めて志倉を見つめた。

「本当は付き合ってる。何年経っても、私の方に振り向いてくれないのよ。それなのに、降霊ちゃんの仕事になると真剣になるのよ。寧ろ、私に対して態度が酷くなるばかりなのよ。」

気がつけば、志倉の目からは涙が頬を伝って、机に落ちていた。萩はすぐにポケットの中に入っていた、ハンカチを志倉に渡す。

「これで、涙拭って！」

志倉は、ハンカチを渡され涙を拭うのを躊躇ったが、萩の領きを見てハンカチで涙を拭った。

「でも、きつといつかは純希さん… 志倉さんに振り向いてくれると思いますよ！」
「そうよ、頑張つて。」

董とネソから応援され、志倉はニコツと笑った。

〈第13話〉萩の気持ち

「どうして私の事は突き放してくる癖に、降霊ちゃんの事になるとあーやって、真剣になるのかしら。」

ベッドの上で仰向けになりながら、天井にある丸い薄暗く光がついている電球をぼんやりと見つめていた。志倉はずっと、考えてた事がある。それは、純希のことだ。純希は昔から自分に対しては素っ気ないのに、途中から現れた陽毬に対しては親切に接していた。どうして。どう考えても、一緒にいる時間が長いのは自分。なのに、純希は陽毬の事になると無茶をしても突っ走る。正直、あの時純希だけが助かってればよかった。正直、陽毬は助かっても助からなくてもどっちでも良かった。何度そう思ったことか。志倉は、陽毬に対してそう思ってしまう自分が嫌で、嫌でしかたなかった。

本音を言うとは純希の周りに、女の子が増えるのも嫌だった。純希の周りにいるのは自分だけで良い。自分以外必要ない。そんな考えだった。

「ねえ、降霊さん。」

「何？水鳥ちゃん。」

海が見える丘で、萩は個人的に陽毬を呼び出していた。陽毬は何か萩にしちやっただけではないかと思ひ不安が募った。

「あのね、こないだの降霊さんが助かった時の事なんだけど。」

その時のことかと陽毬は、少し安堵する。

「それがどうかした？」

「あの後、病院から出てって……志倉さんとネソさんと井村さんと私の4人でカフェに行つたのよ。で、志倉さん泣いちゃつて。何年も純希さんの事想ひ続けてるけどなにも振り向いてくれないらしいわ！」

最初は小さな声だったが、徐々に萩の声は大きくなった。

「……それって、志倉ちゃんのアプローチの仕方が不味いんじゃない？」

「違うわよ！純希さんに近づくから、いけないんじゃないのって事？」

「な、何でそうなるの？純希とは全然距離あるし……寧ろ、志倉ちゃんの方が純希と距離近いじゃない？あの2人はお似合いのカップルだと思つて。」

「私は、大人の関係には首突つ込みたくはないけどこれだけ言わせてもらうわ。志倉さんは何年も純希だけを想つていた。だから、2人の間には邪魔しないであげて降霊さん。じゃあ、私帰ります。」

そう言い萩は、トコトコとその場を去つていった。陽毬は萩を呼び止めようとしたが

やっぱり辞めた。

「つまり私は、邪魔って思われてると言う事？何なのよ、あの子。大人の関係に首突っ込みたくないとか言ってたけど普通に私に言ってきたるんだから、首突っ込んでるのとおなじよ！」

陽毬は萩に対して、腹を立てた。

純粹な紫の戦士は

「ねえ、どうしてあの時……陽毬さんを助けたんですか？」

「あー。それは、陽毬の親と僕が深い関係であつてね。」

純希は青い空に浮かぶプカプカと雲を見つめながら、董の質問に答えた。

「陽毬さんの親？」

「ああ。今はまだそんなに深い話はできないけど、強いて言うなら僕は呪われているんだ。こんな話、本当だつて信じないよね？」

苦笑いをした。そんな純希を董は、不思議そうに見つめた。

「どうしてですか？まあ、確かに信じ難いですけど……闇の力があるくらいだから呪いだつてあると信じてます。それに、純希さんがそんな嘘つくはずないですし。」

純希はため息をついた。

「君は、まだ純粹なんだな。でも、それで良い。君は君らしく生きてくれ。後、陽毬のことがあつても、幸せになるまで守つて欲しい。」

「当たり前ですよ。陽毬さんは私を助けてくれた恩人なので、私が死ぬまでは必ず何があつても、陽毬さんを守ります。恩は仇で返したくないので。恩は必ず恩で返します

！」

「鈍感だなあ。紫の戦士は。」

ベランダで洗濯を干していた志倉はある事に気がついた。

「あ、あらーこれは… あの子のハンカチ！」

それはこないだ、泣いた時に萩が貸してくれたハンカチだった。純希と陽毬のことで頭がいつぱいで、すっかり返すのを忘れていた。近いうちにハンカチを萩に返したいが、メール交換はしてないしどこに住んでいるのかもわからない。アングリフ本部に行つて直接渡せば良いのかもしれないが、アングリフ本部には行けない。だって、志倉はシユラハトの組織員の1人だから。

本当は董ちゃんにあんな事言つたが、正直自分が陽毬を守りたい。だが、守れない立場だ。カプセルの事がバレたら陽毬は僕を嫌いになり関係を切るだろう。正体がバレてないだけまだマシ。

その時、胸の中で何か違和感があつた。

その時、黒い煙が体から出てきた。

「あーっ！！」

その黒い煙は、僕の全身を包んだ。きつと、陽毬に正体がバレないから不安だったんだろう。だけど、その不安が耐えきれずに……

そうか、最後は僕なんだ。

10個目のカプセルの中身は僕に入ったんだ。ごめん。皆。皆の不安を利用して、悪を作り出して本当にごめん。

特に陽毬。

敵なのに近づいてごめん。

僕はこうするしかなかったんだ。

9人の人の不安を利用して、悪を作り出した末路がこの有様か。自業自得なのは、自分でも知っている。寧ろ、悪をして悪が自分に返ってこない事はまずないんだ。

陽毬という名前

パリンツ

両手で持っていた、真つ白の綺麗なお皿をいつのまにか落としたみたい。お皿は原型もなく粉々に割れていた。何この胸騒ぎ。いつもはこんな感情になる事なんてそんなにないのに。私は、掃除用具のロツカーから箒と塵取りを取り出し、粉々に割れたお皿を片付けた。何か起こりそうな……いえ、既に何かが起こっている気がする。知っている人が……私の前から消えそうな気がする。

自室から出て、廊下へ行き階段を上り一階へ行き、外へ出た。外は雨がざーつと降っていた。傘も持っていないかつたから、雨に打たれながらその辺を歩いた。雨つて、何だか嫌いのに落ち着く。何でなのかしら。

「お母さん……。」

私は私を捨てたお母さんのことが嫌いなはずなのに、お母さんを未だに求めている。母は、事故で亡くなつてもうこの世には何をして、蘇らないと言うのに。生き物は一度きりの人生であつて、命が尽きて枯れ果ててしまつたらもうどう願つても、どう祈つ

でも一つの生き物として戻れない。もしくは、別の何かに生まれ変わる。もし、お母さん、もし何かに生まれ変わってたら、私の事思い出してくれる？ 私の母だって思い出してくれる？

「ねえ、この子の名前どうする？」

「うーん。そうだな、陽毬はどうだ？」

「陽毬？」

「ああ。誰かにとつて陽だまりみたいな存在になつて誰かを支えて、向日葵みたいないつも笑つていてほしい。だから、陽だまりと向日葵の被つてる字をとつて、陽毬。」

名前の由来を聞いた母親は、納得した。

「そうね、良い名前ね。これから貴方の名前は陽毬。」

「(あら、純希はどこかしら?)」

志倉は純希を捜すために、シユラハト本部のあちこちを隅から隅まで歩いていたが何処にも見当たらない。もしかして、何かあつたんじやないのかと、急に不安になり出した。周りをキョロキョロとみていると、シユラハトの組織長である井村颯を見つけた。志倉は颯を呼び止め、颯はその場に立ち止まった。

「あ、あの！純希は何処にいるか知りませんか？」

颯はうーんと腕を胸の前で組んで、地面を見た。

「純希か。今日はまだ姿見てないぞ……。」

志倉は肩を落とした。

「そうですか……。教えてくださって、ありがとうございました。」

志倉は組織長の前から去っていった。颯はある事に勘付いた。

「(もしかして、純希の中に入ったカプセルのあれが?)」

ここはどこだ？全てが真つ暗な空間だった。陽毬がいたあの空間と似ていた。つま

りここは……。

戦いの世界に生きる者

やっぱあの時言っていたことの意味聞いた方がいいかな……。どうして、私に陽毬さんを守ってほしいと言ってきたのか。純希と陽毬さんの親にどんな深い関係があるのか。呪いとはどんな呪いなのか。2人ともこれから関わってく人だと思うからそこら辺のこと一応、知つといたほうがいいよね。純希さんを捜すために外に出ると雨がざーつと降っていた。

「いたー！」

「志倉さんー！」

色々考えていたら、志倉さんと鉢合わせしてしまった！志倉さんは何処か焦っているように感じた。

「ね、ねえ……。あの……。純希何処にいるか知らない？」

「私も今ちようど、純希さんを捜してました。」

「一緒に捜しましょうー！」

「はいー！」

思い当たる場所の何処に行っても、純希さんはいなかった。だが、アングリフ本部の

近くに来た時、木の上に狐のお面を被った男がいる事に気が付いた。

「は！貴方は……」

その男はこつちに気づき、ジーっと見てきた。

「だ、誰なの！」

「名はない。それよりも、今は紫の水晶を手に入れる事が最優先だ。それを果たすまで

帰らない。君が紫の戦士のようだね。井村董」

「どうして、私の名を！」

驚いた。何故、このあんま話した事のないような狐のお面を被った男に私の名前を知られていたのか。

「君はこの世界では有名さ。紫の水晶から闇の力を与えられた、紫の戦士だから。さあ、渡してもらおうじゃないか紫の水晶を。」

そういった時、狐のお面を被った男は、ポケットから長い紐を取り出した。そして、それを私に向けて投げて来た。私は見事にその紐に腰と手を縛られた。これじゃあ、動けない。

「な、何をするの！」

志倉さんは危ないのに、紐に手を当てて解こうとしていた。

「君は黙っている。志倉綿花。君はシユラハトの組織員なんだから、そんなアングリフ

の戦士を守る事はしなくていい。」

「えっ……。」

志倉さんつて…… シュラハトの組織員だったの？今まで知らなかった……。

「これでどうだ！」

紐の手で持つている部分を引っ張ると、私の体全身に黒い稲妻が走る。志倉さんの体にも手から黒い稲妻が走った。

「あ—————!!」

「きゃ—————!!」

稲妻が止まると、私と志倉さんはそのまま地面に頭から倒れた。まだ、ちよつと全身が痺れている。志倉さんは、身体が痺れながらもクラクラしながらも地面に両手で触り、足に力を入れ立ち上がろうとしていた。私は腰と手を紐に縛られているため、どうしても力を入れても立ち上がれない。

「しぶといな。」

「……女の子をつ…… 紐でしばつ…… ううん…… るなんて…… 酷い…… わっ!」

「そんなのなど関係ない。戦士からにはそんなのは普通にある事だ。それに、女の子だからって何だ？男も女も同じだから、容赦はしないぞ。戦いの世界はそんなに、生優しくないんだ。」

「そんなの……う……知ってるわっ……。」

強気に言葉を言い返す志倉さんを見ていたら、私も早く立ち上がらないといけないな
と思っただが、やっぱどうしても紐が邪魔で立ち上がれない。

「まあ、いい。それよりも、井村董から始末しよう。」

狐のお面を被った男は、私に掌を向けてきた。もう、逃げられないし駄目だ……。私は何
もする事が出来なくて目を閉じた。

消滅

「そこまでよ！」

何処かから声がした。志倉が後ろを向くと、陽毬が銃を狐のお面を被った男に向けていた。陽毬はとても険しい表情だった。

「邪魔者がまた来たか。」

「董ちゃんと志倉ちゃんに何かしたら、容赦なく銃の玉を撃たせて貰います。」

「ふっ、打てるもんなら打ってみろ。」

「私をなめないで。」

銃を持つては何故かとても震えていた。陽毬の異変に董は気づく。董は陽毬の腕に手をあてた。

「ひ、陽毬さん……そんなに銃を撃つのが嫌なら下げてください！闇の力でどうかしますので……。」

「私がこの人を倒さない限り、気が済まない者。」

「ふっ、撃ちたいなら撃てばいい。」

「望むところよ。」

その場にパンっという音が響き、弾丸は狐のお面の紐を引き裂き、狐のお面を地面に落下した。狐のお面をしていた男は、片手の掌で顔を隠した。

「ふっ、君は銃撃つのが上手いな。」

「だから？なめないでって忠告したんじゃない。」

「だが、擦り傷のひとつもない。残念だったな。」

「人を殺すことはしないわ。それに、貴方の正体をどうしても知りたかっただけよ。さあ、顔を隠してる手を退けなさい。」

男はニヤツと笑い、顔から手を離し顔を上げた。すると、陽毬は尻餅をつき銃を地面に落とした。董と志倉は、驚きのあまり目を見開いた。

「純希……？」

狐のお面をつけていた男の正体が純希だったからだ。純希は赤い目だった。董はあの事に勘付く。

「もしかして、純希さんも……。」

純希はニヤツと笑みを浮かべ、掌を開くと純希の掌に黒い剣が現れ、それを握った。純希は木から飛び、地面に下りた。そして、陽毬に近づいた。

「まず、お前から抹殺しなければな。」

そう言い純希は地面に尻餅をついたままの陽毬の前で剣を振りかざした。陽毬は、抵

抗できずに純希を見つめた。

「降霊ちゃん!」「陽毬さん!!」

志倉と董の声が重なる。

『やめろおおおおおおおつ!!』

心の中で何か声がした。純希は急に胸が苦しくなり、黒い剣を地面に落とした。そのまま、手を胸に当て地面に苦しそうに座り込んだ。

「うっ……!」

「純希?」

陽毬は、純希の肩に手を置いた。志倉は陽毬の隣に座り込む。

「どうしたの? 純希……」

「違うっ…… 本気で、殺したいなんて思わない…… じ、邪魔するな!」

まるで、純希に悪が取り憑いたようだった。

「純希、純希!!」

陽毬が純希の肩を揺すった。

「お前は紫の水晶を奪えと命令された!…… や、やめてくれ! もう出て行ってくれ!」

その間、純希はおでこに手をあて苦しそうだった。純希の目の色が赤に変わったり元の色に変わったりしていた。

「違う、僕は僕でしかないんだ!!」

純希がそう叫ぶと、黒い煙が純希の体から外へ出て行き、消えてしまった。

こうして10個全てのカプセルの中身は消滅したのだった。

〈第14話〉虚構有影の過去

それはもう何年も前の出来事だった。

現在、ネイヴィーの組織長である虚構有影は昔はアングリフの組織員の1人だった。ある出来事が起こるまでは……。その出来事以降、虚構有影はアングリフをうらむようになつてしまった。

「闇の力を作るプロジェクト？」

「ええ。このプロジェクトは、闇の力を作り出し、もし世界で戦争が起きそうになったらこの闇の力を使って戦争を止める。それが、世界平和に繋がる一歩だと思つていて。だから、荒波四季さん？ 貴方にこのプロジェクトのリーダーとして、組織員と研究員と科学者達を引っ張つて行つてほしいわ。」

アングリフの昔の組織長だった女性は、荒波をプロジェクトのリーダーとして選んだ。荒波は、元々、集団をまとめる事が得意でリーダーシップがあつた。その為、リーダーに抜擢されたのだった。荒波は少し悩んだが、プロジェクトのリーダーとして闇の力を生み出す人々をまとめることを決意した。

「はい、是非やらせてくださいー！」

「お願いね。」

表では世界で戦争を起こさない為に、闇の力を作ると言っていたが、裏では全く違った。

「ねえ、有影。」

「あ、おかえり。組織長に呼び出されたって何かあったのか？」

「う、うん……。実は組織長がね、世界で戦争が起こりそうになったら戦争を止める為に闇の力を作るらしいの。でね、そのプロジェクトのリーダーに私を選んでくれたみたいなの！」

「そうか！ 四季は、リーダーシップあるし皆を纏める事ができるし、納得だな！」

「ふふ、選んでくれた組織長のために、頑張らないとね！」

この時、四季と有影は付き合っていた。結婚寸前まで関係が続いていたのだった。

「なあ、四季。」

有影は真剣な表情をして、四季の名を呼んだ。

「何？」

「あ、あの……。その……。これから忙しくなるのは知ってるが……。お、俺と結婚してください！」

有影はプロポーズをした。四季は、目の前で手を合わせた。

「ご、ごめんなさい！あ、あの：：プロジェクトのことはいつちやったから：：。忙しくなるし、だから、プロジェクトが成功したら結婚したい！」

有影は少し残念そうな顔をしたが、微笑んだ。

「じゃあ、プロジェクトが成功したら改めてまたプロポーズするよ！」

「ええ！」

だが、そんな2人の思いは現実にはならなかった。

プロジェクトが成功し、闇の力が実現した日のことだった。何人ものプロジェクトに携わってきた人達が闇の力の完成に喜んだのだった。だが、四季が組織長からの命令で素手で闇の力を触ると闇の力から黒い光が発して、その場にいた何人ものプロジェクトに携わっていた人々は消えてしまったのだった。少し残っていた闇の力は紫の水晶に封印した。有影は、一部の残っていた闇の力をカプセルの中に入れた。

「くそっ：： 四季が：：。こうなったら、意地でもアングリフを潰してやる!!」

有影は一部の闇の力を増殖させアングリフを潰す為に、新しい組織“ネイヴィー”を作り出した。

新たな敵の気配

「やつぱりか。お前達に闇の力を改造したカプセルを渡したがやはり、駄目だったのか。やはり、シユラハトにあのカプセルを任すべきではなかったな。まあ、シユラハトと関係は切るぞ。」

『ど、どうか！もう一度チャンスを一！』

電話の向こうの相手はあわあわしていた。

「チャンスなどない。10個も貴重なカプセルを無駄にしたのだからな。既に、次の手はもう打つてある。」

虚構は、電話を切った。

「お呼びですか。虚構有影組織長。」

「ああ。ドンクレハイツよ。今回からお前達の出番だ。アングル戦士達を全員倒し、紫の戦士から紫の水晶を奪ってくるようにな。」

「了解致しました。組織長。」

ドンクレハイツという男の左右には、男2人、女2人がいてひざまづいている。そして、ドンクレハイツはひざまづきながら、顔を上げているが、後の4人は顔を下げている。

た。

「お前達にかかっているんだ。」

5人はアジトで会議をしていた。

「やつと、俺たちの出番になった訳か。カプセルが全て使われるこの日を待っていた。さあ、チマタ、モルケ、クランヌク、ダーストニ……って話聞け!!」

チマタは美味しいカフェを本で探していて、モルケの上でうつ伏せで寝っていて、クランヌクは髪の毛を櫛で一本一本丁寧に梳かしていて、ダーストニは鏡を見ながら化粧をしていた。

「話?なんのことですか?」

「おい、聞いてなかったのかクランヌク……。」

「今日に限って、髪がくるつとなってストレートになってくれないんですもの!」

「いや、だから……。」

ドンクレハイツは、ジト目でクランヌクを見つめていた。その次にダーストニを見つめた。

「何?ドンクレハイツ。化粧そんなに変?」

「違う、俺の話聞いてたか?」

「あー、克蘭ヌクとの話？聞いてたわよ。克蘭ヌク、アドバイスしてあげるわ。ヘアアイロンを使うと、髪の毛ストレートになるわよ。」

「本当ですか？」

「いや、だから…髪の毛の話じゃなくて…はあ。」

ドンクレハイツはため息をついた。次に、チマタを見た。チマタはまだカフェを本で探していた。

「何だ？ドンクレハイツ。今度、このカフェ・カフエー・カーフェカーフェっていう、カフェに行かないか？」

チマタは隣に座っているドンクレハイツに、店のめにゆーを見せた。

「だから…カフェの話じゃなくて…。」

「戦士達と仲良くなって、紫の水晶を奪う事も必要だと、俺は思うぞ？」

「（あ、チマタはこんなかで一番まともだった。モルケは寝てるし論外。）」

このドンクレハイツをリーダーとする5人組がアングリフの戦士達の前に立ちほだかることとなる。

古い家

「純希。何故、君を呼び出したかわかるだろう？」

「はい。」

純希は暗い顔をして、颯は表情からでもわかるようにとてもカンカンに怒っていた。カプセルの事だろうと、予測がついた。

「何か言ってみろ。」

「僕は、シユラハトを代表して10個のカプセルを使って、人の不安な気持ちを利用して紫の水晶を手に入れようと思いました。ですが、紫の水晶は手に入る以前に、戦士によりどんどん倒されていきました。」

「10個もカプセルをお前に託したのに、どれ一つとして紫の水晶を奪う事はできなかったな。ネイヴィーの組織長はカンカンに怒っていた。しかも、シユラハトとの関係を切ると言っていた。この件に関して、君はどう責任を取ってくれるんだ？」

「すみません。言葉にできないほど大きな罪を犯しました。なので、自主退職させていただきます。」

「話わかってるなら早いな。さらばだ、伊織純希君よ。」

純希は、颯に頭を下げ颯の前から去っていった。こうなる事はもうわかっていたから、どうも出来ない。純希は今までお世話になった部屋から、荷物を全てまとめ駐車場に行き車に乗り込んだ。そして、車を運転し向かった先にはボロボロな家が建っていた。窓にはヒビが入り、ドアは傾いていて庭の花が枯れ、草は茂っていた。このボロボロな家は、純希がシユラハトの組織員になる前に住んでいた家だった。懐かしい匂いを胸いっぱい吸い込む。この家にはもう戻ってこないって決めていたつもりだった。なのに、こんなに早く戻ってくるなんて。そう思いながら、ソファに座りテレビの電源をつけた。テレビから流れてきた冴えないニュース。ポーツとテレビを見つめていた。一体僕はここで何をしてるんだろう。次の道を早く探さなければいけないのに。純希は、天井の豆電球の光を見つめた。

アングリフ

その組織名が頭に浮かんだ。だが、アングリフの組織員達にとって自分はよく思われていないだろうし、何よりアングリフの組織員達や戦士達の心の不安を襲い、魔物を作り出してしまった。例え、それは上からの命令でも許されない。もう、後戻りなどは出来ないことも知っている。早く、次にお金を稼げる場所を探さないと、未来はこの先黒く塗り潰されたままだ。もうどうにかして頑張るしかない。純希は、そう心に誓った。

もう、シユラハトや颯のことを考えるのはやめよう。過去の事を振り返るのはやめよう。どうか、陽毬に幸せになつてもらおう道を見つけ出そう。そうすればきつと呪いから解放される時が来ると、純希は思った。

純希の出会い

純希はポケットに手を入れながら散歩していた。すると、段ボールに入れられた子犬が段ボールから顔を出して純希を見つめていた。子犬はとても寂しそうだった。こんな可愛い子犬を捨てる人を許さない。純希は、子犬を放っておく事が出来ずに、段ボールに近付いた。

「もしかして、捨てられたのか？」

「わん…。」

子犬はしょんぼりした顔だった。茶色のポメラニアンだった。純希は両手で茶色のポメラニアンを抱っこした。

「大丈夫。君はもう一人じゃないよ。僕も、組織に捨てられちゃって、今孤立してるんだけどね。必ず、君の飼い主探してあげるから。それまで、僕の家に来るかい？」

「わん！」

「まあ、とりあえず君は僕の家族の一人…、いや、唯一の家族だから…。名前つけよう。うーん、茶色いポメラニアンの子犬で… チョココ！君の名前はチョコ！」

「きやん！」

純希は、チヨコを抱き締めながらチヨコの頭を撫でた。フワフワしている。綿飴みたいだった。

「(チヨコ、本当は僕みたいな人じゃなくて綺麗で優しい女性の家に行きたかったんだろうなあ…。でもまあ、僕が良い里親を探してあげなければな。)」

純希は、必ずチヨコのとでも優しい里親を見つけることを誓った。チヨコを何があつても一人にはしない、何があつても殺処分はさせない。チヨコには幸せになつてもらいたい。

「青の戦士ちゃん、これありがとう…。」

泣いた時に借りたハンカチをやつと青の戦士に返す事が出来た。これで、志倉の中の気持ちが一掃されたのだ。

「いいえ。もう、ハンカチのことなんて忘れてましたし…。でも、志倉さんがもし純希さんと結ばれたなら、とても嬉しいですよ。」

自分も純希に恋していると言う気持ちを隠し、水鳥菘は志倉綿花の恋を応援した。志倉は、年下の女の子に自分の恋を応援され、ちよつと恥ずかしいなと思つたが素直に恋の応援された事が嬉しかった。

「ありがとう。貴方は優しいし、素敵な相手が見つかると思うわ！貴方には幸せになつ

てほしいもの。」

「いえ、私：そんな性格ありませんし外見にも自信ないので。志倉さんは本当に外見も中身も綺麗で、優しいし頼りがあるので志倉さんは純希さんと結ばれて、幸せになつてほしいです。」

志倉は、優しい目つきになり、萩の頭に手を当て、萩の頭を撫でた。

「ありがとう。貴方が性格悪いなんて思ったことないわよ。寧ろ、とっても優しいわ。」
そう言い微笑んだ。

純希の行く宛

次の日。

朝早くから、純希はチヨコの散歩に出ていた。チヨコはとても元気が良くて、とても走る。純希は後を追うのが大変だった。

「わん!」

「ちよ、ちよ!チヨコ!はやい!」

と、その時チヨコは誰かの足に当たった。純希は、チヨコの代わりに謝った。すると、チヨコがぶつかった足は、陽毬だった。

「じ、純希!」

「ひ、陽毬!」

こんな所で思いがけない再開をした。2人は近くに置いてあるベンチに座った。チヨコは純希の胸に飛び込んだ。

「貴方が、犬飼ってたなんて初めて知ったわ。」

「ああ。実は昨日拾ったばかりで。」

「昨日?」

「うん。歩いてたら、段ボールに入ってたチョコを見つけて、可哀想だし、里親探してあげようって思ってたんだ。」

「そうねえ。もし、純希がこの子見つけてなかったら、この子は保健所で殺処分されてたかもしれないわよね。」

「…にしても、殺処分って残酷だよな。何もしていない動物達を殺すなんて。犬や猫も人間達みたいに、感情があるのに。」

「そうよねえ。」

「それに、里親見つけるまでチョコは一人にさせたくないんだ。守りたいって言うか…。」

「アングリフで預かれたら良いのだけれど…。組織長がアレルギーみたいだから…。難しいのよねえ。」

陽毬はチョコの頭を撫でていた。

「そう言えば僕も捨てられてるんだよね。」

「え?」

「実は、僕シユラハトにいるの辞めたんだよね。だから、今は行くあてもないし。どうしようかなあつてさ。」

陽毬は胸の前で腕を組み、何かを考え始めた。純希はそんなひまりを不思議そうに見

る。

「貴方が、組織長から来ること許可されるかわからないけど、アングリフにきたらどう？」

陽毬からの提案は、意外すぎた。純希はすぐに頭を横に振った。

「そ、そ、それは無理だよ……自信ないし。それに、アングリフの組織員や戦士達の心の不安を襲って魔物を作り出してしまった。陽毬もその中の一人だったんだよ？それなのに、都合よくアングリフに入るってなんか嫌なんだよね……。」

浮かない表情をしている純希の腕に陽毬は腕を絡めた。

「別に。確かに、それは貴方が悪いけど……その分、良いことすれば良いじゃない？ね？」

陽毬のポジティブさに呆れつつも、純希は頭を縦に振った。

「君がそう言うなら、僕は君を信じてアングリフに入る事にしてみるよ。まあ、アングリフの組織長には許してはもらえなさそうだけど。」

「大丈夫よ！私が何とかするから！組織長の事は、私に任せなさい！」

陽毬は自信満々だった。

〈第15話〉 チョコと少女の出会い

蝉の声が聞こえてきて、夏に入りかけたある日の朝の事。純希はいつものようにチョコの散歩に外へ出かけていた。既に純希は、アングリフの組織員として働いていた。組織長には、一回断られたが陽毬が何とか、組織長を説得してくれ何とか入れた。

「チョコー！本当、足速いなー！」

「わんー！」

チョコは楽しそうに走っていた。すると、女子中学生くらいの緑髪の子が近づいてきて、座り込んだ。

「わあ、可愛いですね！触って良いですか？」

「良いよー！」

純希が許可すると、緑髪の女子中学生は、しゃがみチョコの頭を撫で始めた。

「可愛い！名前、なんて言うんですか？」

「チョコっていう名前。似合ってるだろ？」

「はい！茶色で、フワフワしててチョコの綿飴みたいで……。可愛いです！チョコちゃんみたいな犬飼いたいなー！」

土筆はそんなことをぼんやりと呟いていたつ

「君は、動物好き？」

「はい！動物大好きで、今は家でインコと猫とハムスター飼っています。そういえばまだ名前言っていないませんでしたね。あたしは、永緑土筆と申します。土筆と呼んでくださったら嬉しいです。」

「土筆ちゃんか。良い名前だね。僕は伊織純希つて言う者さ。もし、次会う時まで名前覚えてくれていたら嬉しいよ。それに、チヨコも。」

「勿論です！急に話しかけてしまつてすみませんでした。」

土筆という少女は頭を下げ、一步步出した時純希に呼び止められた。

「土筆ちゃん。」

「はい？」

土筆は不思議そうに振り向いた。

「あの、実は僕の家ボロボロで正直、チヨコが可哀想なんだ。家には遊び道具とか全然ないし、僕が仕事している間は基本的に職場にいるから、チヨコが一人になっちゃうんだ。こう言うのもあれかもしれないけど、土筆ちゃんにチヨコの里親になつて欲しいんだ。」

土筆は一瞬思考停止し、真顔になったがパツと花を咲かせたような表情になった。

「え、良いんですか?!あたしがチヨコちゃんを飼つて」

「チョコだつて、僕より君みたいな女の子に飼われた方が嬉しいだろう。」

純希は、リードを土筆に渡した。

「君ならチョコを可愛がつてくれる自信があるし、他にも動物飼っていると云つていたからチョコも1人になる事はないだろう。」

土筆は頷いた。

「チョコちゃんを何があつても、一人ぼっちにはさせません。チョコを絶対幸せにします！」

土筆はチョコと共に何処か去つていった。きつとチョコにとって新しい家に行くの
だろう。純希は、何処までも広がる青空を見上げた。

敵達

「で、誰が一番最初に戦士に立ち向かうのよ。」

「克蘭ヌク、お前が行け。」

「はー?!何でですか?!」

克蘭ヌクは、机を両手で叩いた。

「もしかして、チマタ。君が最初に戦士の所に行くの怖いってことなんじゃないの?」

モルケは、両手を頭の後ろで組み、足を机の上に乗せ背もたれに寄りかかっていた。

「なら、モルケがいけ!」

「ドンクレハイツからの命令でも虚構組織長からの命令でもないから、絶対いかな〜い!」

「なら、ダーストニ。お前が行くんだ。」

「私の体に傷一つでも、ついたら責任とってくれると言うの?」

「は?」

「責任取ってくれるなら、私行ってくるわよ?」

チマタは、3人に呆れてため息をついた。ドンクレハイツは、紫の水晶のありかを突

き止めに外へ出かけていた。その為、戦士たちを倒すのは4人に任せられていた。

「はあ、これじゃあ埒があかない。」

「なら、チマタが行けば良いじゃない。もしかして、戦士達が怖いんじゃないか?」

「クランヌクも自ら行かないのは怖いんじゃないか?」

「人に擦りつけるのはかつこ悪いわよ。チマタ。」

「ダーストニコそ、責任を人に擦りつけようとしてるじゃないか。」

「何よ、人に責任を擦りつけるのが悪い事だとしても言うの?」

「なら、もう4人でいけばいいじゃん?戦士達に自己紹介するみたいにさ。」

「それは1番やりたくない。こんな奴らと一緒に戦士達の前に行ったら、舐められるしな。」

「はあ?わたくしが弱いとでも言いたいのか?わたくしは、まあ、貴方達3人よりは、力があると思いますわ。一緒にしないでくださる?」

「ふんっだ、まあ1人で行けばかつこいいかもだけど、4人で行くとかつこ悪くなっちゃうね。」

「私の邪魔はさせないわよ。戦士達は全員私の手で倒すのだから。」

4人は戦士達と戦う以前に、4人の中でいがみあっていた。4人とも全員、自分が1番と言う自信を持っていた。4人に共通することは、負けず嫌いで自己中心的な性格

だ。

「ふん、わかったですわ。わたくしが行きますわ。」

克蘭ヌクは、椅子から立ち上がった。そして、両手を腰に当てる。

「なら、最初からそう言え。」

「もしかして、戦士達に怯えてんじゃないの〜?」

「まあ、貴方なら1人も殺せないと思うけれど?」

3人はニヤニヤしていた。

「ふんっ! わたくしがこの手で戦士達を握り潰し、貴方達3人の出番がないようにして
くるわよ。そして、虚構組織長にわたくしのちからを見せ付けてあげるのよ! 覚悟しな
さい! おーほっほっほっほ。」

克蘭ヌクが高笑いをして、そのまま部屋から出ていった。克蘭ヌクはアングリフ
の戦士達に一体どんなことを仕掛けるのか。

呼び名

「今日も、良い天気よかったね！チョコちゃん！」

「わんわん！」

学校から帰宅して、土筆はチョココの散歩に出掛けていた。公園を散歩している間、土筆はお手洗いにいきたくなり、チョココにここで待っててと言いお手洗いの外で待たせた。

「犬だ！可愛い！」

その時、青い瞳の少女と紫の瞳の少女とピンクの瞳の少女がチョココに近付いてきた。萩と董とネソだ。萩は、地面に座りチョココの頭を撫でた。チョココは気持ち良さそうだった。

「わんわん！」

ネソは無表情だったが、次第にチョココを見ていたら笑顔になった。

「何この…動物…可愛い。」

ネソはボソツと呟いた。董はある事が気になった。

「この子、もしかして飼い主に置いていかれたとか？リードはついてるけど…周りに

人の気配ないし。」

「ごめん、チョココ！おまたせ…。」

お手洗いから出てきた、土筆はその光景を見て固まった。

「もしかして、貴方がこの子の飼い主さん？」

萩が立ち上がり、土筆は見つめる。土筆は険しい表情で、萩を見つめる。

「そうですけど、何か文句でも？もしかして、チョコちゃんを連れ去ろうとしました？」

土筆は、チョココを抱き上げた。

「い、いえ違うんです。永緑さん。」

「あ、井村さん！」

董に気が付いた瞬間、土筆の表情は、緩んだ。萩は首を傾げる。

「2人は知り合い？」

「あたしと、井村さんは体育の授業一緒に受けてるんで。あんまり話したことないんですけどね。」

「でもこのワンちゃん可愛いですね！」

董は、チョココを見ながらそう呟いた。

「でしょ？この子の名前は、チョコちゃんなの。チョココの綿飴みたいでふわふわしてるでしょ？」

土筆は満面の笑みで3人に話した。萩は微笑んだ。

「チヨコちゃん、とつても可愛いわよ。永緑さん？貴方に飼ってもらえてとつても幸せでしょうね。」

「あ、あたしの事、苗字呼びじゃなくて名前呼びで良いよ。あたしは、永緑土筆。」

「土筆さん」

「呼び捨てで構わないから。」

「土筆。あ、私の事は井村じゃなくて、董つて呼んでくれて良いから！」

「私は、水鳥萩。萩つて呼んでくれて良いから。」

「私は、神川木通です。呼び方はご自由にどうぞ。」

「董と萩と木通ちゃんね！」

萩は、ある事に気がついた。

「そう言えば、井村さん、私の事水鳥さんつて呼んでくれてたわよね？私の事、萩つて呼んでもらつて良いから。苗字呼びつてなんだか、堅苦しいじゃない？」

「なら、私のことも董つて呼んでくれて構わないから!!ネソさんも、私のこと董つて呼んでくれて良いからね。」

「董さん。。。」

「さんなんていらなから！」

「董…ちゃん…。」

「ちゃんもつけなくて大丈夫よ！」

「董…。」

「それでいいよ！ネソちゃん！」

呼び方を少し変えたただけなのに、なぜか3人の中では絆がちよつとだけ強くなった感じがした。

助けて欲しい

土筆は、董、萩、木通の三人と別れた後も公園でチョココの散歩を続けていた。土筆は新しい友達が出来たと上機嫌だった。チョココも、上機嫌だった。その時、誰かにぶつかった。土筆は、地面に尻餅をついた。

「いった〜」

目を開けると、灰色の髪の毛の女に睨まれていた。すぐに、土筆はその場に立ち上がり頭を下げ謝ったが、灰色の髪の毛の女は表情を変えなかった。

「わたくしの洋服が汚れたら、弁償してくれると言うのかしら？」

土筆は、その女の目の瞳が赤色であることがわかり普通の人間ではないと感じ取った。

「だから、あたしの不注意で。この度は、ぶつかってしまい……ごめんなさい！」

土筆はまた頭を下げ謝るが、女が許す気配はなかった。

「だから、そんなに謝られても困るだけですわ。」

女は胸の前で腕を組んだ。

「もし、服は傷ついていたらあたしが弁償します！なんとか、お許しを！」

「まあ、アングリフの戦士と呼ばれる存在を呼ぶのに使えそうね。貴方は。」
「アングリフの……戦士？」

そう言い女は掌を開いた。

すると、土筆が立っていた地面にひびが入り、土が土筆を襲い、土の中に土筆を閉じ込めた。

チヨコは、女の靴にかぶりついた。

「うっさい犬ね!!」

「わんっ!!」

女は足を高くあげチヨコを向こうに投げ飛ばした。女はニヤツと笑った。

チヨコの体には土がついていた。そして、痛みが走った。だが、チヨコは体をなんとか起こし何処かへ走って行ってしまった。

董達はまだ公園内で歩いていた。

「そろそろ、暗くなってきたし家に帰らないとなー。」

空の色は既に紫色に染まっていた。もう直ぐで、真っ暗になる。

「そうね」

「……ええ。」

その時、董は遠くから犬がこっちに走ってくるのが見えた。

「ねえ、あれって…。」

「え？」

萩とネソは董が指を差す方向を見ると、犬がこっちに走ってきている。その犬がチョコだと気付く。

「どうしたの？」

董はすぐに、座り込みチョコに話しかけた。

「わん！わん！わん！」

チョコは何やら慌てているようだった。董達は飼い主である永緑土筆に何かあったんだと察した。3人は領き、チョコは走り出した為3人はチョコの後を追って走った。

「きつと、土筆の身に何か起こったのよ!!」

「まさか、前まで起きてた何か黒い動物になるあれとか？」

「あれだったら、巨大だからここから見えるはずなんだけど…。」

3人は、過去の出来事を掘り起こしながら、走っていた。

「早く、土筆を助けなきゃ!!」

「そうね!!」

3人は土筆を助け出すことだけ考えていた。

加わった緑の戦士

その場所に着くと、地面の土が一部なくなっていて土が固まり丸い何かが浮かんでいた。それを、ニヤツとみる女の姿が目に入った。

「ちよつと!!」

「はい?」

女は董達の方に振り向いた。女は満面の笑みを浮かべていた。

「何なのよこれ!!」

董が土が固まってできない丸いものを指差すと、女は目を開けた。女の目は赤かった。

「貴方が、アングリフの戦士ちゃん?」

「そ・・・そうですけど。」

「で、紫の戦士ちゃんですか?」

「・は、はあ」

「なら、わたくしに紫の水晶を下さる?今、とーつても必要なものなのよ。」

女は董に手を伸ばす。だが、董はその手を振り払った。女はすぐに手を引つ込めた。

「ふん、わたくしの言う事聞いてくださらないなら抹殺してあげますわ！紫の水晶は貴方を始末した後、頂きますわよ!!」

女がそう言うのと、女の周辺の地面の石が浮き始めた。

「何?!」

「わたくしに従わなかったと言う事を死ぬほど後悔させてあげますわよ!!」

女が掌を開くと、何百個と言う石が勢いよく3人に飛んでいき石が3人にぶつかる。萩は水のバリアで石から避けようとするが、バリアを石は破る。ネソは倒れて、紫の水晶はコロコロと転がり、女の足元へと行ってしまった。女はニヤツと紫の水晶を拾った。

「おーほっほっほっほ、ありがとう。こんな簡単に紫の水晶が手に入るなんて、何てわたくしの運がいい事!」

女がアジトに戻ろうとすると、紫の水晶が光り出した。

「何この光:。」

董が眩しそうに目を細めた。紫の水晶から、緑の小さな光が飛び出し、それは土が丸く固まったものの中にすぽんと入った。

すると、急にバシャンという音がして蔦が土が丸く固まったものの中を突き破り、紫の水晶を女から奪った。

「ちよ！何なのよ！」

すると、今度はバシヤンと固まっていた土が粉々になった。中から土筆が姿を現した。土筆は、浮いていた。土筆の前には緑の水晶が浮かんでいた。土筆は、緑の水晶を手で握り、ゆつくりと地面に落ちてきた。紫の水晶を掴んだ妻は、土筆が手で握った。

「まさか……土筆が、4人目のアングリフの戦士？」

萩は驚いた顔をしていた。

「そう……みたい。」

ネソは小さな声でそう呟いた。

「貴方は誰なのよ!!さっきまではただの人間だった癖に！」

今度は土筆に対して石を何百個と投げ飛ばした。だが、土筆は何本もの蔦でその石を砕いていった。

「なめないで。確かに、さっきまではただの人間でした。でも、あたしを助けてくれる葦と萩と木通ちゃんの声が聞こえて、あたしも一緒に戦わないとって思っただけです!だから、あたしも3人と一緒に戦うの！」

「めんどくさいことになりましたわね。まあ、今回は小手調べで来ただけですわ。さようなら！」

女は、ワープして何処かへ去ってしまった。

土筆は蔦から、紫の水晶を取った。

「ねえ、木通ちゃん：：これ、貴方のもでしょ？」

「私はただ預かってただけ。本当は董のよ。」

土筆は董に紫の水晶を手渡した。

「なんか、忘れてるなーと思っただけどこんな大事な物忘れてたなんて。そういえば、ネソに預けたままだった。ねえ、土筆：：貴方は、信じれないかもしれないけど貴方はアングリフ4人目の戦士なの。だから、一緒に戦ってくれる？」

「うん。正直、アングリフの戦士って何のことかわかんないけど一緒に戦いたい！」

「わん！」

「チヨコちゃん、ごめんね！迷惑かけちゃって〜！」

チヨコは土筆の胸に飛び込み、土筆はそんなチヨコを両手で抱き締めた。

〈第16話〉 4人の溝

「で、戦士達はどんな感じだったのよ。」

「既に3人もいて、1人増えちゃって4人もいたのよ。まあ、今回は小手調べよ。だから、次こそわたくしがこの手で戦士達を潰してあげますのよー!」

「もしかして、てこずってたんじゃないの? 戦士が意外に力強くて。まあ、プライド高いクランヌクならありそうな話だもんね。本当は、戦士にてこずったことを僕達に隠してたくて。」

クランヌクはそう言われると、頭に血が上り、バンつと両手で机を叩いた。その音で部屋がシーンとなった。

「てこずってなんてないわよ! ただ、今回は戦士がどれだけ強いか、お手並拝見しただけですわよ! 勝手に変な勘違いしないでくださる?」

すると、モルケが椅子から立ち上がった。

「勘違いなんかしてないさ。ただ、事実を言っただけさ。」

モルケは余裕そうな表情を浮かべていた。

「今回はモルケが行くか?」

「勿論さ。僕が戦士を倒し、ネイヴィーの幹部に上進させてもらうよ。ドンクレハイツには悪いけど、僕はこの5人から抜けさせてもらうよ。」

チマタは、ニヤニヤした。

「ちよ、何ニヤニヤしてんのよ。チマタ、気持ち悪いわ。」

ダーストニはストレートに言ったがチマタのニヤニヤした表情は、変わらなかった。

「モルケ、アングリフの戦士に恋するんじゃないぞ?」

モルケはため息を吐いた。

「はあ……。そんなわけないじゃん。どうして、アングリフ側の人達に恋しなきゃいけないんだ?それに、僕は愛する人も愛してくれる人も欲しいと思っただけじゃない。ただただ、ネイヴィーの為に、働けるならそれだけでいい。」

言葉では強がっていたが、表情はどこか悲しそうだった。

「まあ、でも貴方。貴方は、戦士達により近づく為に戦士達がいる学校に転校するのよね?」

「まあね。まあ、僕の年齢は14歳だしバレないっしょ。」

そう言うと、モルケは指をパチンと鳴らした。床から、水が湧き上がってきてその水はモルケの姿を消した。

「戦士の誰かに恋をして、それがバレて抹殺されればいいのになぁ?」

「本当、クランヌクはモルケの事が嫌いだな。」

「当たり前ですわ。まあ、わたくしだけでも簡単に戦士を倒せますけれど。同じ所にいる以上、貴方達の力も見させていただきますわよ?」

「望むところよ。クランヌクの力こそ、見てあげるわよ。」

「だが、戦士は必ず俺が倒してやるからな。その日まで楽しみにしててくれ。」

4人は果たして、董達を倒せる日は来るのだろうか。そして、ネイヴィーの幹部として上進する日は来るのだろうか。

土筆のクラスに転校生

あたしのクラスでは、転校生がいて担任が転校生を紹介した。

「今日から、このクラスで皆と一緒に勉強することになった光徳樞君です。皆、樞君は初めてこの学校に来たからわからないこと多いと思うから、色々教えてあげてね。じゃあ、自己紹介宜しくね。」

「どっ、どうも。初めまして……こ、光徳し、樞です。き、今日から皆さんと一緒に勉強することになりました。よ、宜しく願います!」

転校生が頭を下げると、スクールカースト上位層の女子達が、きゃーと叫び始めた。

「イケメン!」

「かつこいいい!」

「紳士そう」

「狙っちゃおうかな〜。」

スクールカースト上位層の女子達は、転校生に釘付けだった。横の席に座っていた駿河があたしを見てきた。駿河と目が合った。

「えー、もしかして転校生君に惚れちゃったとか?」

「はー?!そんな訳ないから!!」

大声を出してしまつた。はつと我に返ると、他の人達の視線があたしに向いていた。先生は呆れていたようだった。

「永緑さん?静かに!」

「は、はーい」

なんで、たまたま大きな声出ちやつただけなのに注意するのか。まあ、声がでかくなつたあたしが悪いんだけど。それよりもあたしに注意する癖に、わーわーきゃーきゃー叫んでたスクールカースト上位層は、注意しないんだろ。

「じゃあ、光徳くん。席は、夏我さんの隣の席ね。」

転校生は、歩いて行き夏我さんの隣の空いている席に座つた。因みに、夏我さんの席はあたしの後ろでその左隣の席だから、転校生はあたしの斜め後ろの席で駿河の後ろの席だ。

「初めまして。夏我さんだっけ?隣の席同士仲良くしよ!」

「:よ、宜しくお願ひし、します。」

夏我さんはどうやら、緊張しているようだった。

「夏我さん、そんなに緊張しなくても大丈夫だから!」

「わ、私: : 初対面の人と何話せばいいか分からなくて:。」

「話の話題は、これから見つけていけば大丈夫さー！」

転校生と会話をする夏我さんを、スクールカースト上位層は許すはずがなかった。
1 時間目は体育の時間。

体育の授業は男女別々だ。準備体操が終わり、お手洗い休憩になりお手洗いに這うとしたら、お手洗いの前でスクールカースト上位層のリーダーとその取り巻きの3人が緋桐を壁に追い詰めていた。あたしは、近くの茂みに隠れ会話を聞くことにした。

「あんたさ、どういうつもり？まさか、楳君と付き合おうってんじゃないわよね？」
「そ、そんなつもりは……。」

「正直に言いなさいよ！泣いても、許さないわよ？」

夏我さんは、涙目になっていた。頭に血が上り、あたしの怒りが爆発寸前だった。夏我さんは何もしていないのに。

「きゃー！！」

あたしがはつと我に振り返ると、スクールカースト上位層のリーダーとその取り巻きの3人を鳶で腕と足を縛ってしまった。両手で鳶を掴んでいて、その鳶は4本に分かれ4人の腕と足を縛っていた。取り巻きがあたしの存在に気が付いた。

「ち、ちよつと！土筆！辞めなさいよ！」

「体育の授業受けなくなっちゃう！」

あたしは、4人の足と腕を縛っていた鳶を引っ張り、4人から鳶を離した。

「あんた、魔女だったのね！」

「覚えてなさいよ！」

4人は、体育の授業へと戻っていった。夏我さんは、あたしを見て頭を下げ体育の授業へと戻っていった。

「……戻ろっか。」

心強さ

土筆は、董とネソと一緒にアングリフ本部へ来ていた。その理由は、組織長に挨拶するので、土筆が緑の戦士である事を伝える為だ。

「失礼します。組織長。」

ネソは、組織長室の扉を開けた。組織長は、笑顔で3人を部屋に迎え入れた。

「で、何かあったの?」

組織長が椅子に座る。

「はい。見つかりました。アングリフの4人目の戦士が。緑の戦士です。この子です。」

土筆は緊張しているようで、体が固まり表情も固まっていた。そんな土筆に組織長は微笑む。

「良いのよ。緑の戦士さん?そんなに固まらなくて。」

「す、す、す、すみません。こういう場所ってなんか緊張してしまうというか、余計な事をしてしまうんじゃないかと。あ!は、初めまして。あたし永緑土筆と申します。」

土筆の頭の中は、真っ白になっていた。学校なら初対面の人と話してもそうはならないのに。

アングリフの組織長との挨拶を終え、折りたたみ式の携帯電話も渡された。緑の水晶についても説明を受けた。あとは陽毬と挨拶するだけだ。董がコンコンと陽毬の部屋をノックした。すると、ドアが開き陽毬が部屋から出てきた。

「あら、こんな時間に来るなんて珍しいわね。」

「あの、実は緑の戦士見つかりました！」

そう言う董は、横にどいた。土筆は恥ずかしそうに俯いていた。

「は、は、初めまして！永緑土筆と申します！よ、よ、宜しくお願いします。」

「私は、降霊陽毬です。宜しくね、土筆ちゃん。」

陽毬が手を差し出すと、土筆はその手に手を重ね2人は握手をした。

「陽毬さんはすごく優しいんだよー、土筆は隣のクラスで体育の授業一緒に受けてるんですけどすごい運動神経抜群で、きつとこれから戦う時は頼りになると思います！」

「運動神経抜群なら、3人も心強いわね！良かったわね。仲間ができて！ネソ！」

土筆は顔を赤くして照れていた。

「いや〜それほども〜。」

「（あれ、私……董が来る前までは敵からアングリフを守るのに1人でも充分だったはず

なのに。あれ、私…… 1人じゃアングリフを守れなくなつてしまつている？」

ネソは自分の掌を見た。

「ネソ？」

陽毬は心配してネソの顔を覗いた。

「え、ああ。何でもないわ。ごめんなさい。」

陽毬はある事に気がついた。

「(あれれ？ネソつて、前までは謝罪の言葉も心が籠つてなくて感情ない感じだったけど、今は感情がある気がする……。ネソも人間のはずなのに。)」

「まあ、何はともあれ土筆が仲間になつてくれたから、負ける気がしない！」

董は自信満々にそう呟いた。

「勿論、何かあつたら駆け付けてあげるから！」

土筆はそういうと董の肩をポンと叩いた。

デタラメな噂

次の日のこと。

土筆は投稿して、机に中学校専用のリュックサックを置いた。すると、例の4人が近づいて来た。

「何。」

「何よ、そんなに私が近づいてくるの嫌？」

「そう。だから、近づいてこないでくれる？」

土筆は面倒くさそうな表情をしてリュックサックから筆箱を取り出し、机の上にポンと置いた。スクールカースト上位層のリーダーはそんな土筆にイラついたのか土筆の机を両手でバンと叩いた。すると、教室がその音に静まり返った。

「調子に乗ってんじゃないわよ！この魔女目！」

スクールカースト上位層のリーダーは、わざと教室にいるクラスメイトに聞こえるように大きな声でそう叫んだ。

「だから、あたしは魔女じゃないって！どこから見ても普通の人間です！」

「はあ？あんに私達4人が罵で縛られたんだから！それに、普通の人間だったらあんな

な罵なんて普通は出せませんけど?」

「見間違えなんですよ?」

リーダーは駿河と目が合い、ニヤニヤしながら駿河に近寄った。

「ねえ、駿河くん? 土筆はね、魔女だから近寄らないほうが良いかもよ? 駿河くんももしかしたら魔女に怪我させられちゃうかもよ?」

駿河は立ち上がった。

「俺は、土筆とは幼稚園の頃からの付き合いだが土筆は根っからの人間だ! 魔女とか言うデタラメな噂を流すのは辞めろ!」

駿河は胸の前で腕を組み、足を肩幅まで開き仁王立ちした。そして、4人の中のリーダーを睨んだ。

「…す、駿河:。」

「あ、あと! 樫君も、土筆に近寄らないほうがいいと思います!」

リーダーはニコニコしながら、樫にそう言ったが樫は無表情のままだ。

「誰と関わろうが誰に近寄ろうが僕には関係ない話。正直、どうだっていい。」

そう言い残し、樫はお手洗いに行ってしまった。

「もう何なのよ!! 私折角忠告してあげてるのに!! 樫君も駿河くんも!! ムカつく!!」
そんなやり取りを緋桐は、黙って見ていた。心の中である事を思いながら。

「私のせいで、永緑さんがいじめられたらどうしよう。でも、あの薦は何なのかしら。」
緋桐は私を助けてくれたことで、土筆がいじめられたらどうしようかと不安になっていた。もし、土筆がいじめのターゲットになったら、助ける事ができない。土筆は助けてくれたのに。

正直、緋桐は助けてくれるまでは土筆のことが苦手だった。だけど、こんな私を助けてくれて土筆は気が強いけど、優しいんだと気が付けた。でも、悪魔でもクラスメイトという関係だけで友達でも親しくもない。

だから緋桐は友達と呼べる存在を作りたいと思い始めた。

赤いリボン

陽毬は、自分が住んでいる街をアングリフ本部の屋上から見下ろしていた。風が吹いていても気持ちいい。それに今日は雲一つない晴天だ。髪を靡かせながら手摺りに両手を置いていた。

すると、後ろから足音が聞こえてきた。後ろを向こうとしたら後ろから誰かに抱き締められた。身長が高い人。

「陽毬。」

声だけで誰かわかってしまった。

「その声は純希？」

そう聞くと純希は、手を離し、隣に立った。

「声だけでわかってしまうとは。流石だ。」

純希は手摺りに手をあてた。

「急にどうしたの？」

「君を探してた。」

「私を？」

純希は懐に手を伸ばし、あるものを取り出した。それを陽毬の掌にのせた。「君にあげたかった。長い間、ずっと渡したかった。」

赤いリボンだった。グシャグシャになり一部の色は、変わり果てていた。新品ではないと見た目でわかった。陽毬は、赤いリボンを見つめた。

「そ、そう……。」

「出来ればずっと持っていて欲しい。」

「……わかったわ。」

どうして赤いリボンは、こんなにもうグシャグシャだったのか謎だった。だが、陽毬は敢えて聞かなかった。聞いたらいけない気がしたから。

「さつき、あいつらが言っていたことは本当なのか？」

夕日の下。土筆と駿河は一緒に下校していた。土筆は駿河から目を逸らす。

「あたしが魔女って話？」

「それ。」

「あたしは……。」

喉を詰まらせた。駿河は、不思議そうに土筆を見つめた。土筆は、言いたい事あればはつきり言うのに。

「土筆?」

「:。普通の人間に決まってるじゃない!あいつらが言ってたことはデタラメに決まってるじゃない!もうー!あーはーはー!」

土筆は必死に、笑って誤魔化した。だが、植物の魔法を使えるのは事実だ。

そんな2人を遠くの木からモルケは見つめていた。

「あら、もしかしてあの女の子と好きになっちゃった?」

「え?!」

話しかけてきたのは、克蘭ヌクだった。モルケはため息をついた。

「はあ。そんなわけない。それに、何で僕があんな人を好きにならなきゃいけないんだよ。勝手な憶測やめて来んない?それに、あいつは全然僕のタイプじゃないし。」

モルケは克蘭ヌクを睨んだ。

「あーらー、ほんつとうに面白くない男ですわね。」

「一体、克蘭ヌクは僕に何を望んでいるんだ?!」

「最初から、貴方には何も望んでいませんわ。」

「だったら一体何で:。」

「まあ、わたくしからすると貴方がどうなってしまうてもいいのですわ。わたくしには関係ないのですから。組織長に抹殺されても知らないですわよ?」

そう言いクランヌはその場から去っていった。モルケは空を見つめた。

〈第17話〉4人で一緒に

昼休みの事。萩は董がいるクラスを訪れていた。

「で、用って何？」

「明日から、一緒に4人でご飯食べない？」

「4人って？」

「董とネソと土筆と私の4人！」

「あー!! いいね! でも、何処で食べるの？」

「屋上よ、屋上！」

「良いね！」

「つてことで、ネソにもそう伝えといてね! 宜しく！」

そう言い萩は教室へと戻っていった。その数秒後ネソが図書室から戻ってきた。

「何かあったの？」

「明日から4人で一緒に屋上でご飯食べようだって。良いでしょ？」

ネソは少し躊躇ったが、頷いた。

次の日の昼食。4人は屋上にシートを引いてご飯を食べていた。4人以外にも数個のグループが屋上でご飯を食べていた。

「わあ、美味しそう!」

ネソの弁当に土筆は、目をキラキラと輝かした。

「あー、これは昨日のアングリフの食堂の残り物。弁当におかず詰めたのは、陽毬なんだけど……。食べる?」

「良いの?!」

「うん。こんなに食べれないから。」

土筆は箸で、ミニハンバーグを摘んだ。そして、口の中に運んだ。

「ん!美味しい!」

「董の弁当も美味しそうね!」

「そう?これも、ネソと同様アングリフの食堂の残り物で、陽毬さんがおかずを詰め込んでくれたの!萩の弁当も土筆の弁当も美味しそう。」

その時、担任の先生が屋上にきた。そして、4人がいる場所まで歩いてきた。

「土筆さん。ちよつと職員室まで来てください。」

「え、あ、はい!」

土筆は、弁当を萩に預け職員室に担任の先生とともに行ってしまった。何かあったん

じゃないかと3人は心配になった。

「何かやらかしたとか?」

「活発な子だから。。。可能性はあるわ。それよりも、土筆の弁当箱どうする?」

「あと12分で昼休み終わっちゃうし。戻ってくるかわかんない。。。チャイムなったら教室戻って、土筆の弁当箱はクラスの人に土筆の机の上に置いてもらおう。」

「なあ、柊?」

「何か用?」

駿河は柊にある事を聞こうとしていた。

「土筆が魔女だって信じるか?」

「。。。信じないと言うか、そんな事どうだって良い。魔女だったとしても僕には関係ない事さ。それに、自分が魔女だったら1番知ってるのは本人じゃないの?」

「だよな。。。」

駿河は俯いた。

「どうして、そんなに他人を心配するんだい?」

柊は無表情でそう聞いた。

「他人じゃない!彼女とは幼馴染で、1番付き合っても長くて。俺の中で欠けてはいけな

「い1人なんだよ！」

「（もしかしたら、こいつをうまく利用すれば紫の水晶が簡単に手に入る？）」

疑われない心

「何ででしょうか？校長先生。」

職員室と言っていたが、連れて行かれたのは校長室だった。校長先生は硬い顔だった。

「君に一つお尋ねしたい事があるんだ。他の生徒からある苦情が来た。それは、君が植物を操って、首を絞められた。そんな苦情だ。もし、それが本当なら君は生徒指導にあげなければならぬ。実際の証拠はない。本当かね？」

薦で首を絞めたのは紛れもない事実だった。だが、土筆は否定した。

「そんなわけありません。あたしは、何処からどう見たって普通の人間です。その生徒があたしを嫌ってるからデタラメに言ってる、あたしを無理やり追い込もうとしてるだけです！」

「そうか……。」

放課後、駿河は櫛に連れられカフェに来ていた。カフェでは駿河はショートケーキを食べ、櫛はアイスコーヒを飲んでいた。

「どうしたんだ？急に。俺を誘ってきて。」

「気分転換も大事だと思つて。」

「にしても、櫛つてコーヒー飲んだな。そのコーヒー、前に頼んだ事あつたんだが結構苦いかつた奴じゃないか。櫛つて大人っぽいな。。」

「僕はそう言うクリームがたくさん載つた甘いものは苦手なんだよね。」

駿河は苦いコーヒーを飲む櫛に感心しながら、ショートケーキにのつていた苺を、ホークに刺し口に運んだ。

「じゃあ、ショートケーキお願いしますわ。」

何処からか聞き慣れた声が聞こえてきた。櫛が通路の向こう側を見ると、そこには克蘭ヌク、チマタ、ダーストニの3人がいた。わざわざ見に来なくても良いとモルケは心の中で思った。モルケは制服姿だった為、3人に見られたくなかつた。

「櫛？どうした？」

駿河の声で、モルケは今は櫛と言う事を思い出した。櫛は首を横に振つた。

「な、な、なんでもないよ。」

そう言い焦つて櫛は、コーヒーカップを口に運び、一口コーヒーを飲んだ。そして、コーヒーカップをコトンとテーブルに置いた。

「相談あれば、俺が乗るぞ？」

「…もし、本当にあの子が魔女だったらどうする？」

「え？」

櫛からの予想外の質問に駿河は、戸惑った。

「もし、魔女じゃくて普通の人間で魔法を使えたらどうする？」

「まさか、櫛もあいつらの話信じてるのか?!言っておくけど土筆は、俺と幼馴染でそんな素振り見た事ないぞ！」

「…そうか。」

そう言い櫛はまた、コーヒーカップを救い上げ口付け余りのコーヒーを全部飲み切ってしまった。駿河は、残りのショートケーキをフォークに刺して口に運んだ。

「もし、きみが誰かに拐われたとしたらあの子は迎えにくると思う？」

「…それは、どうだか…。」

フォークを皿の上に置いた。駿河は櫛に怯えていた。

邪魔者

カフェから出てきた2人は、路地裏に来ていた。カフェの入口がある表通りは人が多い。だが路地裏は人がいなく静かだった。駿河は生まれた頃から4つの組織に仕切られているこの街に住んでいて、店が立ち並ぶ表通りにはよく行くが、路地裏にはきた事がなかった。

「密つてこう言う人がいなくて静かな所好きなのか？」

そう聞いた瞬間、密は急に立ち止まった。

「……」

「密？」

すると、急に密はこつちに振り向いた。そして、制服のズボンのポケットから銃を取り出し、駿河に向けた。駿河は、銃に驚いて尻餅をついた。

「黙つとけば？」

「し……きみ？」

「幸い、僕は君の命を狙ってはいないから撃たないよ。でも、その代わりにアングリフの戦

士達を寄せつけるために僕の言いなりになつてもらおうよ。」

「… アングリフの戦士?」

駿河はアングリフという組織を聞いた事があるが、戦士までは聞いた事がなかった。

「きつとアングリフの戦士は、ピンチの人に駆け付けて助けるだろうから。まあ、僕のお目当てはアングリフの戦士の、紫の戦士が持つてる紫の水晶なんだけどね。」

すると、急に櫛は銃を地面に投げ捨て両手で駿河の首を絞め始めた。

「ん… ぐっ!」

数秒すると駿河は意識がなくなった。櫛は指をパチンと鳴らした。すると、駿河が水に包み込まれ浮いた。

「ずっと眠つててよ。アングリフの戦士が君を助けるまで。」

するとコツコツと後ろからヒールが床を踏む音が聞こえた。

「あら、流石ね。つまり貴方は戦士らしき人の友達を利用して、戦士達をここまで来させるって作戦ですね?」

櫛が振り向くと、クランヌク、チマタ、ダーストニの3人がいた。

「僕が考えた作戦なんだから、邪魔しないでよね。」

櫛は胸の前で腕を組んだ。

「あとは4人で仲良く戦士達を待つのはどうでしょうか?」

「嫌だね。ここまで僕が1人でやってきたのにさ。都合良すぎるよ。」

「私は別に4人で戦士たちを待ったほうがいいと思うわよ?」

「そうだな。そうすれば、モルケが戦士にやられる確率が減るからな。」

ダーストニとチマタは、克蘭ヌクの意見に賛成したがモルケは克蘭ヌクの意見を認めなかった。

「2人が賛成しても、僕は絶対嫌だね。なんで、君たち3人と力を合わせなきゃいけないんだい?紫の水晶くらい僕1人の力で手に入れるし、それに戦士達も僕1人の力で倒せるから。元から君たちの力を借りたいなんて思っていないし。」

「分かち合いはとても必要よ?それに、上手く紫の水晶を奪えたらドンクレハイツより上の位に立ってドンクレハイツを潰せる可能性がありますのよ?」

「誰を潰せるって?」

「ひっ……。」

克蘭ヌクが後ろを向くとそこにはドンクレハイツがいた。ドンクレハイツは笑顔だった。

「いたの?!わたくし、なーんにも気がつきませんでしたわ。」

「で、誰を潰せるんだって?」

「… アングリフを潰せるって言いましたのよ。」

「なんだ、俺の聞き間違えだったみたいだな。まあいい、しっかりと戦士を全員倒すんだぞ。お前達よ。」

そう言いドングレハイツは空高くジャンプして、何処かへ行ってしまった。

「作戦失敗してもいいんだぞ。モルケ。」

「貴方には最初から何も期待してなかったわ。」

「戦士達を余裕で握り潰せるというなら、本当に戦士達握り潰してみせなさい?」

「ふん。僕の作戦に邪魔したら、ただじゃおかないから。」

水に包み込まれ眠りにについている駿河をじーつとみて、櫓はニヤついた。

助けたい命が、ある

あれから2日。駿河はモルケに拘束されている為、誰も駿河の姿を見た者はいなかった。駿河の両親も、駿河を捜している。一方、楢はいつもと変わらず学校に来ていた。

「ねえ、楢君。」

楢に話しかけてきたのは土筆だった。土筆は、真剣な表情をしていた。

「何?」

「こないだ……駿河が休む前の日に、一緒にカフェにいたでしょ?その時、駿河の体調悪くなかった?変わった様子なかった?」

「じ……実は、あの後モルケっていう男が、駿河を襲ったんだ。その後は知らないけど……。助けようとしたけど僕は無力だったから、無理だった。」

「わかった。教えてくれてありがとう。今日、駿河を助けてくるから安心して!」

そう言い土筆はその場から去っていった。今はまだモルケと言う男の正体がバレていないが、すぐにバレるだろう。楢はそう思った。

放課後、土筆は一人で路地裏に來た。路地裏に來ると駿河が氣を失っているみたいで壁に背中をつけていた。土筆は、駿河の肩を揺するが反応がない。

「肩を揺すつて、起こそうとしても無駄だから。」

後ろから何処かで聞いたことのあるような声が聞こえた。土筆は、後ろに振り向くとそこには櫛がいた。

「し、櫛君！もしかして、駿河のことが心配で。」

「違う。僕は本当は櫛ではない。」

「え？」

土筆は、思考が上手く回らず困惑していた。

「そう思うのも仕方ないだろう。僕の本当の名前はモルケ。ネイヴィーの下っ端さ。」

「ね、ネイヴィー？でも、櫛君が言つてたモルケって誰？」

「モルケつてのは僕の本当の名前。光徳櫛つてのは人間達の世界に違和感なく混ざり込むためのだけの、名前さ。」

クラスメイトである櫛は、駿河を拘束したモルケと同一人物だった。

「モルケつてのは……あんたなのね。」

「でも、僕達は同じクラスメイト同士仲良くしようね。」

「でも、どうして駿河を拘束したのよ！」

「そんなの簡単さ。アングリフの戦士と呼ばれる人達を、ここにおびき寄せ、ここに利用したんだ。流石にアングリフの戦士達を全員ここに連れてくるのは僕が負けそうだから、1人ずつ抹殺して行こうと思うんだ。」

「そう言うことね……。わかった、でもあたしは貴方に殺されなんかしない！そして、駿河は返してもらおうから!!」

モルケは土筆を指さした。すると、水がモルケの指から水が飛び出した。水が固まり、青い石になり土筆にとんでいった。土筆は、掌に長い木の枝を出し振り回しながら、青い石を引き裂いていった。

始末

青い石を砕くのに、土筆は相当体力を奪われたようだった。長い枝を地面に刺し地面に両手をつき、座り込んだ。

モルケはふつと口を歪めた。そして右の掌を開き、土筆に向けた。モルケの手から水が勢いよく飛び出し、それは土筆に勢いよくとんでいった。そして、土筆にぶつかり爆発した。

モルケは、勝利を確信したかのように煙が消えるのを待った。だが、煙の奥に土筆ともう2人の影があることに気がついた。それは青

い瞳と紫の瞳の土筆と同じ制服を着ていた。「だ、誰だ！」

「誰って、私達、土筆の友達ですけど？ 私達は友達を助けるために来たの！」

「は、萩……。」

「土筆、大丈夫？」

「うん、ありがとう…… 董。」

董に差し出された手に、手を乗せ土筆はその場に立ち上がった。

「なら、全員まとめて始末して、あとは紫の水晶を探し出し奪うだけだね。」

「貴方、まさか紫の水晶を狙っている組織の組織員なの?！」

萩はそう言うのと、モルケを睨んだ。

「ふっ、改めて自己紹介しよっか。僕は、ネイヴィーの組織員さ。上から紫の戦士を倒せと命令されている。だけど、戦士全員始末して、紫の水晶をいただくよ。」

モルケが目を見開くと、地面から水が飛び出し3人を投げ飛ばし、3人は地面に落下した。

萩は、痛みをこらえゆらゆらと、その場に立ち上がった。

「ぜっ… たいに、董は死なせない…、紫の水晶も貴方達なんかにあげないからっ…。」
「つまり、その董が紫の戦士と言うことで、紫の水晶を持っていると言うことだね?それがわかっちゃえば、後はもう楽勝さ。」

「なっ!!」

萩は口を滑らせてしまった。

「なら、まずはお前達2人から始末しよう!!」

またモルケが目を見開いた瞬間、土筆は手に蕁を出現させ、蕁を握り投げ縄のように蕁を投げ、蕁でモルケの首を絞めた。

「萩も、董も死なせないから!!アンタはあたしの敵ってことがよくわかったから容赦しないから!!」

「あ、れ……土筆？」

駿河はうつすらと意識が戻り、目を少し開くと、そこには土筆が蔦で櫛の首を締めつけているのを見てしまった。駿河は、夢なんじゃないかと思つたが現実だつた。

そして、櫛は苦しくなりその場に仰向けで倒れた。土筆は、はつと我に返り蔦を手から離れた。その光景を見ていた駿河は、その場に立ち上がった。

「お、おい!!何、櫛を殺してるんだ!!」

「駿河、お願い……櫛は悪い人なの!あたしを信じて!」

「信じねえよ!」

そんなやりとりをしていると、急にどこからか炎が出てきて、炎の中から背の高い男が現れた。そして、その男はチマタを担いだ。

「残念ながら、モルケは死んでいない。気絶してるだけだ。」

「お、おい!櫛は、今から病院に連れて行くから、離せよ!」

「そんな必要はない。モルケは、お前達に何も感情はないからな。」

男がそう言うのと、男は火に包まれ火が消え去るとモルケも居なくなつていた。

「土筆は櫛を殺そうとした。」

櫛はいきなり口を開いた。

「違う!本当に土筆を信じて!あの人は私達にとって悪なのよ!私たちの世界を壊そう

としてるのよ！」

萩が説得に入った。

「……土筆の友達か？すまないけど、いくら何でも土筆の友達と言っても信じれねえよ。」

董は3人のやりとりを黙ってみていた。

「で、でも！」

「土筆が櫛の首を絞めて殺そうとしていたことは、事実だ。」

その後何も言わず、駿河はその場から去っていった。土筆の目は潤んでいた。

〈第18話〉分かり合えない人達

「へえ、チマタに運ばれたのね」

「結局、戦士達殺せなかったのですわね？本当、男なのにダサイことですこと！」

「今回は、調子が悪かったただけだし。それに、クランヌクもよく人の事言うよね。クランヌクも戦士達を殺せなかった癖に。」

「だから、あれはほんの小手調べって言ってるじゃない！」

あの後、チマタに担がれたモルケは、ネイヴィーの病室で一命を取り留めた。

「次、誰が行くんのだ？」

「私が行くわ。」

そう言ったのはダーストニだった。ダーストニは、椅子から立ち上がった。そして、チマタを睨んだ。

「その自信どこから湧いてくるんだ？クランヌクもモルケも戦士達を倒せていないのに。」

「私を舐めないで。2人とは違うわ。必ず私が戦士達を殺し、紫の水晶を奪うから。そして、もうこんな場所から出てくから。」

「そんなに、戦士達をやるならやってさつさと、こんな所から出て行きなさいよ！まあ、わたくしよりの力で戦士達を殺せなかつたんだから、わたくしより力が弱い貴方はもつと無理ですけれど？おーほっほっほっほ！」

克蘭ヌクの高笑いが部屋中に響き渡る。モルケは耳を出て塞ぎ、チマタは、呆れた表情をした。ダーストニは、表情を変えなかつた。

「つたく、克蘭ヌクのせいで耳が痛いよ！どうしてくれるの！」

そう言い手を、耳から離れた。

「わたくしがごめんなさいって謝れば、満足ですの？」

「謝っても、耳の痛さはどうにもできないからね。」

「そんな事どうでもいいわ。まあ、私が戦士達を殺してくるから。3人は体を休めてるといいわ。じゃあ、さよなら。」

そう言いダーストニは、黒い渦に包み込まれ黒い渦がなくなるとダーストニは消えていた。モルケは、椅子に座り胸の前で腕を組んだ。

「ほーんと、ここってさ自己中人達しかいないねえ。」

「当たり前だろ。俺は、自己中なんかじゃない。ちゃんと、お前達のことも考えてるが、同類にしないでくれ。」

「はあ？わたくしこそ、貴方達と同類にされるのは、まっぴらごめんですわ！わたくし

は、絶対に自己中心的不是なんですわ。貴方達3人が自己中心的で、わたくしがそんな3人の中にいるから自己中心的に見えるだけですわ。」

「まあ僕から見ても、チマタも克蘭ヌクもダーストニも、自己中なんだけどね！まあ、いや。明日学校あるからもう寝るよ！おやすみ！」

モルケがそう言うのと水がモルケを包み込み、モルケもいなくなつた。

「ふっ…。」

チマタがそう呟くと、火がチマタを包み込みチマタも消えた。

支えてくれたあの人の存在

あの出来事から、駿河は話してくれなくなってしまった。櫛くんは、何事もなかったかのように普通に学校に来ている。でも今思うと、あのモルケを担いだあの男は、一体何だったのだろうか。きっと、櫛くんの仲間なんだろうと思うけど。駿河に話しかけようとしても、駿河はどっかに行ってしまう。一回壊れた、男女の友情と言うものはもう直ることはないのだろうか。あたしが駿河はあんなに仲良かったのに、急に仲が悪くなった事に周りの人達も不思議そうに見ているんだらうね……。

「土筆！」

「うぐっ！」

「もう、ぼーっとしてどうしたの？」

萩に肩を強く叩かれ、はっと我に返った。そうだ、今は董と萩とあたしと……ネソちゃんで昼飯を食べているんだった。どうやら、あたしは駿河との事を考えちゃってぼーっとしちゃってたらしい。ネソちゃんと董は、モグモグとご飯を食べていた。そういえば、ネソちゃんって人、この学校にいたつけと思つた。入学式の時点ではネソという名前は聞いたことが無かつた。転校でもしてきたのかな？

「そういえば、ネソちゃって… 本名ネソっていう名前？」

そう聞くとネソちゃんは、弁当を床に置き箸を弁当箱の上に置いた。

「私は… ネソっていう名前は… 組織での名前にして、学校での名前は神川木通です。本名は、ネソなんです。だから、名前呼ぶ時はネソでも木通でもどちらでも構いませんので。」

そういう事だったのか。ネソちゃんの説明であたしは納得した。でも、董と萩がネソちゃんを木通ちゃんじゃなくてネソちゃんって呼んでるから、あたしも2人に合わせよつと。

「いやー、なんかごめん！あたしってネソちゃんと董ちゃんのクラスと一緒に体育受けてるんだけど気付かなくて本当ごめん！正直、2人と関わることになるとは思わなかったからさー。」

「いやー、私も土筆が緑の戦士って知った時はとつてもびつくりしたよ！運動神経抜群な子が私達の仲間なんて！」

董はそう言いながら、卵焼きを箸で口に運んだ。正直、あたしは自分が運動神経が抜群なんて思ったことなんてない。大事な大会の前によく怪我するし、それに部活も退部してしまっただから。でも、そんな時にいつもそばにいてくれるのは、駿河だった。

でも、駿河はもうあたしの事嫌いになっちゃったと思うしきつと話をする機会もない

のだろう。でも、そんなのは嫌だ。せめて、駿河との仲を直したいし、また一緒に帰りたい。駿河と死ぬまでに一回も話せないのは嫌だ。

放課後の図書室での出来事

放課後。櫛は、図書室で本を探していた。その本は、担任の先生からお勧めされた小説だった。駿河は、ネイヴィーの組織員でアングリフの戦士とアングリフにとっては敵であるが、土筆にとっては敵でありクラスメイトであった。

「あれ、この辺にあるはずなんだけど？」

「何か探していますか？」

櫛は、誰かに声をかけられ横を見るとそこには同じクラスメイトである、夏我緋桐がいた。緋桐は、微笑んでいた。

「あつと…この小説探してて…」

櫛は、小説の名前が書かれた紙を緋桐に見せた。緋桐は、紙を受け取り小説の名前を確認した。

「あ、これですね。」

数秒すると緋桐は、本棚から一冊の本を取り出して櫛に渡した。櫛は、本を見ると確かにそれは探していた小説だった。

「ありがとうございます…。」

柊は、言い慣れないお礼を言うのと緋桐は、微笑んだ。

「どういたしまして。そ、そういえば：隣席なのに全然お話しした事ありませんでしたよね。」

「あ、そういえば：。」

「今更自己紹介なんて、あれかもしれません：。私の名前は、夏我緋桐と申します。宜しくお願いします。」

「もう僕の名前知ってると思うけど：。僕は、光徳柊と言います。よ、宜しくね！緋桐ちゃん。」

「こちらこそ宜しくね。柊くん。図書室についてはどの本がどこにあるとか知り尽くしてるから、もし探してる本が見つからなかったら遠慮なく聞いてね！」

「ありがとう。」

柊は笑顔でお礼を言った。柊は心の中で、緋桐ちゃんはとても頼りになりそうだと確信していた。だが、本来の目的はアングリフの戦士に近づく為、普通の中学生としてして近付いている。それが、組織とは何も関係ない一般人にバレてはいけない。例え、緋桐と親友になったとしても隠し事を通さなければならぬ。

「に、しても柊くんって深い物語が好きなの？」

「うん。やっぱりこう言う深い物語って、最後まで読んでけばこう言う事だったのか！つ

「繋がるから最後まで読んじやうんだよね。」

「私も……。内容が浅い小説より深い小説の方が読み応えがあるって言うか……。結末が気になって最後まで読んじやうんだよね。櫛くんの気持ちよくわかる……。」

緋桐は、櫛とならば本当の友達になれそうな気がした。

「あ、内容が深い小説で他にもお勧めなのあったら教えてくれない？その小説読んで感想言い合いたいなって！」

「うん！勿論！」

「そういえば、緋桐ちゃんって帰らなくて大丈夫なの？」

「う、うん。訳あって家に帰りたくないの……。家に帰っても、家族にこき使われるだけだから……。それなら放課後に図書室で勉強してたり本読んでた方が楽だから。」

夕日に照らされる緋桐の表情は、どこか悲しげだと櫛は感じた。